

La liberté et la puissance de l'intuition chez Bergson : À travers le temps qui " agit " et la force de négation

Kazuhiko Hirano

▶ **To cite this version:**

Kazuhiko Hirano. La liberté et la puissance de l'intuition chez Bergson : À travers le temps qui " agit " et la force de négation. Philosophie. Université Toulouse le Mirail - Toulouse II; Ôsaka daigaku, 2012. Français. NNT : 2012TOU20048 . tel-00752855

HAL Id: tel-00752855

https://theses.hal.science/tel-00752855

Submitted on 16 Nov 2012

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire **HAL**, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

ベルクソンにおける自由と直観について

―「働く」時間と否定の力を通して―

平野　一比古

2012 年 6 月

大阪大学大学院　文学研究科

博士学位申請論文

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

目次

序論 ----1
第 1 章　時間―出発点― ----4
第 1 節　ベルクソン哲学の「出発点」 ----4
(1)　「働く」時間とは何か
(2)　ベルクソン哲学の「出発点」の明確化
(3)　二つの出発点
a　二つの出発点の比較
(a)　PER の出発点
(b)　『試論』の出発点
(c)　二つの出発点の対応関係
b　PER の出発点と『創造的進化』の叙述の比較
c　PER の出発点の叙述はどこまでが出発点か
第 2 節　出発点と自由 ----16
(1)　法則的な決定論を否定する考察
(2)　「働く」時間の位置
第 3 節　出発点の反省と否定の力を持つ直観 ----21
(1)　否定の力を持つ直観
a　直観
b　否定の力を持つ直観
(2)　ベルクソン哲学の反省の出発点と否定の力を持つ直観
(3)　否定と直観
第 4 節　出発点における否定の力を持つ直観と持続の直観 ----25
(1)　二つの直観
(2)　二つの経験
(3)　「働く」時間と持続
a　持続の観念
b　「働く」時間と持続
c　時間的あり方
(4)　二つの直観の関係―問いと答え
第 5 節　出発点の反省の重要性 ----31
(1)　自由や直観など他の概念との緊密な関係
(2)　知性的、言語的な検討と自由
(3)　『創造的進化』における否定の力を持つ直観
a　機械論、目的論の検討
b　映画的方法

(4)　否定の力を持つ直観の修正の働き
(5)　解決を促す問いとしての否定の力を持つ直観
(6)　知性の核の周りのへり
(7)　否定の力を持つ直観と錯覚
(8)　「働く」時間の広がり
a　「働く」時間の性格
b　「働く」時間の広がりの特徴
c　主要著作での「働く」時間
(9)　原初的直観の一つのイメージ
(10)　検討の方法
第 6 節　出発点とゼノンの逆理の検討 ----45

第 2 章　自由 ----50
第 1 節　ベルクソンの自由―自由の二つの側面― ----53
(1)　自由の二つの側面
(2)　自由の内容と直観との関係
(3)　「働く」時間と、否定される決定論との関係
第 2 節　自由の根拠 ----58
第 3 節　自由と原初的衝動―自由における決定 ----61
(1)　自由の主体とはどのようなものか
(2)　自由における決定
a　内的因果性
b　心理学的因果性
c　衝動、情動
第 4 節　選択と自由 ---67
第 5 節　より以上のもの―新しさの創造― ----74
(1)　より以上(plus que)ということ
(2)　持続と創造
(3)　知性的な把握の問題
第 6 節　ベルクソンの自由がもたらすもの ----77
(1)　内的状態のあらわれとしての自由
a　その内容
b　意義
(a)　治癒
(b)　手応え
(c)　納得認知

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

(d)　決断
(2)　新しいものを創造する自由
a　その内容
(a)　『創造的進化』
(b)　「可能的なものと実在的なもの」
(c)　新しさということ
b　意義
(a)　創造の確信
(b)　力と喜び
第 7 節　喜び　----85
(1)　喜びと創造
(2)　哲学の喜びと芸術
(3)　喜びと快楽

第 3 章　直観　----91
第 1 節　直観の確実性の問題　----91
(1)　確実性の問題
(2)　直観の確実性の考え方
(3)　持続の直観が捉えるもの
a　直観の問題
b　持続
(4)　直観とその表現との関係
a　直観と言語
b　直観の表現
(5)　持続の直観の表現の吟味
a　直観による把握―イメージ
b　直観により把握されたものの言語表現
(3)　非媒介的な認識と不可分という言葉
第 2 節　否定の力を持つ直観　----102
(1)　否定の力を持つ直観と言語
(2)　空間と区別のある多数性
(3)　時間は空間ではないこと
(4)　不可分であること
(5)　科学的な時間の一種の排除
(6)　直観における論理的な証明の欠如
(7)　ベルクソンにおける直観の確実性

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

第 4 章　「可能的なもの」の錯覚とベルクソンの出発点　----107
第 1 節　可能的なもの」の錯覚とベルクソンの出発点の考察との関係　----108
第 2 節　「可能的なもの」の観念の発展　----109
第 3 節 否定の力を持つ直観と錯覚という捉え方との関係　----114
第 4 節　「可能的なもの」の発展と否定の力を持つ直観の展開　----117
(1)　到達点としての「可能的なもの」の錯覚
(2)　否定の力を持つ直観からみたベルクソンの哲学の見取り図
第 5 節　回顧の錯覚という問題　----119
(1)　「可能的なもの」の観念に関する回顧の錯覚という問題
(2)　本論考の全体に関わる回顧の問題

結論　----122
文献表　----132

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

序論

ベルクソンの出発点の反省は興味深い。晩年の論文で、ベルクソン自身がこの諸反省を出発点と呼んでいる。この出発点は既に一種の決定論の否定であり、自由の根拠の一つである。独自なまた新しい何かを人は生み出すことが出来る。かなり説得力のある議論によって自由を確信することが出来ると思われる。しかしながら、もしそうなら、可能な限りの吟味が求められる。ベルクソンの自由の全体とこの出発点との関係も明らかにする必要がある。ベルクソンの初期の思索については、伝記的な事実の間接的な証言やそこから得られる推定に関心が向けられ、ベルクソン自身による出発点の叙述も含めて、出発点の思索が吟味されることは、多くはなかったように思われる。ベルクソンの哲学の全体との関連でこの出発点が、検討されることが求められていると思われる。

ところで、ベルクソンが自由についての最初の著作を書くのは、この出発点の反省だけに基づいているのではない。科学的な時間の研究から意識についての研究に進み、意識を直接的に把握することが出来たとベルクソンが考えるあとになる。もし、我々が見るように出発点の考察が否定の力を持つ直観であるなら、その直観は意識によって自由を直接的に把握することはない。その直観は、対象を否定することが主であり、否定した内容に置き換わるべき内容は、漠然としか把握されていないからである。しかしながら、最初の著作を書くときには、ベルクソンは直接的な直観によって自由を捉えている。そこから、仮に出発点と自由について検討することに専念するとしても、直接的な直観とは何か、直観とは確実なのかどうかを知る問題が出てくる。

そして、晩年に確立される「可能的なもの」の錯覚が出発点の反省に由来することに注目するとき、自由に関わるこの出発点はますます重要になるように思われる。「可能的なもの」とは、その内容がそのまま実現されると考えられた場合の、実在に先立つ観念のことである。「可能的なもの」がそのまま実現されると考えることは錯覚であることをベルクソンは明らかにする。そのことによって、自由な行為や実在そのものが常に新しいものを生み出すことをベルクソンは強調しようとする。新しいものの創造はベルクソンの思考の全体においても最も重要な点の一つである。「可能的なもの」を錯覚と見る、こういう捉え方が出発点の反省に起源を持つと考えられるのである。

本論考の主題は、このようにして、自由、直観、「可能的なもの」の錯覚に定められた。ただし、出発点の反省との関係が常にこれらの主題において考慮されている。

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

ベルクソンは、直観が否定の力を持つことを、「哲学的直観」の中で述べている。出発点の反省を否定の力を持つ直観と考え、ベルクソンの思考の上で、言わば最初の契機、ないしは転換点に当たると考えることは適切なことであると我々は考える。もし、そう考えれば、ベルクソンの著作においてしばしばこの否定の力を持つ直観に出会うことがよく理解できる。

認識の方法に関して、通常、注目されるのは持続の直観である。この直観は、対象と一体化するような、意識の共感的な把握から生命の進化への共感的な把握、さらに神と合一すると感じている神秘家への共感に発展していく。そして、直観や自由は、ベルクソンの研究においてよく扱われる主題である。ただ、しかし、出発点の否定の力を持つ直観との関連においてこれらの主題が論じられることや、「可能的なもの」の錯覚がベルクソンの思考の全体の中で論じられることも、十分なされていないと思われるのである。

今日においても、人間の自由の問題は依然として人を不安にさせる、解決のされていない問題である。人間の自由は自然の決定性との関連で現代においても問題にされ続けている。むしろ、その対立は、今日、激しさを増しているとも言える。ベルクソンが自由を考えたのもこの同じ対比においてである。

ベルクソンは、まず、科学的、学問的な事実を集め、吟味、検討する。そこから、否定の力を持つ直観が生じ、その後に直接的な直観に至る。ベルクソンは知性的な方法は意識を掴むことができないと考える。そして、不可分な持続を把握する。そこから、時間における自由の観念に達する。すべてが独創的である。自由を自然の決定性との関連において考えるという点では、ベルクソンの思考は現代の枠組みと同じだけに、ベルクソンの自由についての考え方を様々な観点からより明らかにすることは意義深いと我々は考える。そして、我々は出発点の反省との関わりから、自由をより明らかにすることを選んだ。

さて、我々は、既に少し触れたが、ベルクソンの出発点の反省は、否定の力を持つ直観によると考える。そして、この直観は対象を否定することが主であり、否定される内容に置き換わるべき内容は、漠然としか把握されていないにしても、そこにある認識の内容は、時間が「働く」[1]と捉えることだと考える。そういう吟味に足る内容を出発点は持っている。

---

[1] ベルクソンは時間が「働く」こと(すなわち「すべてが一挙に与えられることを妨げる」ものとして「働く」ことを認めたのが自分の哲学的な反省の出発点であったと述べている。(第１章　参照。)

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

このことは、本文の中で示すことになる。そして、否定の力を持つ直観ないし、その否定の力としての直観のあり方と、「働く」時間とのこの二つが恐らく本論考の中心概念になる。

本論考では、時間―出発点―、自由、直観、「可能的なもの」の錯覚とベルクソンの出発点、の各章で、それぞれ個別の問題を扱うが、四つの章で本稿が構成されることが示すとおり、本論考全体の問題は、次の通りである。

第一に、ベルクソンの自由とはベルクソンの著作全体から見て、どのようなものかということである。ベルクソンの自由は独自なものであるだけに、その著作全体で、自由の根拠や自由の内容を把握することが求められる。各著作をこえて自由の内容の内的な関係が明瞭にされてきたとは言えないと考えられる。また、通常自由と考えられる概念との関係も必ずしも明らかでない側面がある。また、独自な自由だけに、解明が求められる点もある。要するに、ベルクソンの自由で重要なことは何かを明らかにする問題である(第２章)。

第二は、ベルクソンの自由が直観を根拠とするとき、その直観の確実性をどのように考えればいいかということである。ベルクソンの直観は、一瞬のひらめきではないし、なおさら単なる思い付きではない。しかし、知性的な論証とも異なる。そのとき自由であるということは、どのような根拠によっているのかという問題である(第３章)。

第三に、出発点と「可能的なもの」の錯覚とはどのような関係にあるかということである。晩年の同じ一つの論文で、この二つのものが論じられている。そのことの意味は何かということである(第４章)。

第四に、上記の三つの問題に、ベルクソンの出発点の反省が関係している。ベルクソンの哲学において重要な位置を占める、自由、直観、「可能的なもの」の錯覚と緊密な関係を持ち、しかもそれ自身、否定の力を持つ直観であり、「働く」時間として重要性を持つ、出発点の反省とは、ベルクソンの哲学の中でどのような位置を占めるかということである(第１章および本稿の全体)。

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

第 1 章　時間―出発点―

晩年の論文で、ベルクソンは時間が「働く」こと、すなわち「すべてが一挙に与えられることを妨げる」ものとして「働く」こと(p.1331)[2]を認めたのが自分の哲学的な反省の「出発点」であったと述べている。この「出発点」と言われる反省は簡潔に語られているが、内容的には、ベルクソン哲学の全体の中で見ても、自由の論証の重要な一つである。また、この反省は「出発点」に留まらず、ベルクソンの哲学の根底の一つをなす反省である。本章では、この反省を出発点の反省ないし「働く」時間についての反省と呼び、自由の論証のあり方、直観との関係、ベルクソンの哲学の重要な観念である持続との関係、ベルクソンが他の哲学、科学との違いを示すのに用いる映画的方法という錯覚との関係などを考察することにより、この「出発点」と言われる反省の持つ意味を明らかにすることを試みる。

具体的には、哲学的な反省の出発点に関し、その内容、出発点の持つ意味などに関わる、次のような問題を扱う。

1　出発点は、諸資料をつき合わせるとどのようなものと特定できるか。(第 1 節)

2　「可能的なものと実在的なもの」(以下、PR と称す。) において、約五十年前とされる出発点の反省は、実際の出発点と考えてよいか。(第 1 節)

3　出発点の反省は、自由をどのように導くか。(第 2 節)

4　出発点の反省とは、後年ベルクソンが言う否定の力を持つ直観ではないか。(第 3 節)

5　出発点における「働く」時間に関する反省と持続の直観とはどう違うか。(第 4 節)

6　出発点の反省は、どのような意味で重要か。また、出発点の時間の捉え方は、ベルクソンの著作でどのような広がりを見せるか。(第 5 節)

7　ゼノンの逆理の検討は、出発点の反省と言えないのか。(第 6 節)

第 1 節　ベルクソン哲学の「出発点」

---

[2] 「可能的なものと実在的なもの」、p.1333. ベルクソンの著作の引用に際して、示された数字は、Bergson, Henri, *Oeuvres*, Édition du centenaire, P.U.F., 1959 または、*Mélange*, P.U.F., 1972、あるいは *Correspondances*, P.U.F., 2002 のページ番号を記す。*Mélange* からの引用の場合には、数字の前に「M」をつけ、*Correspondances* からの場合は「C」をつけ、それぞれ区別する。なお、訳文については、全体の統一を図らざるを得ない関係上、場合によって既存の訳を参照させて頂きながらも、筆者が基本的に作成している。その際、日本語としてこなれた訳にすることよりも、可能な限り直訳に近い形で訳すことに努めている。

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

(1)　「働く」時間とは何か

ベルクソンは時間を「働く」ものと考えている。例えば、「可能的なものと実在的なもの」の中で、こう述べる。数学的法則により予測できる世界は、「映画のフィルムの上に並置された展開前のイメージ」のようになっている。そこでは、ある瞬間にすべての時間の状態が既に得られている。だから、時間経過は、それらの状態にとって何の役にも立っていない。「しかし、時間は何ものかである。」それゆえ、「時間は働く(agit)」。そして「時間とはすべてが一挙に与えられることを妨げるものである」[3]とベルクソンは考える。本論考では、「すべてが一挙に与えられることを妨げる」[4]「働き」を持つ時間を「働く」時間と呼び、その時間がベルクソン哲学において持つ意味について、検討を試みようとするものである。そして、ベルクソンは、時間が「働く」と考えたことが「私の考察の出発点」[5]であり、およそ 50 年前のことだと言うのである。1889 年に発刊される、最初の著作、『試論』に先行する 1880 年代初め頃のことになる。

ここで注目に値する点は、第一に、ベルクソンの反省の「出発点」が「働く」時間であると明確に言われている点である。第二に、数学的な予測における時間は、意識における時間であるとは言えないという否定的な問題意識が、「働く」時間の基にあるということである。第三に、映画のフィルムのイメージによって、世界が時間経過なしに決定されてしまっているという奇妙さが明確に示されている。第四に、予測における時間を否定するところから直ちに、時間経過におけるものごとの非決定が導かれる。「働く」時間が、それだけで法則的な決定論を否定してしまうのである。決定論が強い力を持つ現代においても、「働く」時間は法則的な決定論を否定する有力な論拠と言えるのではないだろうか。この点については、第 2 節でさらに論じる。

(2)　ベルクソン哲学の「出発点」の明確化

ベルクソン自身が、「出発点」という言葉を使って自らの思考の歩みを語る資料には、PR、1908 年 5 月のジェイムズ宛の手紙、1922 年のデュ・ボスの日記がある。他にも出発の時点での転機をうかがわせるものがある。

---

[3] 同上
[4] 同上
[5] 同上

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

『試論』も用い、「働く」時間の観点から、「出発点」の状況[6]を探ることにしたい。『試論』を用いることが出来る理由は次の通りである。ジェイムズ宛の手紙では、「一連の反省の出発点」である「科学的時間に関する考察」[7]が試論に要約されているとベルクソンは、そのページまでも具体的に指定している。なお、また、1906 年 1 月のヘフディング宛の手紙[8]では、ほぼその同じ箇所が『試論』という書物の出発点であると述べている。『試論』とは、哲学的な「反省の出発点」からはじめて一つの到達を語る書物であることをベルクソン自らの言明によって確認することが出来るのである。そのうえ、『試論』は 1889 年に発刊されており、PR でいう「出発点」とは、もう言えない時期であるものの、『試論』第二章[9]、第三章の第一稿が書かれるのは、1884-1886 年[10]である。「出発点」の時期は、諸資料からやや幅を広く取って 1881-1884 年頃と推定されるので、そうすると『試論』の第一稿は、「出発点」の時期に書かれるか、その時期にほとんど接するかして書かれている。『試論』の叙述は、「出発点」をよく示すことが期待される。

諸資料は、いずれも『試論』の成立後のものである。手紙の場合などでは、恐らく説明の容易さもあり、よく知られた「持続」という言葉を使って、時間の「働き」を示していると思われる資料もある。諸資料を総合的に見ると、「出発点」に科学的な時間を意識においては否定する反省があり、時間は「働く」と考えたという PR の記述に疑義を呈するものはない。なお、出発点の科学的な時間に関する反省と持続の直観との関係は、第 4 節で詳しく述べるが、その二つの必要最小限の区別を、ここでしておく。出発点の反省は、意識における科学的時間とは異なる時間とはどのようなものかという、言わば問いであり、持続の直観とは、その答えである。「働く」時間とは、科学的時間と異なる時間のあり方で

---

6 1923 年のフロリス・ドラトル宛の手紙(M1417)および 1915 年のハロルド・ヘフディング宛の手紙(M1148)では、ベルクソンは、持続あるいは相互的な浸透の多数性の表象が、そこから出発し、そこに戻るところだと述べる。ここでは、「持続」の観念の成立以前での「出発点」を探ろうとしている。M は *Mélanges*, P.U.F., 1972 のページを示す。

7 「ジェイムズ宛の手紙」、M766

8 「ヘフディング宛の手紙」、C146

9 持続の観念を扱う『試論』の第二章の注で、ベルクソンは、「私が、ノエル氏の数と空間の概念の関連についての興味深い論文の、ピロン氏による注目すべき反論を哲学批評誌(1883 年と 1884 年)において読んだとき、私の仕事は完全に完了していた。」と書かれている。もし実際に読み終わったのが、この雑誌発刊直後であるとすれば、第二章は、1884 年までに書かれていたということになる。

10 デュ・ボスの日記では、『試論』の第二章、第三章の最初の草稿は、1884-1886 年に書かれたとベルクソンが語ったことが記されている(p.1542)。1905 年 7 月のリボー宛の手紙(M657)では、『試論』が練られ書かれる時期は 1883-1887 年と述べられている。

あり、「働く」ということ以上のことがつかめていない。これに対して、持続において意識における時間が直接的に直観によって捉えられている。意識諸状態が、相互浸透あるいは不可分という時間的あり方をしているのが持続である。持続の観念においては、しかし、意識諸状態のあり方と、時間的あり方とは切り離すことができず一体化している。ただ、持続の観念の時間的あり方に注目するとき、「持続」は、「働く」時間と言える。

本項で言う諸資料とは、①PR、②1922 年 2 月にベルクソンを訪問した、デュ・ボスの書き留めた日記[11]、③1908 年 5 月に W・ジェイムズへあてた手紙[12](以上には「出発点」という言葉が使われている)、④1903 年のパピーニ宛の手紙[13]、⑤『試論』である。ただし、『試論』については、上述の通り、③のジェイムズ宛の手紙および 1906 年 1 月のヘフディング宛の手紙で指定される該当箇所[14]を出発点として主として扱う。検討の結果は次の通りである。なお、次項以降で、『試論』の出発点と PR の出発点の比較検討、PR の出

---

11 Du Bos ,Charles, *Journal 1920 - 1925*, Buchet/Chastel, 2003, p.129-137.および p.1541-1543.

12 「ジェイムズ宛の手紙」、M765-766 および C199-200。C は *Correspondances*, P.U.F., 2002 のページを示す。

13 「パピーニ宛の手紙」、M604 および C90-93

14「ジェイムズ宛の手紙」では、出発点は『試論』の p.87-90、p.146-149 が指定され(M766)、ヘフディング宛の手紙では、「私の『試論』の出発点は、等質的時間に関係する p.88.-91 と p147.-p149 の中にある」(C146)と指定されている。これは、当時の Alcan 版による指示と思われるので、現行の P.U.F.版のページに直す必要がある。『試論』の 1889 年の第一版と 1898 年の第二版との間には、フランス国立図書館の所蔵本を、人を介して確認したところページ付けに相違はないようである。1898 年の Alcan 版は、*Oeuvres*, Édition du centenaire, P.U.F., 1959 によれぱ、1939 年まで変化がないとされている(p.1485.)。フランスの図書館の目録 Le Sudoc によれば、Alcan 版は、その後、1901 年(第三版) 、1904 年(第四版))、1908 年(第六版)のものがフランス国内の図書館に現存しているのが確認できる。ところで、現在のところ入手可能な 1898 年版(第二版)と 1936 年の 34 版を比較すると、ページ付けには若干の相違がある。そのため、1906 年、1908 年の手紙に近い、1898 年の Alcan 版によって、現行の P.U.F.版のページに直すと、ジェイムズ宛、ヘフディング宛の手紙による指定ページは、それぞれ p.86-90 あるいは p.87-91、p143-147 あるいは p.144.-147 になる。二つの手紙の指定箇所は、以上のように若干異なるが、大きくても一段落程度のずれである。

以上の状況を踏まえ、ベルクソンによって出発点として指定されている箇所の主要部分は、ジェイムズの手紙の指定箇所をもとにそこに含まれる二章の第 22-23 番目の段落、第 3 章の第 37-39 番目の段落であると考えて、本稿では考察することとした。これらの箇所は、ヘフディング宛の手紙の指定ページに関しては、第 2 章の第 22-番目の段落の途中から始まることを、わずか除いてヘフディング宛の手紙の指定ページにも含まれている部分である。また、これらの段落は、1936 年の Alcan 版の 34 版を用いても、ジェイムズ宛、ヘフディング宛の手紙による指定ページの中に含まれている。

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

発点の吟味を、さらに行う。

1.　「出発点」の時期は、1881-1884 年と推定される。(①②③による。)

①によれば、既に触れたが、「出発点」は 1880 年代の初めになる。②では、1883-1884 年に最も関心を引かれたのは、力学的数学的概念だったと言われており、どんな別のものがあるとも分からない非常にあいまいな状態で、(力学的時間とは)「別のものがある」とベルクソンが理解するのは、その頃のことと推定できる。②のデュ・ボスの日記で引用される、ベルクソンの言葉によれば、ベルクソンの考察の「出発点」とは、「(力学的時間とは)別のものがある」と考えたことである[15]。③では、1881-1883 年の間に考え方の変化があり、科学的な時間は持続しないことに気づいたと言い、そのことが、「一連の反省の出発点」だったと言っている。以上から、三つの資料の時期を含む 1881-1884 年頃を「出発点」の時期として、本論考では仮に考える。

2.　力学や物理学における時間概念を検討する中で転機があり、意識における時間は科学的な時間とは別のものであることに気づいたとしている点は、諸資料で一貫している。(①②③④による。)

①については既に(1)項で述べ、②③についても、1 で述べた。④については、ベルクソンは、博士論文のために力学の根本的な概念を研究しようとし、時間の概念の研究に専念するようになり、力学や物理学で語られる時間は、持続とは「全く別のもの」であることに気づいたと言う。

3.　意識における時間が科学的な時間とは「別のものである」というところから、さらに進んで、意識における時間が「働く」時間であると考えられるようになることは、三つの資料により確認できる。(①③⑤による。)ただし、③と⑤については、そこで使われる「持続」という語は、意識諸状態の相互浸透という時間的あり方と考えられるが、意識諸状態の不可分なあり方としてよりも、時間的あり方に注目されて用いられており、つまりは、本論考で言う時間の「働き」に注目して使われていると見ている。

①については、第 1 節で触れた。③では、科学的時間は持続しない、実証科学は本質的に持続の除去に存すると言われており、意識における時間は持続であると考えられている。

15　「デュ・ボスの日記」、p.1541.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

⑤では、時間は、豊かさをもたらすと考えられており、それは「働き」だと見ることができる。また、ベルクソンによる出発点の指定ページとは別の箇所になるものの、持続は原因の仕方で「働く(agir)」[16]と言われ、時間の「利得(gain)」や「時間の作用(action)」(action という名詞は、仏仏辞典 Petit Robert によれば語源的に agir という動詞と関係のある名詞とされている。)、「蓄積する(emmagasiner)」[17]働き、「持続の作用(action)」[18]が語られる箇所がある。従って、『試論』の全体では時間の「働き」が考えられているのは明らかである。以上から、①③⑤においては、出発点において意識における時間の「働き」が考えられていると思われる。

4. 予測法則における科学的時間について、そこでは、瞬間においてすべての状態が展開されているという形での批判は、①と③[19]に見られる。⑤には、「唯一の覚知において天体の全体の軌跡を把握する」[20]という表現があり、また、「意識は天文学者が未来において見いだすところを現在において見るだろう」[21]と言われている。予測法則における科学的時間について、そこでは、瞬間においてすべての状態が展開されているという見方が、『試論』においても見られるのである。なお、⑤には出発点の指定ページとは別の箇所に、「諸現象は継起し、同時に展開されない」[22]という表現がある。継起と、同時に展開されることとを対比的に捉える思考は、そこではより明確に見られる。

出発点において、法則的な予測における科学的時間では、ある瞬間にすべてが一挙に与えられており、その時間を意識においても考えることが問題だとされていたことは間違いないと思われる。また、その意味での映画のフィルムのイメージが援用されるのは、およそ 1907 年の『創造的進化』以降であり、①の他、1922 年の「緒論」にも、見られるという時期的特徴がある[23]。

---

16 『試論』、p.101.
17 同上、p.102.
18 同上、p.137.
19 「ジェイムズ宛の手紙」、M766
20 『試論』、p.128
21 同上
22 同上、p.137.
23 『創造的進化』、p.782., M766, 「緒論」、p.1259.など。なお、念のため、補足すれば、リュミエールのシネマトグラフの発明は 1895 年とされているので、その頃以前に映画の比喩が現れないのは、ある意味で当然である。

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

(3)　二つの出発点

a　二つの出発点の比較

(a)　PR の出発点

ベルクソンの反省の出発点について、ベルクソンがその著作の中で比較的詳細に語るのは、PR と『試論』の特定箇所だけである。しかも、出発点だと明示して語るのは、PR だけである。『試論』の特定箇所が出発点の反省を示していることは上述のとおりジェイムズ宛の手紙の内容を考慮することによって始めて、出発点だと分かる。出発点の反省の時期に近いのは、『試論』である。しかし、本文中には出発点であるという明示はない。PR には、出発点の明示とともに、出発点の反省が示される。しかし、出発点を知る好資料であるものの、時間的に出発点から離れすぎている。単純な記憶違いも心配される。(2)項で出発点はどのようなものか、大筋の検討を行った。ここでは、PR の叙述に時間が隔てることによる誤りはないかという点から、『試論』の叙述とさらに詳細に比較検討を行う。

PR の哲学的な反省の出発点とは、箇条書きにまとめると次のようなものである。

①物質的な宇宙の諸状態は、(力学的な予測における各時間的状態のように)「理論上予め計算ができる」、②それは「映画のフィルムの上に並置された展開前のイメージ」のようになっている、③しかし、このとき展開は何になるのか。(実在はなぜ展開されるのか。どうして実在は展開されてはいないのか。)、④時間は、(それらの状態にとって)何の役にも立っていない、⑤何もしていないものは何ものでもない、⑥しかし、時間は何ものかである、⑦それゆえ、時間は「働く(agit)」、⑧時間は、まさに何をすることが出来るか。単純な良識は答えた。時間とは、すべてが一挙に与えられることを妨げるところのものである、⑨時間は、「遅延」である、⑩それゆえ、練り上げることであるに違いない、⑪「創造および選択の乗り物」ではないか、⑫時間の存在は、ものの中に非決定があることを証明しないか。時間とは、非決定そのものではないか[24]。

以上から法則的な決定論が否定される。法則的な決定論を否定する論拠としての意味については、さらに第 2 節　出発点と自由で検討する。ここで今行うのは出発点の反省内容の確認である。本節(2)項で、「出発点」に科学的な時間を意識においては否定する反省があり、時間は「働く」と考えたことに疑義はないと既に述べた。①②と⑧における「すべ

[24] PR、p.1333.

てが一挙に与えられる」という捉え方は、法則的な時間のあり方を述べている。それについての否定的な反省は、③から⑥に当たる。⑦と⑧が、時間は「働く」と考えたと述べた部分に当たる。⑨〜⑫は、その「働き」の内容である。

(b)　『試論』の出発点

一方、ジェイムズ宛、ヘフディング宛の手紙によれば、『試論』の「出発点」とは、一箇所は力学的時間の定義を検討する箇所であり、もう一箇所は、天文学の予測における時間の特徴を検討する箇所であり、いずれも意識における時間との対比で分析がなされている。最初の箇所は、概ね次のように述べている。①力学では、持続そのものを定義せず、二つの持続の等しさを定義する、②①の場合、もっぱら空間と諸同時性だけが問題になっている、③持続の間隔とは、我々にとってしか、そして我々の意識の諸状態の相互的な浸透によってしか存在しない、④持続の間隔そのものは科学の観点には重要ではない、⑤宇宙の全運動が、二、三倍速く生じるとき、変化は意識の外には現れない、⑥速度の観念を分析しても②と同じ結論に達する、⑦もし力学が、時間に関し同時性しか保持しないなら、力学は運動自身に関して不動性しか保持しないといった内容である。二番目の箇所には、⑧人間の知性は、現在の瞬間に、来るべき持続の好きなだけの部分を把握する、科学の行う未来の予見は、意志的な行為についての予見とはいささかの類似も持たない、⑨宇宙の全運動が二倍速く進むとき、方程式には変化は生じないが、意識は存在の豊かさの低下を確認するだろう、⑩天文学者は、時間を千倍も早くし、数秒の心理的な持続の中へ、数世紀の天文学的時間が収まるようにすることができる、⑪本来的な持続は、計算の外に留まり、意識によってだけ知覚される、⑫唯一の覚知の中にその天体の全軌道を包括できる、意識は天文学者が未来において見いだすところを現在において見る、といった点が記載されている。この出発点とされる叙述の中には、持続という言葉が使われ、持続の特徴である相互的な浸透という表現も用いられている。既に、この出発点の叙述の前に、持続の観念が導入されているからである。出発点の叙述として読むとき、ここにおける持続とは、持続の観念の全体を考えているのではなく、意識における「働く」時間と見て問題ないと思われる。

科学的な時間を意識においては否定する反省に関しては、科学的時間の定義を①〜④および⑥で問題にする。①②④⑥では、科学的な時間との対比で、それとは異なる時間が意識にあることが気づかれている。予測における科学的時間が問題だとするのは、⑧〜⑫である。⑧と⑩では、天文学の予測を検討する中で、その予測には意識の時間が考慮されて

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

いないことに、やはりベルクソンは気づいている。予測における時間との対比において、意識の持続は、持続の経過の仕方を早めると性質が違うものになる経過のしかたを持つことが気づかれている。法則的な予測ではすべてが一挙に与えられる時間になっていると見ているのは、⑫である。その時間を⑨～⑪が否定的に捉えている。結局①から⑫のうち⑨を除く部分全体で、すべてが一挙に与えられる科学的な時間と、その定義自体が否定的に捉えられている。「存在の豊かさ」を与えるものとして時間は「働く」と考えているのは、⑨が該当する。

従って、PR も試論も、「出発点」に科学的な時間を意識においては否定する反省があり、時間は「働く」と考えた点では、違いはない。

若干補足する。法則的な予測における時間ではすべてが一挙に与えられているとする点に関しては、『試論』の出発点としての明示があるページではないものの、既に述べたように「諸現象は継起し、同時に展開されない」という表現がある。継起と、同時に展開されることを対比的に捉える思考は、そこではより明確に見られる。さらにまた、『試論』の発刊からそう遠くない、1893 年と推定されている、リセ(高校)での講義の記録において、数学的諸関係によって、その本質が形成される宇宙においては、すべてが一挙に与えられることになるだろう[25]と論じられている。さらに、フィヒテの観念論の批判をする際に、すべてが与えられていることと、変化があることとの違いが捉えられている[26]箇所もある。出発点において、法則的な予測における科学的時間では、すべてが一挙に与えられることが問題と考えられていたことは間違いないと思われる。

(c)　二つの出発点の対応関係

やや煩雑であるが、次に出発点の反省に関して、PR の叙述のそれぞれに対して『試論』の叙述を比較すると、PR の①は、『試論』の⑩⑫に対応する。これに対し、②に対応する部分はない。しかし、『試論』の段階では映画はまだ発明されていないのだから、『試論』に映画を使った比喩がないのは当然である。ただ、意味的には、『試論』の⑫にある「全軌道」という表現や「意識は天文学者が未来において見いだすところを現在において見るだろう」という表現に、PR と同様の捉え方はあると見ることができる。

---

[25] *Bergson Cours Ⅱ Leçon d'esthétique　Leçon de morale, psychologique et métaphysique* , P.U.F., 1992, p.429.
[26] 同上、p.423.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

PR の③～⑤にある、法則的な予測における時間が展開している理由を問い、時間が何もしていないと考える部分は、『試論』では明示的に対応するものはない。『試論』の⑨の「存在の豊かさの低下」を、時間の速度を速めるときに意識は感じるという部分は、すべての瞬間が展開されていることへの問題意識と言える。その意味では、PR の③～⑤が、『試論』の出発点に明示的表現としてないとしても『試論』の出発点の反省に全くなかったというのは言い過ぎであろう。むしろ、法則的な予測ではすべてが一挙に与えられているという科学的時間のあり方の問題に気づくことが出発点の反省の中心部分であるからである。つまり PR の③～⑤は当然の問題意識として『試論』の出発点にもあると考えられる。

次に PR の⑥については、『試論』の③や④が対応する。さらに、①②においても、科学的な時間とは別の、意識における時間の存在が感じられているのは明らかである。

PR の⑦～⑪については、『試論』では⑨が対応する。ただ、時間が「働く」こと、その「働き」の内容に関しては、⑨の部分では、やはりそれほど明示的ではない。すでに、法則的な予測における時間が問題とされ、「存在の豊かさ」を時間が与えると捉えていることは、「働き」という明示的表現がないにしても、時間の「働き」を捉えているのと同じである。『試論』全体で見るとき、時間の「働き」は、蓄積、利得、豊かさであり、PR では、遅延、創造、非決定であり、表現は互いに関係が有るものの、具体的な表現としては異なる。ただ、類似しているとは言える。まず、出発点として指定された『試論』のページにある豊かさと、蓄積、利得は類似している。PR の創造と『試論』の豊かさも類似した表現である。意識における「働く」時間を、表現に微妙な違いがあるものの、PR の出発点も『試論』の出発点も捉えているということが出来るだろう。

ベルクソンは、『物質と記憶』で、自由の新しいものを付け加えるという側面は、『試論』の中に既にあると考えている[27]。自我が「豊かになる」[28]というところが該当すると見られる。だとすると、時間の「働き」についても、「存在の豊かさ」を与えることは、創造も意味すると言えるだろう。ある表現がなければ、その表現が表す思考はないと厳密に考えることが重要な場合もある。しかし、時間の「働き」についての場合は、今述べたように関連した表現は既にある。従って、どちらかの著作で、ある表現がないということが、その「働き」を全く考えていないということとは違うように思われる。言葉としては様々に表される時間の「働き」が渾然として出発点にあったと考えることでよいように思われる。

---

[27] 第 2 章第 1 節(1)参照

[28] 『試論』、p.116.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

b　PR の出発点と『創造的進化』の叙述の比較

ところで、PR の出発点の叙述は、『創造的進化』(EC)の第 4 章(「近代科学」)の叙述とかなり類似している。すべてが一挙に与えられていることを問題にし、そこから時間の非決定と、予測不可能なものや新しいものの創造を考えているからである[29]。ただ、この考察に至るのにベルクソンは、『試論』にある反省の出発点を内容的に引用することから始めている。「実在的な時間は、流れあるいは換言すれば存在のそのものの動性として考察され、科学的な認識の把握をここで逃れるということである。私は以前の著作でこの点を確立しようと既に試みた。(中略)しかし、誤解を一掃するために、最後にそこに戻ることが重要である。」[30]と述べ、『試論』における反省の出発点として述べた内容を、再度語る。箇条書きにまとめると次のようになる。なお、『試論』と『創造的進化』を詳細に比較すると煩雑になるので、『創造的進化』の記述の主要な点をまとめる。a　実証科学の時間では、時間の流れそのものや、ましてそれが意識に及ぼす効果などは問題にされない、　b　ある運動、あるいはその他のあらゆる変化が時間 t を要したという際にも、それはその種の対応を t 個まで記録したという意味に解されている、同時性を数えている、　c　私は宇宙の流れの速さを意識のまなざしに対して勝手に変化できる、　d　動体 T の軌道が一挙に与えられ、そして物質的宇宙の過去・現在・未来の歴史の全体が空間内に一瞬に繰り広げられているものと想像しよう、　e　継起は存在し私たちはそれの意識を持つ、　f　私たちは、区間の端々を数えないで、区間そのものを感じかつ生きる、g　私の意識にとっては、持続は絶対である。ここまでは、『試論』の出発点の反省と同じと言っていい[31]。そこから、h　なにが私を待たさないではおかないのか、　i　なぜ無限の速度ではいけないか、　j　映画のフィルムの上でのように、すべてが一挙に与えられていないのはなぜかと問われて

---

29 「映画のフィルムの上でのように、すべてが一挙に与えられていないのはなぜか」とベルクソンは問い、こう答える。「この点をより深めるにつれ、ますます私には次のように思われる。もし未来が現在の後に続き、その横に与えられないのなら、それは、現在の瞬間において未来が完全に決定されていないということである。また、もし、その継起によって占められる時間が数とは別のものであるなら、またもし、そこにある意識にとって未来が、絶対的な価値と実在を持つなら、それは、一杯の砂糖水のように人工的に切り離された、これこれの系ではなく、この体系が一体となった全く具体的なものの中において、予測不可能なものと新しいものが絶えず創造されているということである。」(EC、p.782.)

30 EC、p.779-780.

31 対応の概略はつぎの通りである。『創造的進化』の a は、試論の出発点の④に対応する。以下順に、b は②に、c は⑤⑨などに、d は⑫に、e は⑪に、f、g には③⑪が対応する。

いく。要するに、『創造的進化』の時間の「働き」に関する記述も、『試論』の出発点に明らかに起源を持っている。『創造的進化』で初めて行われる考察ではない。両者の違いは、『創造的進化』では、h から j の問いとその答えである時間の「働き」が明示されることである。この問いと時間の「働き」という答えが、明示されるということについては、PR が『創造的進化』の影響を受けているとは言える。かなり表現が類似しているからである。さらに、その二つのものの間に、1922 年に書かれた「緒論」の表現もある。「緒論」では、a　区別され並置された諸部分の継起は映画のフィルムのイメージの継起に似ている、　b 時間は、過去、現在、未来の出来事全体が並べられていると想定されながら、一まとめに我々に現れることが妨げられている観念的な空間でしかない、　c　根本的に新しいものおよび予見不可能なものを哲学者が表象することが出来ない、と時間に関して言われている。ベルクソンが批判する時間の捉え方に関して述べられており[32]、表現自体は、『創造的進化』との類似性が認められる。こういう『創造的進化』から PR までの表現の類似は見て取ることが出来る。なお、さらに表現の類似について言えば、『創造的進化』の第 1 章では機械論について、「時間はそこでは効果を欠いている。そして、時間は何もしないので、何ものでもない。」[33]と言われている。これは、PR の出発点の④⑤に当たる「時間はそこでは何の役にも立っていなかった。時間は何もしていなかった。さて、何もしないものは何ものでもない。」[34]と酷似している。

　では、すべてが一挙に与えられていないのはなぜかという問いと時間の「働き」についての答えは、『創造的進化』において達せられたものであり、ベルクソンの哲学的反省の出発点にはなかったと考えるべきであろうか。この点については、既に PR と『試論』の二つの出発点を比較検討する中で答えている。すべてが一挙に与えられている時間と意識の時間は違うという問題意識からベルクソンの出発点の考察は始まっている。そのことはすべてが意識では一挙に与えられていないのはどういうことかという問いと一体化している。その違いについての様々な問いの中の一つが、『創造的進化』の問いであり、PR の中の問いであり、答えである。時間の「働き」の内容についても、創造に類似する「存在の豊かさ」ということに『試論』の出発点の反省は達している。全く類似の表現がなければ別であるにしても、『創造的進化』では問いが明確に語られ、「働き」が詳細に語られるにして

32　「緒論」、p.1259-1260.
33　EC、p.527.
34　PR、p.1333.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

も、出発点においても既に問いはあり、また「働き」の内容自体にも気づいていると見るほうが妥当と思われる。

c　PR の出発点の叙述はどこまでが出発点か

(3)a(a)項の PR の出発点では、①から⑫までを出発点として考えた。このうち、叙述が現在形のものもあるが、過去に考えたことであることが明確なのは、⑧までである。⑨～⑫は現在形あるいは条件法現在形で書かれている。文脈的には、⑧において、単純な良識が答えた内容が⑨～⑫に続いているので、①から⑫までを一体として出発点として考えた。しかし、⑨～⑫は内容的には①～⑧と緊密な文脈にあるものの、出発点ではなく別の機会に考えられた内容が追加されているかも知れないという紛らわしさが若干ある。しかし、それは、『試論』の出発点が直ちに否定すると思われる。時間の「働き」として、「存在の豊かさ」を与えることが既に考えられているからである。そして、「豊かさ」とは、既に述べたように創造に類似した内容である。

なお、念のため少し補足する。「私の諸反省の出発点は、かって、そのようなものであった。」と言われているのは、①～③までである。そして、「約五十年前、私はスペンサーの哲学に強く魅かれていた。」という文があり、④以下の内容が続く。そのため、④以下も出発点であるのは明らかである。従って、以上の叙述から、④以下も含めて、約五十年前に出発点があったと考えている。

以上から、これ以降、本論考では、出発点の明示がありかつ出発点の内容も明示される PR の叙述をもとにベルクソンの反省の出発点を考えることにする。

第 2 節　出発点と自由

本節では、出発点の反省が法則的な決定論を否定する一種の論証と見られる点について吟味する。ベルクソンの自由の全体については、第二章　自由で論じる。

(1)　法則的な決定論を否定する考察

科学的な時間を意識においては否定する出発点の反省において、①と②は事実である(以下、適宜第 1 節(3)a(a)項参照のこと)。③の「どうして実在は展開されてはいないのか」は、①②という事実に対する普通の疑問である。その疑問を敢えて出すのは難しいとしても、一度出されてしまえば、①②の事実がなぜかと問うているだけである。⑧は⑦と①②

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

の事実から推論されるとほぼ言える。①②は、「すべてが一挙に与えられている」ということであり、その時間が問題だと捉えれば、「すべてが一挙に与えられて」いない時間として、「時間とは、すべてが一挙に与えられることを妨げるところのものである」ということになる。単純な良識が答えるにふさわしい、単純な答えである。⑨～⑫は⑧の展開であり、⑧が把握できれば、非決定は導かれうる。従って、ここで一番問題なのは、④～⑦の過程である。その問題に触れたあと、⑧～⑫の展開についても細かく見ることにする。

さて、④～⑦の過程を詳細に見ると、⑥の「しかし、時間は何ものかである」も、事実と言える。時間が存在することは、ごく一部の哲学者を除き認める事柄であるだろう。時間的変化があることは意識では否定しがたい。従って、問題は、④の「時間は、(それらの状態にとって)何の役にも立っていない」という捉え方と⑤の「何もしていないものは何ものでもない」という捉え方をどう見るかということ、⑥の「しかし、時間は何ものかである」から、⑦の「それゆえ、時間は『働く(agit)』」への移行がどのように考えられているかということに絞られてくる。

④の「時間は、(それらの状態にとって)何の役にも立っていない」という捉え方は、すべてが一瞬において一挙に与えられているなら、時間変化の中で少しずつ現れることは、つまり小出し(こだし)にすることは、存在する世界に新しい何ものも与えない、既にあると分かっていることを小出しにしか与えないと考えるからである。⑤の「何もしていないものは何ものでもない」については、存在するものは何かをするという考え方があると推定される。そして、この推定の証明にはならないものの、『試論』発刊の 4 年後の、リセでの講義の記録[35]では、「存在するもの(être)は働く(agir)。」という考え方がベルクソンの言葉として記録されており、妥当な推定だと考えてよいと思われる。従って、⑥の「しかし、時間は何ものかである」から、⑦の「それゆえ、時間は『働く(agit)』」への移行は、⑤における、存在するものは何かをするという考え方、つまりは、「存在するもの(être)は働く(agir)。」という考え方を前提にすれば、論理的に導かれることになる。従って、④の時間変化の中で少しずつ現れること、つまり小出し(こだし)にすることは、存在する世界に何も与えないとする考え方と、⑤の背景にある「存在するもの(être)は働く(agir)」という考え方をさらに吟味する必要がある。

⑤の背景にある「存在するもの(être)は働く(agir)」ということは、しかし、ほとんど問

[35] *Bergson Cours Ⅱ Leçon d'esthétique Leçon de morale, psychologique et métaphysique* , P.U.F., 1992, p.436.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

題ないように思われる。まず、認識の観点からは、何の「働き」もないものは捉えられず、存在しないと同じになる。また、存在しつつ何の「働き」もないとき、その存在とはやはり存在しないも同然になる。経験の中で考える限り、存在しながら働かないものは、経験には少なくともこれまでは与えられてこなかったように思われる。

問題は、④の小出しにする時間についての考え方である。法則的な決定論では時間は、小出しにする時間になっている。物質について小出しにする時間を否定する人はいない。意識についても同じだと考えることはできる。しかし、ベルクソンが言うように、小出しにする時間は、大した「働き」は持たない。どうなるか分かっていることをその分かっているとおりに、小出しに実現するからである。しかし、小出しに実現することこそ時間であるとする主張することも、論理的には排除はできないだろう。ただ、ベルクソンがこういう小出しの時間について問題にする際も、そういう時間を認める発想は論外のようである。時間自体に関し、「継起を出来損ないの共在、持続を永遠性の欠如」とし、継起は「我々の知覚の欠陥を表す」とする「大部分の哲学者」[36]の考え方としてである。小出しの時間としての単なる継起は、一種の欠如と考えられている。これに対して、ベルクソンは、継起そのものに、小出しの時間にはない「働き」を認める。しかし、小出しの時間は、「働き」を持たない、あるいは欠如であるとして、その理由に違いはあるにしろ、大きな意味を与えないことでは、ベルクソンも「大部分の哲学者」も共通していると言える。

しかし、もし、存在するものには、一定の「働き」があるとするなら、そして、時間は存在するから「働く」ものであるなら、法則的な決定論は否定される。ベルクソンの出発点の反省における法則的な決定論の否定は、存在するものは働く、時間は存在し働くということを認めるかどうかに問題は絞られてくる。そして、存在するものは働くという考え方の方が経験の領域では説得力があると思われる。ここまでのところで、法則的な決定論の否定の論証の①～⑧までは、存在は「働き」、時間は存在することを前提にすると、ほぼ論理的に追うことができることを示せたと考える。

次に、⑧～⑫についてである。「すべてが一挙に与えられる」ことと、そうでないことを比べると、「すべてが一挙に与えられる」ことに比べて、一挙には与えられない場合は、「すべてが一挙に与えられる」ことに対して遅れていると言える。すなわち遅延である。従って、⑧から⑨の遅延へ進むことが出来る。⑨の遅延から⑩の練り上げについては、遅れて

36 「緒論」、p.1260.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

いる間に「働く」ものがあるなら、それは練り上げだと言える。そして、練り上げであるなら、それは作り上げることであり、それは創造ということができるし、練り上げを選択ということもできる[37]。従って、⑩の練り上げから⑪の創造、選択への推移も容易に行える。さらに、もし創造があるなら、そこでは、その創造は非決定であったと言える。従って⑫の非決定も⑪の創造、選択から容易に導かれる。また、⑫の非決定は、⑧の「すべてが一挙に与えられることを妨げる」ことから直接に導くことも出来る。すべてが一挙に与えられることが妨げられていることは、決定されていないことだと言えるから、非決定だということが言える。この展開の仕方は、『創造的進化』で見ることができる[38]。

⑧の「すべてが一挙に与えられるのを妨げる」、⑨の遅延、⑩の練り上げ、⑪の創造、選択、⑫の非決定の関係をまとめると、一つの見方は以下の通りである。⑧の「すべてが一挙に与えられるのを妨げる」から⑨の遅延への関係は、ほぼ言葉の言い換えである。⑨の遅延と⑩の練り上げについては、遅延には単なる停滞もあるはずだから、⑨の遅延は⑩の練り上げの必要条件である。また、⑩の練り上げには、既に知られた事実の単純な再配置も含んでいるので、⑪の創造、選択は、⑩の練り上げの十分条件である[39]。⑪の創造、選択と⑫の非決定は、非決定には偶然的な非決定も含まれるから、⑫の非決定は、⑪の創造選択の必要条件となっている。この関係を図示すると次の図の通りである。

---

37 第 2 章第 4 節(2)の注、参照。

38 EC、p.782.「もし未来が現在の後に続き、その横に与えられないのなら、それは、現在の瞬間において未来が完全に決定されていないということである。」

39 『創造的進化』では、新しいものと予見のできないものが区別されている。新しいものには、「既に知覚された諸要素の別の秩序における新しい集合」(EC、p.499.)を考える場合も含まれている。しかし、予見されないものとは、「一度も知覚されなかった、しかも同時に単一であるもの」と考えられている。これが創造ということになるであろう。予見不可能であれば、新しい。しかし、単に新しいものには、要素の集合は新しくても、諸要素は新しくないという場合がある。

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

①②事実　←③疑問「展開は何になるのか」

↓

④役に立っていない≒⑤何もしていないものは何ものでもない。

時間は存在する――――→↓

⑥時間は何ものかである。

存在するものは「働く」→↓

⑦時間は「働く」＝⑧すべてが一挙に与えられることを妨げる

// ほぼ言い替え　↓

⑨遅延(―停滞)　↓

＼⑩練り上げ(―既に知られた事実の再配置)

＼⑪創造、選択―⑫非決定

(偶然　／)

図　法則的な決定論の否定の論拠の展開

以上の通り、出発点における反省は、経験的、論理的に無理のない、非決定論の一種の論証になっている。現代においても充分な吟味が行われることが期待される。

もともと、出発点の反省において法則的な時間を意識において否定するということは、つまりは法則的な予測を否定することであり、法則的な決定論が否定されるのは当然である。しかし、法則的な決定論がおかしいから、法則的な決定論が否定されるとベルクソンは言うのではない。これまで見たように時間に注目した、もう少し細かな検討によっていることに留意が必要である。

ベルクソンの自由論は、出発点における、今述べた、科学的時間に対する否定の力を持つ直観によるものだけではない。直観による意識の直接的な把握も、その根拠となっている。しかし、否定の力を持つ直観による一種の論証は、知性的、言語的に捉えられた科学的時間から始めるものであり、知性や言語を重視する人々にも開かれた議論である。この論証は様々な立場に、開かれている。その意味でも重要と考えられる。

(2)　「働く」時間の位置

出発点の反省で得られる時間が「働く」ということは、時間に関わる考察から、法則的な決定論の否定に至るということである。そのことは、自由に道を開く。しかし、科学的

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

時間に関する反省でしかないとも言え、一定の限界を持っている。

第一に、「働く」時間の反省から直接的に導かれる結論は、あくまで、ものにおける非決定ということである。法則的な予測における時間ではないのだから、その時間では、予測という形での決定がないと言えることは明らかである。ただ、非決定には、偶然の場合も含まれており、「働く」時間の発想だけからでは、偶然ではなく自由だと積極的に主張することは出来ない。しかし、この議論が自由に道を開くとは言える。

第二に、「働く」時間とは、ベルクソンも「働く」時間を「創造の乗り物」[40]と言うとおり、その時間の中で創造が生まれうる時間であるということにしかならない。どんな自由な意識が、言わば時間としての「乗り物」に乗っているかは、実際に意識自身によって把握しなければ分からない。このことは、「働く」時間の発想を得たのちは、そこにとどまるわけには行かず、意識の自由な行為のただ中で意識による意識の把握に向かわなければならないという方向性を示唆している。ベルクソンが、初期に科学の研究の中で時間の観念にぶつかり、その後、「それまで関心をもたずにいた内的生活の領域に入っていった。」[41]というのは、こういう事情によるのではないか。第三に、いま触れたとおり、「働く」時間という発想は、導きの糸、方向性としても考えられる。「働く」時間の発想にとどまる訳には行かず、「働く」時間の中で、実在する意識を、さらには生命進化を考えることが促されるからである。少なくとも、ベルクソンはそういう方向に進んだと考えられるのである。

第 3 節　出発点の反省と否定の力を持つ直観

(1)　否定の力を持つ直観

a　直観

直観とは、哲学的方法[42]であり、認識[43]であると言われる。精神による精神の内奥の、共感的認識と言える[44]。そして、直観は「持続」とは切り離せない。ベルクソンは直観の一つの基礎的な意味として、「直観的に考えるとは持続の中で考えることである。」[45]と言う。直観とは、「持続」の中での、「持続」の認識である。そして、特に創造や新しさとの関連

---

40 PR、p.1333.
41 「緒論」、p.1255.
42 同上、p.1271.
43 同上、p.1273.
44 「形而上学入門」p.1424, p.1432.
45 「緒論」、p.1275.

では、「直観が、持続において、予測できない新しさの、絶え間のない連続を知覚する。」[46]と言う。直観の対象は、こういった記述からは精神や意識という実在である。既に何度も触れてきた「働く」時間とは直観の認識する対象における時間ということになる。

b　否定の力を持つ直観

ベルクソンは、「哲学的直観」において「直観にあるいは直観のイメージに内在する否定の能力」[47]について述べている。(こういう否定の能力を持つ直観を本稿では、煩雑さを避けるため、否定的な直観[48]と呼ぶ場合がある。)　「一般に受け入れられている観念や、明らかであると思われる主張やそれまで科学的と見なされていた断言の前で、直観は哲学者の耳に不可能という語をささやく。」と言う。そして、「漠然としていても、決定的な経験が、人が主張する事実や、人が与える理由は、その経験と両立不可能だ」と言い、「従って、事実は誤って観察されているに違いなく、これらの根拠は間違いに違いないと、哲学者に語る」と言うのである。否定的な直観とは、「ある漠然とした、しかし決定的な経験」が、主張される事実や与えられる理屈と相容れない、従ってそれらの諸事実は誤って観察され、それらの推論は誤りであると私に自分の声で語り」、「不可能である」と「ささやく」ものとして考えられている[49]。このように、否定的な直観には、主張される事実や理屈を否定する内容と、「ある漠然とした、しかし決定的な経験」の二つが含まれている。また、ベルクソンはこう言う。「哲学者の思想がまだ不十分にしか確信されておらず、その学説に決定的な何ものもないときに、哲学者の最初の歩みが、あるものを決定的に拒絶することであ

---

46 同上

47 「哲学的直観」、p.1348

48 直観が主として否定の力を持っているとき、本稿では否定的な直観と呼ぶ。これに対して、直接的で共感であると考えられるとき、直観ないし直接的な直観と呼ぶ。しかしながら、本章の第 3 節、第 4 節を除き、生じうる誤解を避けるため、場合に応じて、否定の力を持つ直観、あるいは出発点の直観という用語を用いる。問題であるのは、否定の能力である。否定的な直観と肯定的な直観の違った二つの直観があるわけではない。把握の仕方あるいは否定の仕方において、違いを見ることができると思われるのである。

49 デゼマールは、リセにおけるエレア派の論証の講義の際に、ベルクソンは、「運動の科学的概念について」この「不可能だ」という声をはっきりと聞いたのだろうと、「哲学的直観」の出た翌年に書いている。(Desaymard,Joseph, *La pensée de Henri Bergson*, Mercure de France, 1912, p.11-12)しかし、その後に出版される諸資料から、本論考で述べるように、ベルクソンの出発点における否定の力を持つ直観とは、科学的時間ないし予測法則における科学的な時間に関するものであるとする方がより適切であると思われる。第 6 節　出発点とゼノンの逆理の検討参照。

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

ることは明白ではないか。」否定的な直観の特徴をまとめれば、①主張される事実や与えられる理屈を否定する、②ある漠然とした、しかし決定的な経験がある、③哲学者の最初の歩みにおいて、あるものを決定的に拒絶することとして現れるということである。もっとも、この③は必ずしも必須ではない。否定的な直観は学説の展開の際に、自分の主張に対する、あるいは自らの直観からのずれに対する修正としても働くと考えられている[50]からである。さて、ベルクソンは、哲学的な反省の出発点で、「あるものを決定的に拒絶」しているのである。この「最初の歩み」における否定的な直観は、科学的時間を意識において拒絶する[51]。

(2)　ベルクソン哲学の反省の出発点と否定の力を持つ直観

以上の否定的な直観の規定と出発点における科学的時間に関する反省を比較すると、出発点の反省は、否定的な直観に当たると考えられる。PR の出発点の反省は、否定的な直観の三つの特徴を含んでいるからである。否定的な直観の特徴の①の従来の見解の拒絶について PR の出発点で該当するのは、物質的な宇宙の諸状態が「理論上予め計算できる」「映画のフィルムの上に並置された展開前のイメージ」ようになっていることが、意識や生命では否定されるところである。(PR の出発点の①②が従来の見解であり、③～⑥がそれに対する拒絶を示す。)否定的な直観の特徴である②の漠然とした、しかし決定的な経験とは、「時間は何かである」、「時間は働く(agir)」という経験である(PR の出発点の⑥⑦が該当する。)。ここで「働く」とは、「時間は、すべてが一挙に与えられることを妨げるものであるということである」[52]。否定的な直観の特徴の③については、PR で「私の諸反省の出発点とはかってそのようであった。」といっているところがそれに当たる。

また、ここでの否定的な直観についての考え方は、デュ・ボスの日記で見られるベルクソンの出発点ともよく一致している。「私は、時間とは人が言うところのものではあり得ないということ、そして別のものがあるということに気付いた。しかし、はっきりとは何で

50　「哲学的直観」、p.1348.

51　それまでに認められていた科学的時間を意識においては否定する直観は、一概に、反科学的で反知性的なのかどうか。ユッソンは、ベルクソンの哲学は、『道徳と宗教の二源泉』に用いられる言葉によって、「開かれた」知性主義だと言っている(Husson,L., *L'Intellectualisme de Bergson*, P.U.F., 1947, p.225.)

52　PR、p.1333

あるかは分からなかった。」[53]という、力学に関わる「時間についての認められた観念」を検討していた「出発点」のベルクソンの経験と一致していると思われる。まず、「一般に受け入れられている観念や、明らかであると思われる主張やそれまで科学的と見なされていた断言の前で」というところは、力学的な時間の検討において「出発点」が始まっていたことと照応する。第二に、「人が主張する事実や、人が与える理由は、その経験と両立不可能だ」というところは、「はっきりとはなにであるかはわからない」ものの「別のものがあるということに気付いた」と考えるところとほとんど同じだろう。第三に、「出発点」の経験について、「はっきりとは何であるかは分からなかった」と言っているのだから、確かに「漠然と」している。しかし、「別のものがあるということに気付いた」ことについては、決定的な経験であると見ることができる。

なお、PR の出発点において、時間を「働く」と捉え、それが遅延、創造や選択、非決定であるということは、漠然とした経験が直接的に捉えられて言われているのではない。時間の「働き」方がやや具体的に述べられているように見えるものの、科学的時間の否定、時間が存在することから、時間の働き方が導かれたものである。依然として、時間の経験が直接的に明確に捉えられているのではなく、その意味で漠然とした経験であることを出ていない。直接的に意識における時間が捉えられるには、持続の直観を待たねばならない。

(3) 否定と直観

何かを否定するためには、一定の根拠がいる。否定が諸前提から導かれる場合がある。あるいは、否定される内容が経験的事実との間で齟齬があるために否定される。ベルクソンにおける出発点の反省は、否定を含むが、論理的な操作による否定ではない。すべてが一挙に与えられる科学的時間を意識においても考えることに意識が抵抗している。拒絶は意識から直接的に生じる。例えば、空間と同時性しかない、科学的時間がどうして時間なのかということである。

ところで、否定的な判断については、『創造的進化』でベルクソンが分析している。そこでは、虚無の観念を否定する前提の議論として、否定からはいかなる観念も出てこない[54]、新しい種類の表象、内容のない観念を創造する力を否定に帰属させることはばかげている

[53] 「デュ・ボスの日記」、p.1541.
[54] EC、p.740.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

[55]と言われている。この他に、否定の特徴は、三つ挙げられている[56]。①否定的な判断とは、肯定的な判断に他の肯定的な判断を置き換える理由があることを支持する判断である。②この置き換えられる判断は、具体的にそれを知らないか、あるいは関心を引かないために特定化されない。③否定は、他人に意見しているか自分に意見している。否定は教育的、社会的な性格を持つ。

否定の力を持つ直観にも、この否定の特徴が見られる。この直観において、否定的な判断とは、時間は、意識においてはすべてが一挙に与えられる法則的な予測における時間ではないという判断であると言うことができる(科学的時間が意識においては別のものに置き換えられるべきであると言われている)(否定の特徴の①))。この判断に対して置き換えられる判断とは、時間とはどのようなものかということであるが、明示されていない。それは、科学的時間に関する否定的な判断では、置き換えるべき判断が知られていないからである(否定の特徴の②)。また、否定的な直観では、自分ないし哲学者に対し、意見をしていると言える(否定の特徴の③)。

直観とは、「精神に対する直接的な視覚である」と言われている[57]。科学的時間に関する否定的な直観の場合、概念的な操作による証明の結果、否定がなされているのではない。意識における直接的な時間の経験が否定を行っている。しかし、その意識における時間の経験は、決定的であっても漠然とした経験である。

第 4 節　出発点における否定の力を持つ直観と持続の直観

(1)　二つの直観

直観とは、精神による精神の内奥の直接的な認識である[58]。否定的な直観とは、否定の能力が内在する直観である。しかし、むしろその否定内容に注意が向けられるため、否定的な直観が認識する経験は、決定的であっても漠然としている。両者の違いは、否定内容の有無、経験の明瞭な直接的把握の有無の違いである。どちらも直観であるものの、違っ

---

55 同上、p.745-746.

56 同上、p.739, p.741, p.744.

57 「緒論」、p.1273, p.1285.

58 同上 p.1273, p.1285, 「形而上学入門」、p.1424.　直観という言葉をベルクソンが独自な形で意識して使用するのは、「形而上学入門」以降とされ、そこでは直観とは「精神による精神の内奥の(intime)認識」(p.1424.)と言われている。本稿では、直観の語はこの意味で用いる。『試論』には、空間の直観というカント的な言い方も見られるが、『試論』における持続を論じる際にも直観は、この意味で用いている。

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

た二つの直観である、あるいは直観の違った二つの側面である。

(2)　二つの経験

否定的な直観が捉える、時間の非決定という「働き」は、否定する内容と時間が存在するという漠然とした経験から捉えられている。これに対して、持続とは、直観が明示的に語られる『思想と動くもの』の「緒論」では、「内的な生活の流れの不可分な、そのことによって実体的な連続性である。」[59]　持続の直観は、出発点の否定の力を持つ直観に対して、意識諸状態が時間的に不可分ないしは相互浸透していることが直接認識されるという違いがある。

ところで、出発点において否定的な直観が捉える漠然とした経験と、持続の直観が直接的に捉える経験はどちらも意識の時間に関わる。この二つはどのような関係にあるか、三点述べる。

第一に、伝記的、歴史的事実がある。検討の順序がある。ベルクソンは、時間の問題を抱いて、「それまで関心を持たずにいた内的な生活の領域に入っていった。」[60]と言う。否定的な直観にある漠然とした経験をもっと明確に捉えようとする方向を否定的な直観は定めている。漠然とした経験に向かう先に持続があるという関係にある。

第二に、否定的な直観は学説の展開の際に、自分の主張に関する直観からのずれに対して修正としても働く。持続の直観は、出発点の反省とは異なった主張である。従って、主張が誤っていれば、否定的な直観の働く対象になる。「自分が肯定したことを変えるとすれば、それはやはり、直観に、あるいは直観のイメージに内在する否定の能力による。」[61]しかしながら、持続の直観に対しては、否定的な直観の修正の作用は働いていない。不可分な持続の直観的把握については、出発点の経験に対して、齟齬はないと一応言うことができる。

第三に、出発点において否定的な直観が捉える漠然とした時間の経験と、持続の直観が直接的に捉える時間の経験との関係についてである。持続は、不可分であり、各瞬間に異なる一つの全体であるので、同じ意識状態は繰り返さない。従って、法則的な決定論には従わず、意識状態の時間的あり方も、非決定であると言える。他方、否定的な直観の否定

59　「緒論」、p.1272.
60　同上、p.1255.
61　「哲学的直観」、p.1348

の内容は、すべてが一挙に同じ瞬間に与えられることの否定である。すべてが一挙に同じ瞬間に与えられことは、区別のある多数性を示すことであり、映画のフィルムの比喩でも分かるように空間に展開されているということである。『試論』では、「(前略)空間内に位置するものは区別のある多数性を構成し、またあらゆる区別のある多数性は空間への展開によって獲得される」[62]と述べられている。従って、すべてが一挙に同じ瞬間に与えられことは、区別されていることであり、否定的な直観とは、このことを否定するわけであり、否定の結果は、各瞬間は区別されない、不可分であるということになる。

非決定と言い、不可分と言いどちらも言語的規定である。そういう言語的規定に関しては、否定的な直観と、直観とは、互いに言語的な時間の規定が一方は他方から導かれるという関係にある。違った二つの直観が違った仕方で、同じ言語的規定を把握していると考えられる。非決定としての「働く」時間と、不可分な持続とは、言語的な把握としては同じ内容になる時間の捉え方だと言える[63]。

(3)　「働く」時間と持続[64]

(2)で述べた、二つの経験の違いを、「働く」時間と持続の違いとして、さらに吟味する。

a　持続の観念

ベルクソンの持続の観念について、ここで、おおよその規定をすれば次の通りである。『試論』では、①意識諸状態の相互浸透[65]②意識諸状態が相互外在的でないこと[66]、区別を欠いていること[67]、③持続が「利得」、「蓄積」[68]の時間的作用を持つことと捉えることができる。その中心的規定は、相互浸透である。また、「緒論」によれば、不可分ということで

62　『試論』、p.80.

63　第 3 章第 2 節参照。

64　「持続」の観念の成立を検討するということなら、とくに相互浸透という観念の由来を考えるためには、単に「働く」時間だけではなく、ゼノンの逆理の検討、さらに連合心理学に対する批判との関係の吟味が必要であろう。ここでは、そういった検討以前の問題として、特に「働く」時間との関係を考察している。(なお、ゼノンの逆理に関連して、デゼマールがエレア派の論証についての講義の終わりに持続の直観がやってきたと述べている点については、ベルクソン自身はやや否定的であると思われる(第 6 節参照)。グイエは、デゼマールとベルクソンの間の、この捉え方の違いについて触れている。(Gouhier, H., *Bergson dans l'histoire de la pensée occidentale*, Vrin, 1989, p.23.)

65　『試論』、p.68.

66　同上、p.72-73.

67　同上、p.68.

68　同上、p.102.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

ある。「緒論」では、既に述べたように、持続とは「内的な生活の流れの不可分な、そのことによって実体的な連続性である。」また、持続は「メロディの不可分で壊すことのできない連続性であって、そこでは、過去が現在の中に入り、現在とともに、未分の(indivisé)全体(tout)を形作り、その全体は、各瞬間に付け加わってくるものであるにもかかわらず、むしろ付け加わってくるもののおかげで、未分(indivisé)で、不可分で(indivisible)さえあり続ける。」[69]と言われる。『試論』と同じメロディを用い不可分ということが述べられており、不可分は①の相互浸透と同じものとして、一つの全体として一体であることと捉えられている。②の意識諸状態が相互外在的でないこと、区別を欠いていることも、結局は不可分なものがあることを示している。従って、不可分という規定を介すると、①と②は、規定的にはほぼ同一のことを意味することが分かる。

b　「働く」時間と持続

前項の③は時間に「利得」「蓄積」の「働き」を認めることである。つまり、持続の観念の中に、「出発点」の「働く」時間の考え方が持ち込まれている。持続とは時間に「働き」を認める観念である。なお、第 1 節(3)a(a)で触れたように、時間の「働き」に関わる表現には違いがあるように見える。PR の出発点の反省において、時間の「働き」とは、遅延、不決定、創造、選択であった。この違いは、物理的時間として、エネルギー保存則における可逆性を問題にするか、予測法則を問題にするかの違いである。連合説的な決定論を考えるか、物質的必然、物理学的な必然を念頭に置くかの違いでもある[70]。時間の「働き」として、主として過去の時間の「働き」を考えるか、来るべき時間を考えるかの違いでもあろう。しかし、時間が「働く」ものであると考える点については、同じと言える。

次に持続の観念を構成する②項についてである。「働く」時間の反省では、宇宙の各瞬間の状態を、「映画のフィルムの上に並置された展開前のイメージ」と考えることが疑問視されている。時間は空間と同じでないと考えられているからである。空間とは、ベルクソンによれば相互外在的なものである[71]。従って、相互外在的でないというこの②項も、「働く」時間の反省の中に既にあり、その反省から引き継がれている。

従って、①項の相互浸透、不可分こそ、出発点の反省との関係において、持続の観念に

69　「緒論」、p.1312.
70　第 2 章第 1 節(2)参照
71　『試論』、p.66.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

独自なものであると言えそうである。しかしながら、既に(2)項で述べたとおり、出発点の反省から、この不可分は導くことが出来る。すなわち、出発点の反省で、すべてが一挙に同じ瞬間に与えられることは、空間において区別されていることであり、否定的な直観とは、このことを否定するわけであり、否定の結果は、各瞬間は区別されない、不可分であるということになる。

また、この規定は言語的に充分な規定ではない。相互浸透(pénétration mutuelle)[72]とは、物質が不可入性(impénétrabilité)[73]を持つことと対比的に見て、物質の不可入性のあり方の否定と考えることができる。その場合、相互浸透とは、一種の否定である。不可分も可分的であることの否定である。この場合、否定による表現は、直接的に対象を表わすものではないことは、すでに第 3 節(3)で見た。相互浸透、不可分というベルクソンに独自な規定は、イメージによって語られるか、あるいは全体的に一つであること(相互浸透)とともに②項の区別を欠くことという規定も同時に用いられることによって語られることが多い。相互浸透について言えば、相互浸透するものは、各瞬間の意識状態である。意識状態のそれぞれが相互に浸透すると述べている。しかし、浸透した状態においては、各諸状態は区別を欠いており、そこには諸状態はない。区別のある状態と区別のない状態との相互に矛盾する状態を同時に知性的、言語的には考えられない。従って、時間的な前後の違いによってしか言語では表せない。すなわち、まず、区別を欠いた全体的な一つである状態を捉え、そこには、分析すれば、各諸状態を見分けうるとするような表現の仕方である。実際、持続とは過去から現在の意識状態を全体的な一つとして捉える把握であり、もしその全体を後になって分析すれば、区別のある諸状態としても捉えられる、しかし、その瞬間においては、意識諸状態を全体として捉える把握であるという以上の表現は困難である。つまり、持続の相互浸透を言葉によって直接的に把握するのは無理である。ベルクソン自身次のように述べる。「知覚、感覚、情動、そして観念は二重の側面のもとで提示される。一方は、正確で非人格的な側面である。他方は、漠然とした無限に動的でそして表現できない側面であり、言語が動的なところを固定すること無しにはその局面を把握することができないし、共通の領域にその局面を落としこむことなしに平凡な形式を適用することが出来ないからである。」[74]

---

[72] 同上、p.68.
[73] 同上、p.59.
[74] 同上、p.86-87.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

従って、ベルクソンが持続を説明するのに利用するのは音のイメージである。イメージによって、直接的に意識においては、過去から現在の時間が全体的な一つの状態としてあり、そう捉えていることを示す。それは各自の意識において、時間が全体的な一つとして現れていることを各自が直接的に見ることを誘うものである。大胆な小説家の行う「推察させる」[75]やり方である。言語で直接示すものではない。そして、たいていの場合、持続が全体的に一つであることを言うためには、持続の規定の②である、各諸状態が区別を欠くという規定に助けられている。つまり、言語的、知性的な規定に助けられている。結局、持続の独自性は、①の相互浸透、不可分にあるが、言語により直接表現できず、②の否定的な言語的表現に支えられている。そして、この②の規定は、「出発点」における「働く」時間の反省に由来しているうえに、①も出発点の反省から導き得る。

以上見たように、「働く」時間の反省のなかにある、重要な捉え方は、持続の観念の中に取り入れられている。「働く」時間と持続の違いは、直接的に明瞭に時間の経験を把握するのが持続であるという違いである。

以上の通り、持続の観念における時間のあり方を考えるとすれば、そこにおける時間は、「働く」時間であると見てよいと考えられる。持続の観念においては、意識諸状態が相互浸透するという意識諸状態のあり方と、時間的あり方とは切り離せず一体化している。しかし、持続の観念の時間的あり方に注目するとき、持続における時間は「働く」時間と同じであると見てよいと考えられる。つまり、持続における時間は「働き」を持つ。

従って、持続という言葉を用いて「働く」時間が語られることは当然である。しかし、そのとき、直観的な持続の把握からというより、否定的な直観から時間の「働き」が捉えられていると見られる場合が多い。つまり、時間の「働き」と否定的な直観の結びつきは強いと見られる。このことについては、5 節の「働く」時間の広がりでさらに触れる。

c　時間的あり方

以上から「持続」とは意識諸状態の相互浸透、不可分という時間的あり方の直接的な把握のことであると言える。「持続」が時間的なものであるのは科学で考えられている等質的時間との相違が語られることからも明らかだろう。一応そう言えるが、持続から時間だけを取り出すということは実際には難しい。

---

[75] 同上、p.88.

物理的な時間が、例えば、空間における直線上の点として考えられるのとは異なり、「持続」における時間は、空間的なものではなく、意識諸状態の相互浸透そのものの中に含まれているとしか言いようがない。ただ、『持続と同時性』[76]において、ベルクソンがメロディを例示として、音の諸性格をなくし、分離のない継続のみを保持することで、基本的時間を見出せるだろうと、断定ではなく条件法で語るところがある。そういう仮定的操作が行いうるとしたら見出される時間が、「持続」の観念における「働く」時間であろう。

(4)　二つの直観の関係―問いと答え

時間に関する否定の力を持つ直観を持続の直観と比較するとき、漠然とした「働く」時間が、持続の直観では不可分ないし相互浸透の持続として直接的に明確に捉えられている。漠然として時間的に「働く」時間として捉えられることの出来た意識の経験が、持続として明確になる関係に、両者はあると見ることができる。漠然とした経験であるということが、それは何かを問うていることであると考えれば、否定的な直観とは問いと言える。また、漠然とした経験を明らかにしたことを、答えであると考えれば、持続の直観は答えであると言える。否定的な直観と直観は、問いと答えの関係にある[77]。

また、否定的な直観から出発しているとすれば、否定的な直観とは、前提であり、答えの促しであり、方向、範囲を定めるものであり、直観の背景ないし根底である。

否定的な直観が問いであるとするなら、その問いは明瞭に意識されることはなくても、常に答えの前提としてあるということになる。著作は答えであるなら、ベルクソンにおいては否定的な直観としての問いを求めることから著作は始まるとも言える。否定的な直観を求めることはベルクソンの検討の方法とも言えるだろう。そして、あらゆる著作の根底にあるのが否定的な直観と言えるのではないか。そのとき、否定的な直観を求めることは、何かを生み出す一つの普遍的方法と言えるのではないか。

否定的な直観、今の場合は、科学的時間に関する否定的な直観であるが、時間が「働く」という否定的な直観は、持続の直観とは別に考慮されなければならないのは、問いとして大きな役割があるからである。

第 5 節　出発点の反省の重要性

---

[76] 『持続と同時性』、M98

[77] 第 5 節(5)参照。

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

出発点の反省は独自で根本的なものである。その特徴は次のようなものである。

①出発点の反省は知性的な認識とは別の認識である。ベルクソンは初めてこの認識に達している。これが後年、直観と呼ばれるものの始まりである。

②この反省は、この反省自身に留まらず、そこから直接的な直観に進むことを自らに促す反省である。

③存在は働くあるいは、存在するものとしての時間が「働く」という独自な考え方が、ここにはある。

④認識の方法と経験の実際的な把握に関し、ベルクソンに固有なものが生れるところをここに見ることができるように思われる。

そして、以下のような種々の点から、単なる出発点にとどまらない重要性を持つ。これまで述べたことも含め本節でまとめて述べる。

(1)　自由や直観など他の概念との緊密な関係

出発点の反省における否定の力を持つ直観は、自由や直観などベルクソンの哲学の他の重要な概念と緊密な関係を持っている。この点については、本論考の全体で扱う。第 2 章の自由に関しては、法則的な決定論の否定の一つの重要な根拠となり、また自由の内容の二つの側面の一つを生み出している。第 3 章の直観に関しては、否定の力を持つ直観が直接的な直観を確実性に関して支え、持続の内容の言語的な規定へも影響している。第 4 章の「可能的なもの」の錯覚に関しては、出発点の反省そのものが、「可能的なもの」の錯覚として拡張されていると考えられる。これ以外にも、『創造的進化』の機械論、目的論の否定に際しても、出発点の反省と類似の否定の力を持つ直観が「働き」、また、ベルクソンが他の哲学との違いを示すのに用いる映画的方法の錯覚も、一つの出自は出発点におけるこの直観と考えられる。出発点における否定の力を持つ直観は、ベルクソンの哲学にとって一定の小さくない地位を占めている。

(2)　知性的、言語的な検討と自由

出発点の否定の力を持つ直観に基づく自由の論拠については、否定される内容に関して、知性的、言語的な検討による把握があり、直接的な直観による把握に比べ、知性や言語を重視する立場に対しても、より広い吟味に開かれ、この論拠が共有財産となることが期待される。

これまで見たとおり、出発点の反省に独自性を与えているのは、ベルクソンの否定の力

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

を持つ直観である。ベルクソンに独自と思われるものが、直観的なものの関与無しに現れるはずはないから、直観的なものが考察に含まれるのは当然である。しかし、この反省に特徴的なことは、むしろ、大部分は、言語的、知性的な考察が占めているということである。否定の力を持つ直観により否定される、その内容が具体的に言語によって示されている。そういう意味で、この出発点の反省は、可能な限りにおいて、言語的、知性的な形をしている。独自な考察でありながら、可能な限りでの言語的、知性的な検討に開かれていることが、この出発点の反省の重要性を高めている。

(3)　『創造的進化』における否定の力を持つ直観

a　機械論、目的論の検討

機械論、目的論の検討に際しては、否定の力を持つ直観が働いている。このとき、否定の力を持つ直観における漠たる経験は、意識における時間経験から生命も含めた経験へと広がっている。

『創造的進化』の第一章で、生命進化に関し、機械論、目的論および進化に関する諸説を検討する中で、ベルクソンの最も広く知られた観念、エラン・ヴィタールが提示される。機械論的な説明の本質は、「未来と過去とを現在の関数として計算できるものとみなし、そしてすべては与えられていると主張するところにある。」[78]とベルクソンは言う。そのとき、「時間は有用でない」とされる。これは、出発点の反省と同じ思考過程である。出発点の反省と類似のもの(反省の中にある漠たる時間経験は、意識から生命を含めたものになっている)によって、機械論が生命進化に置いても否定されている。ところで出発点の否定の力を持つ直観は、目的論が関係する場面における直観ではない。ただ、目的論が否定されるのは、目的として「すべてが与えられている」[79]のはおかしいと考えることによってである。目的論の否定は、「働く」時間の場面と、決定的な部分では類似している。しかし、生命進化には、出発点の反省を超えた部分がある。純粋な目的論とは違った意味で、目的論を生かして、生命進化を捉えなければならないとベルクソンは考える。それは、原初の衝動(impulsion)を考え、諸傾向の方向を考えることである。目的論のように未来にすべてが計画として置かれているのではないが、ここでは、未来は傾向の方向性として幾分指し示めされている。それが目的論の何がしかを生かすということであろう。そして、それが、

78　『創造的進化』、p.526.
79　同上、p.528.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

エラン・ヴィタールの観念となる。エラン・ヴィタールの観念には、『創造的進化』における独自な考察が加わっている。しかし、生命進化を考える際も、機械論や目的論、各々の進化説を検討する際に、出発点の否定の力を持つ直観と類似の、否定の力を持つ直観が働いていると見ることができる。

b　映画的方法

映画的方法とは、ベルクソンが『創造的進化』の第四章で述べる錯覚の一つである。ベルクソンは、映画はフィルムの各コマと映写装置の中における運動を結びつけることによって運動を作ると考える。認識について、運動を瞬間的な写真、眺めとして把握し、その瞬間的な眺めを個別的な運動ではない、抽象的、一般的な運動によってつないで把握する仕方を、映画になぞらえて認識の映画的性格[80]と呼び、そういう認識の方法を、ベルクソンは映画的方法[81]と呼んでいる。知性には連続しているものを各瞬間の眺めとして切り取る傾向があり、その後、映写機の運動のような実際の個別的運動とは異なる一般的な運動によって合成して捉えると言う。知覚や知性的作用や言語は、瞬間的な眺めと抽象的で一様な隠れた生成を結び付け、生成を作ると考える。こういう瞬間的な眺めとして実在を捉える方法が、映画的方法である。

ベルクソンが出発点と言う「働く」時間の反省においても、映画のフィルムの比喩が用いられていた。物質的な宇宙の諸状態は、「映画のフィルムの上に並置された展開前のイメージ」のように、各状態についてが「理論上予め計算ができる」と考えることは、映画的方法による諸状態の把握である。出発点の反省とは、映画的方法に対する反省であると言える。つまり、出発点の反省、法則的な予測における時間の否定(第 1 節(3)a(a)の①～⑤)がそのままの形で、ベルクソンの哲学の中心的な著作で、映画的方法の錯覚と呼ばれている。すなわち、出発点において問題とされた「理論的上予め計算ができる」とする予測は、意識に関しては認識の持つ根本的な錯覚の一つと捉えられている。

『創造的進化』では、古代の科学、哲学(ゼノンの逆理を含む)、近代の科学、形而上学は、この錯覚としての映画的方法によっているとベルクソンは考える。そして、近世の形而上学は、映画的方法に従わされていたとして、主にこの点から哲学の諸体系を批判する。そういう重要な位置をこの映画的方法という錯覚は持っている。ということは、「働く」時

80 同上、p.752-3.
81 同上、p.754.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

間の発想もそこまで広がる重要な発想の最初の現われだと言える。映画的方法は、この方法によらないベルクソンの哲学と、他の哲学、科学とを分かつ決定的な特徴と考えられている。つまり、出発点の「働く」時間の反省は、ベルクソンの哲学の中心的な特徴になったと言える。さらに、『創造的進化』の第四章では、「働く」時間の反省の、時間の「働き」についても、科学との関連で語られる。既に若干触れたが、やや詳しく述べると、「すべてが映画のフィルムのように一挙に与えられてしまわないのはどこに由来するか」[82] (実質的に第 1 節(3)a(a)の①～⑤に相当する)と問い、「未来が、現在と並んで与えられるかわりに、現在の後に続くよう定められているのは、未来が現在の瞬間に完全に決定されてはいないからである」と、時間の不決定を述べる。「時間が絶えず予見不可能なもの、新しいものを創り出している」(第 1 節(3)a(a)の⑨～⑫に相当する)と時間の創造の「働き」を述べる。ここでは、出発点の反省のすべてが現れている。

映画的方法の錯覚から解放されるとは、時間に、不決定、新しいものの創造を認めることである。時間にこういう「働き」を認めるかどうかが、ベルクソンの哲学を他の哲学から分かつということである[83]。そして、映画的方法を錯覚とし、時間を不決定、創造および選択の乗り物とすることは、出発点の反省そのものである。そのことをいま見てきた。出発点の「働く」時間の反省の全体は、ベルクソンの哲学を他の哲学から分かつ特徴となっていると言える。

なお、映画的方法については、ゼノンの逆理の検討も関連しているのは明らかである。ベルクソンは映画的方法について述べた直後に、映画的方法は、「運動が不動性から作られるという不条理な命題を含む」[84]として、ゼノンの逆理を引いている。ゼノンの逆理の検討と出発点の反省との関係については、第 6 節で触れる。

(4) 否定の力を持つ直観の修正の働き

否定の力を持つ直観は学説の展開の際に、自分の主張に対する、直観からのずれに対する修正としても働く。既に触れたように、自らの主張であっても、それが直観からずれ、

---

[82] 同上、p.782.

[83] 他の哲学と自らの哲学の一つの大きな違いが、時間に「働き」を認めることであることを、ベルクソンは別のところでも語っている。「真実は、哲学は率直に、この予見できない新しいものの創造を認めたことはこれまで決してなかったということである。」(PR、p.1344)

[84] 『創造的進化』、p.755.

誤っていれば、この直観の働く対象になる。「自分が肯定したしたことを変えるとすれば、それはやはり、直観に、あるいは直観のイメージに内在する否定の能力による。」[85]否定の力を持つ直観には自らの主張と自らの直観との乖離を図る力がある。このことは直観を、言語を用いて表すときにも一定の効力を持つだろう。

(5)　解決を促す問いとしての否定の力を持つ直観

出発点の否定の力を持つ直観と持続の直観との関係は、時間に対する漠たる経験が持続として明確化される関係にある。この直観は、明確化を促すと問いとして考えられる。この点については、本章第 4 節(2)で触れた。その場合、解は、問いが規定する範囲内に限定されるとも言える。

ベルクソンは、「哲学において、他のところでさえも、問題を解決することより問題を見つけること、その結果、問題を提出することが重要である」[86]と言っている。また、問題を提出することは、単に発見すること(覆いをとりさること(*dé*couvrir))ではなく、発明することであるとも言う。さらに、問題は解かれるときにしか提出されないとも言っている。問題の提出と解決は、ここではほとんど同等である。「緒論」の最後では、「緊張、集中、我々が精神に関して各々の新しい問題に対して、完全に新しい努力を要求する方法を特徴付ける言葉は、そのようなものである。」[87]と言い、主要著作で扱ってきた問題を例として挙げている。例えば、「私の真の哲学的な方法への着手は、内的生活の中に最初の経験の領域を見出し、言語的な解決を捨てた日にさかのぼる。」[88]哲学的な方法とは直観である。ここでは、問題は科学的時間ではない意識の時間はどのようなものかということであり、解決は、持続の直観ということである。ベルクソンは方法について、準備的な、科学的知見の徹底した検討を行うことを述べている[89]。また、「形而上学入門」では文学的著作において、資料の収集検討から題材の核心へ、著作の衝動を求めにいく例示によって、哲学的な直観を得るさまが説明される。科学的知見の徹底した検討から、文学的著作における衝動と同じ種類の何か哲学的な直観を哲学者は求める[90]。このとき、問いと答えとしての直観

85　「哲学的直観」、p.1348
86　「緒論」、p.1293.
87　同上、p.1329.
88　同上、p.1329-1330.
89　同上、p.1309.
90　「形而上学入門」、p.1431-1432.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

は明確に区別されていないものの、直観を求めようとすることの中に問いはある。求めること自体が問いである。そして、この問いは、準備的な、科学的知見の徹底的検討から生れる以外には生れようがない。つまり、検討対象である科学的知見について否定的なものを見出すから、肯定的なものを求めるということである。つまり問いとしての否定の力を持つ直観がそこにはある。

出発点においても、ベルクソンは既に述べたように、特に科学的な時間の研究を行っていた。そこで否定の力を持つ直観を得、そこから持続の直観に至る。この過程には二つの直観あるいは直観の二つの側面を見ることができる。また、『創造的進化』における、エラン・ヴィタールの直観のときにも、否定の力を持つ直観が始めにあった(第 5 節(3)a 参照)。ベルクソンは、「緒論」で、「自分の知らない科学に入門してそれを深く極め、必要の際にはそれを改める」という方法を語り、「この方法は、年齢がどのようであっても、自分が再び学生になることを哲学者がいつも覚悟していることを要求する」[91]と言う。否定の力を持つ直観の一つの特徴は、哲学者の最初の歩みにおいて、あるものを決定的に拒絶することとして現れるということは既に述べた。既に哲学者として歩み始めたのちも、ベルクソンの選ぶ方法が、常に再び学生になる覚悟を要求するものなら、もう最初の歩みではないのではあるけれど、否定の力を持つ直観があり、そこにある漠然とした経験に対して直接的な直観を求めに行くと考えることが出来る。否定の力を持つ直観が問いとしての漠然とした経験を与えるということは、持続とエラン・ヴィタールの二つの例に限らず、ベルクソンの常に学生になる覚悟を求める方法に必ずあると考えられる。もちろん、問いと答えが画然として区別されず、専ら答えとしての直観を求めようとすると意識されることはあるだろう[92]。

(6) 知性の核の周りのへり

ベルクソンは、『創造的進化』で知性と直観の関係について、知性は輝く核であり、直観はその回りにある、あいまいな縁(へり)であると言っている[93]。「一方で、確かに、直観は、どうして知性的な枠がもはやここではその正確な適用を見出さないかを示すために、知性

91 「緒論」、p.1309.
92 否定の力を持つ直観を求めることはベルクソンの方法となっていると言えるのではないか。本節(10)参照。
93 『創造的進化』、p.492, p.534, p.645.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

の仕組みを利用するだろう。他方で、その固有の仕事によって、直観は我々に少なくとも知性的な枠の代わりに置くべきものの漠然とした感情を暗示するだろう。」[94]この部分の前半は、とくに否定の力を持つ直観が、知性的な主張の否定であることとよく照応している。また、後半は、否定の力を持つ直観が、漠然としているものの決定的な経験をその内容としていることと対応する。

以上のことは、出発点の反省によく現れている。法則的な予測という知性的な把握がはっきりとして輝く知性的な核である。科学的な時間が何もしていないと考え、意識ではそれはおかしいと考えるのは、知性の縁にある、ぼんやりとした直観である。直観が働くためには、知性の核が必要である。知性的把握を強めることによって、その周りにある直観の縁を生かして、実在を捉えようとするのが、ベルクソンの検討の進め方だと言える。直観と知性の関係を見る上でも、出発点の反省は重要である。

(7) 否定の力を持つ直観と錯覚

科学的な時間を意識に適用することは錯覚である。否定の力を持つ直観はその適用が誤りであることに気づいている。従って、出発点の反省は、否定の力を持つ直観が働き錯覚を避ける反省である。問題が錯覚によるという捉え方は、自由の問題、虚無、無秩序、映画的手法、可能的なものを錯覚と捉える展開につながっており軽視できない。

ベルクソンの哲学的問題の解決の仕方は、その問題自体が錯覚によって生じているものだということを示すことによる。自由の問題がその典型的な例である。意識の時間を空間化するから自由かどうかということが問題になりうる。意識の時間を空間化しなければ、自由は事実としてそこにあり、自由は問題ではなくなる。「自由の問題は誤解から生れたのである。」[95]

映画的方法は、実用に応じたものであり、運動を眺めの瞬間的な写真にとり、空間化する。虚無、無秩序、可能的なもの(possible)も、実用のために作られた言語による観念を、思索の領域に適用することから生ずる[96]。いずれも実用の領域の捉え方を思索の領域へと

---

94 同上、p.646.

95 『試論』、p.156.

96 『創造的進化』第 3 章と第 4 章の、それぞれ無秩序、虚無の錯覚の議論と、PR の議論を参照し、後者において、「第二の誤謬(虚無)がすでに第一の誤謬(可能的なものの錯覚)のうちにふくまれていることは容易にわかる。」(PR、p.1336、括弧内は引用者。)とのベルクソンの考え方を踏まえ、突き詰めれば、観念の問題になると考えた。

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

適用する、また空間的でないものを空間化して捉える錯覚と言える。

ベルクソンの哲学は錯覚を見つけ回避し、実在に直接向かう哲学である。出発点の反省は、ベルクソンの哲学的問題の解決の仕方の起源をなすものと言える[97]。

(8) 「働く」時間の広がり

否定の力を持つ直観から捉えられる時間の「働き」は、主要著作に広く見られる。『試論』や PR だけにとどまらない。

a 「働く」時間の性格

「働く」時間の性格について、留意すべき事項について、これまで述べたことも含め、ここでまとめると次のようになる。第 5 節では出発点の反省の特徴をまとめたが、ここでは、そことやや重複する部分があるものの、「働く」時間の特徴としてまとめる。

第一は、時間が「働く」ということは、科学的な法則における時間の意識への適用を否定することによって明らかになる。知性的な認識とは別の認識、つまりは直観によって捉えられる時間である。

第二に、時間が「働く」ことは、法則的な決定論を否定することであり、そのことによって自由の根拠の一つとなる。

第三に、この時間を意識において直接に捉えることで、持続の直観に達する。直観と持続に対して、「働く」時間は、根底的なものであると言える。

第四に、時間が「働く」という捉え方の背景に、存在するものは働くという捉え方が恐らくあると考えられる。

第五に、時間が「働く」という認識の確実性は、概念による論証から得られるものではない。その把握が、概念操作からも、経験的な法則からも得られるものではないからである。

ベルクソンは、しかし、科学的な時間の吟味、検討ののちに、そこから否定の直観的な力により浮かび上がってくるものとして、意識において時間は「働く」という認識に達している。物質、意識、生命についての全人生をかけた研究によっても、この時間の認識は、揺らぐことはない[98]。

b 「働く」時間の広がりの特徴

97 第 4 章第 3 節参照。
98 第 3 章第 2 節参照。

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

「働く」時間が、「働き」を持った時間として、あるいは「持続」に含まれる「働く」時間として、ベルクソンの思考を進める場面は、主要著作で見られる。その多くの場合、否定の力を持つ直観から由来していると見られる。やや全体的な視点から、第 4 節(3)b で触れたことも含め、三つの特徴的な点を述べる。

第一点は、「働く」時間の、その「働き」の内容が著作の時期によって違うと思われることである。『試論』では、時間の「働き」は、既に述べたように、「蓄積」や「利得」と捉えられている。それに対し、『創造的進化』では、その「働き」とは、不決定であり、創造や予測できないもの、新しさを生む「働き」である。どちらも内容的には、時間の効果、「働き」のことであり、その効果が、科学的法則における時間の否定として考えられる点は各著作に共通なので、そこにある時間を「働く」時間と言いうることは間違いない。ただ、「働き」の色合いに差が認められるのである。

第二に、この色合いの差は、時期によって最も問題とされる、科学的な法則の違いによるのではないかということである。『試論』の時期では、時間の「働き」としての「蓄積」、「利得」に直接関係するのは、予測法則というよりもエネルギー保存則の否定と見られる。エネルギー保存則の適用できる系では、諸点が元の位置、状態に戻ることができるのは、おかしい。時間経過は蓄積するはずだし、経過によって何かが得られているはずだとベルクソンは考えるのである。それに対して『創造的進化』では、物理学は出来事を「展開されて空間化した時間の中にあるもののように考察する」[99]と言っているので、『試論』とは異なり、未来を予見する法則が知性の働きや機械論との関係で問題にされていると思われる。そこから、時間の「働き」としては、創造や発明、新しさを生むことと考えられている。

第三に、その「働き」の違いは、自由の捉え方の違いとも関係しているように思われる[100]。つまり、『試論』では、自由は主として「内的状態の外部へのあらわれ」として考えられている。自由な行為とは、過去の全体験に呼応する[101]とも考えられている。これは「蓄積」ということそのものだろう。言わば過去の全体験が、相互浸透しつつ現れること、蓄積としてあらわれることが、すなわち自由である。これに対して、時間の「働き」が新しいも

99 『創造的進化』、p.784.
100 第 2 章第 1 節(2)参照。
101 『試論』、p.112.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

のの創造として捉えられる[102]『創造的進化』では、新しさや創造として自由が考えられている[103]。

c　主要著作での「働く」時間

以下に、主要諸著作で示される「働く」時間を、簡略に示す。

「働く(agir)」という言葉は『試論』でも、一度用いられている[104]。『試論』では、時間の「働き」が「蓄積」や「利得」として考えられていることについては、既に何度か触れた。そして、エネルギー保存則との関係からだけではなく、因果関係の観点からも、時間が考察される。「デカルト的物理学やスピノザの形而上学、あるいは現代の科学理論」が「原因と結果との間に論理的な必然の関係を確定しよう」とし、「持続の作用(action)を無に帰する」「傾向」[105]が問題にされる。

『創造的進化』では、一章、三章、四章において「働く」時間を見ることが出来る。[106]科学の分析、機械論や目的論の考察、あるいは形而上学についての考察から、それらにおいては、「すべてが与えられている」ことが問題であり、そのこととの対比で、時間の「働き」が語られる。あるいは、記憶によって、その「働き」が示される[107]。さて、『創造的進化』で示される時間の「働き」とは、第四章(「近代科学」[108])のところで示されるように、主として、不決定、新しさ、創造をもたらす「働き」である[109]。「映画のフィルムの上でのように、すべてが一挙に与えられていないのはなぜか」と問われ、未来は「予測不可能なものと新しいもの」を作ることが述べられている。

『道徳と宗教の二源泉』においては、第二章で『創造的進化』において論じられた「エ

102　『創造的進化』、p.782.
103　同上、p.724.
104　『試論』、p.101.
105　同上、p.137.
106　時間や持続の「働き」に関して、「効果的な作用」(p.508.)、「不可逆な働く持続(durée agissante)」(p.508.)、「持続の作用(action)」(p.519.)、「時間は効果(efficace)を欠いている」(p.527.)、「時間は無用(inutile)になる」(p.528.)「実在的に働く持続(durée réellement agissante)」(p.699.)、「持続が効果(efficace)を持たない」(p.787)「効果的(efficace)なあらゆる持続」(p.787.)、「持続に対して効果的なあらゆる作用(toute action efficace)を否定する」(p.801.)などと言われている。
107　『創造的進化』、p.508.
108　同上、p.781-782.
109　同上、p.724.

ラン・ヴィタール」の概念を再説する際、機械論と目的論では「未来は、現在から計算によって演繹されるか観念の形のもとで描かれ、時間はその結果、効果(efficace)なしとなり、生命の諸創造は予め決定されている」[110]と、批判されている。

『物質と記憶』においては、時間の「働き」は、不可分な持続との関係が強い。過去の時間の具体的な働き方を示すものが記憶と言える。「我々の過去は、逆に、もはや働かず(n'agit pas)、働きうるものであり、現在の感覚の中に挿入されることによって過去がその生命性を借りて働くようになる(agira)ものである」[111]。[112]

(9) 原初的直観の一つのイメージ

ある哲学の基には、ベルクソンは「学説を生む直観」[113]、「哲学者がその力を汲む直観」[114]、「原初的直観」[115]、「体系がそこから降りてくる直観」があると考えている。否定の力を持つ直観における、時間が「働く」という漠たる把握は、ベルクソンにおける「学説を生む」「原初的直観」の一つのイメージであると考えられる。そう見るとき、この直観は重要である。

ベルクソンの場合、様々な著作の出発点における漠たる経験は、すべて時間の存在に関するものである。『創造的進化』でも、機械論、目的論に否定の力を持つ直観が働くとき、そこにある漠たる経験は、生命進化という時間に関するものである。本稿の論証の範囲を超えるが、『道徳と宗教の二源泉』(以下、DS と称する。) においても、閉じられたものに対する否定の力を持つ直観の問いから、直観による直接的な、開かれたものについての答えの把握へと進む手順を原理的に考えることができる。否定の力を持つ直観にある、時間に関する漠たる経験は、意識における時間から、生命へ、神的なものへと拡大していると見うる[116]。しかし、その核には、意識における時間がある。このことは、直観の側から

110 『道徳と宗教の二源泉』、p.1072.
111 『物質と記憶』、p.370.
112 「緒論」では、「時間の諸効果を消す」(p.1256)、「持続は効果的である」(p.1267.)と言われている。
113 「哲学的直観」、p.1357.
114 同上、p.1360.
115 同上、p.1357.
116 「緒論」では、『試論』以降のあらゆる進展は、経験の領域の拡大であったと書かれている(p.1330.)。「緒論」の末尾には、1922 年 1 月と書かれているので、「緒論」を含む『思想と動くもの』は、1932 年の DS の発刊後の 1934 年の出版であるものの、DS まで含んでは述べられていないと一応は考えられる。

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

言うと、もちろん、持続が生命進化、神的なものに拡大されているということである。いずれにしても、ベルクソンにおいては、問いとしての漠たる、決定的な経験の核は意識における時間であることで一貫している。そう見ることができるなら、ベルクソンにおける原初的な直観の一つのイメージは、意識における時間が「働く」というイメージであると考えられる。

哲学者は、「自分の原初的な直観の単純さを増大する近似で与える」[117]以外のことは出来ないともベルクソンは考えている。ベルクソンにとって直観こそ、もっとも厳密なものである[118]。

そして、直観が表現されるためには、概念とイメージを用いる以外に方法はないとも言う。このうちイメージは、「具体的な直観の単純さとそれを翻訳する抽象概念の複雑さ」[119]の間にあって、概念的で必然的に記号的な表現よりも、はるかに直観に近いと考えられている。解釈者は、原初的直観をあいまいな考えにしないためには、こういった中間的なイメージを復元しなければならない、とベルクソンは言うのである。[120]もっとも、哲学の解釈者が、直観に近いイメージに到達したとしても、同じイメージをその哲学者が持っていたかどうかは分からないし、ベルクソンもそのことを否定はしない。

持続は、ベルクソンの哲学にあって、中心的な観念である。ただ、その観念の形成の前に時間は「働く」と捉える転機があり、それが意識の直接的把握を促した。「働く」時間の発想は、持続の観念の前提でもあり、意識を直接把握することへの促しでもあった。「持続」の観念が成立してからは、「働く」時間は、時間単独では持続から切り離し難く持続における時間としてある。そして、持続の観念における諸状態の相互浸透よりも、むしろ時間の「働き」がベルクソンの思考を展開させている場面が諸著作で引き続いて見られている。

漠然とした時間の存在という核と、そこから持続、生命進化、神的なものの直観に至る哲学を生み出す、そういう直観と、その直観に近いイメージを考える場合、存在するものは「働く」また時間は「働く」というイメージは、ベルクソンにおける根底的直観の一つのイメージと考えられる。

---

117 「哲学的直観」、p.1347.
118 同上、p.1356.
119 同上、p.1347.
120 同上、p.1355-1356.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

(10)　検討の方法

ベルクソンは、既成の観念を退け[121]言葉による解決を投げ捨て[122]、経験から出発する[123]と言う。そしてこの経験の領域の拡大がその後の進展[124]であったと言う。そういった場合、新たな領域に関係する科学に入門し必要であればその科学を改めもするとベルクソンは言う。(5)で触れたように新たに学生になる覚悟を要求される[125]と言う。そのようにして実証科学の諸材料を集め、拡大した経験の領域から直観を得ようとする。このとき、関係する諸科学に関して学生であることから始めるなら、まさに哲学者の最初の歩みにおいて、あるものを決定的に拒絶するという否定の力を持つ直観がその拡大された領域で生じると考えられる。結局は直観的な直接的な対象の把握を求めるにしろ、否定の力を持つ直観によって問いを捉えながら、直観という答えを求めるということになると思われる。本節(5)でも触れたが、否定の力を持つ直観により問いを見出すという方法がベルクソンの検討の方法ではないかと考えられる。また、少なくとも著作に関わる問いであるなら、(5)でも述べたように、事実の検討の中から否定せざるを得ないものとして現れる以外の仕方では問いは現れないだろう。

出発点の反省には、すでにベルクソンに独自な対象の把握の仕方がある。それは、知性による実在の把握を徹底的に検討した後に、その実在が知性的な把握だけでは捉えられないものを持つとする否定の力を持つ直観による判断があり、新しい実在のあり方を知性ではない認識の仕方で(直観で直接的に)把握するという検討の進め方である。 a 知性的な把握の試み、 b 知性的な把握に対する直観による否定、 c 直観による新しい実在の直接的把握という過程である。(a の過程は第 1 節(3)a(a)の PR の出発点の①②にあたり、 b の過程が③～⑥にあたり、それが論証的に展開されるのが⑧～⑫である) c の過程は、「働く」時間の反省の場面では、方向性としてのみ現れている。 c の過程は完全に終わっていると言えず、持続の観念の成立という仕上げが残されている。この検討の進め方は、(3)項で既に述べたように、エラン・ヴィタールに至る検討の過程においても、①機械論、目的論、進化の諸説の検討②知性的把握では進化は捉えられないという否定③エラン・ヴィタールの発見という過程として現れている。生命進化における原初の衝力というものも、知性的な

121　「緒論」、p.1324.
122　同上、p.1330.
123　同上、p.1286.
124　同上、p.1330.
125　同上、p.1309.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

把握をはみ出るものとして、直観を生かして捉えられている。

第 6 節　出発点とゼノンの逆理の検討

ベルクソンは、PR の出発点では、ゼノンの逆理の検討に触れていない。また、第 1 節(2)で吟味した『試論』に記載された出発点については、反省の出発点として、「エレア学派の錯覚」の部分は指定されず、その直後の「速度と同時性の部分」が指定されている。このベルクソン自身が記した出発点の反省の記述から、ベルクソンが出発点の反省と言うのは、あくまで科学的時間を意識では否定するという反省であると言える。ベルクソンの叙述に基づき、ゼノンの逆理の検討とは切り離して出発点を扱っていくことが出来ると考える。本稿では、出来るだけ問題を絞り出発点の科学的時間に対する反省を検討するため、ゼノンの逆理はそのための必要最小限において扱っている。ゼノンの逆理の持つ意味の検討には、恐らく別稿を要する。

なお、以上から、ベルクソンが科学的時間に関する出発点の反省とゼノン逆理の検討を分けていることは明白だと考えるが、念のため補足する。『試論』の出発点では、正確を期せばわずか一文ながら、既に触れたところではあるが、第 1 節(3)a(b)の⑦で次のように言われる箇所がある。「もし力学が、時間に関し同時性しか保持しないなら、力学は運動自身に関して不動性しか保持しないと述べることに我々は根拠があった。」[126]この後半はゼノンの逆理についてのベルクソンの捉え方を語っている。直前にあるゼノンの逆理の検討を受けて書かれている文章である。ただ、このたった一つの文のしかも半分にゼノンの逆理の検討結果を指す部分があることをもって、ベルクソンの言う出発点とは、ゼノンの逆理の検討のことだというのは、無理がありすぎると思われる。

また、デュ・ボスの日記でも、出発点とは、科学的時間の検討を指していると考える。デュ・ボスの日記はよく知られた資料であるが、この点について補足する。

デュ・ボスは、ベルクソンに対して、恐らく、それまでに出ていたデゼマールの著書の記述に関し次のように尋ね、その結果を日記の中に記している[127]。デゼマールの断言の中にある真実は何か、ベルクソンに持続の直観が来た、エレア派の議論を述べた講義の終わりで、何があったのか。これに対して、ベルクソンは、次のように答えている。①事態は

126　『試論』、P.79.

127　Du Bos ,Charles, *Journal 1920 - 1925*, Buchet/Chastel, 2003, p.129-137.および *Oeuvres*, p.1541-1543.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

少し違った仕方で起こった。②依然としてあいまいな、出発点は次のようなことだった。時間は言われているようなものではあり得ない、別のものがあると理解した。しかし、依然として明晰に何であるかは分からなかった。③エレア派のゼノンの詭弁を私の生徒に黒板で説明したある日、どの方向に探求しなければならないかをより明瞭に理解し始めた。④デゼマールの言ったことの中にある真実の部分とは、このことに帰着する。

デゼマールの言ったことの真実の部分ということについては、出発点とは何かについてもう少し見たあとで触れる。ここでの問題は、あくまで、ベルクソンは出発点ということで何を意味しているかということである。その点から見ると、ベルクソンの答えからは、ベルクソンが出発点と呼ぶものが、②にまとめた内容から時間に関する検討であるということが分かる。ゼノンの逆理の検討は、科学的時間の検討とは区別されている。ジェイムズ宛の手紙でも出発点とは、科学的時間に関わる反省である。そのことの確認を本節で行おうとした訳である。

さて、デゼマールは、その著書の中で、エレア派の議論をリセの生徒に述べた講義の後、好んで行っていた散歩の途中で、ベルクソンは次の内容の観念に打たれたと記している[128]。①時間の数学的概念は実在的な持続を考慮していない。②この実在的持続が、我々の心理的生の生地であり、意識によって我々に直接的に与えられており、恣意的な分解の方法にも測定にも適さない。また、③このひらめきの周りに、ベルクソンの精神に芽生えていた理論が凝集し、博士論文の計画が決定したとも述べている。さらに④1912 年の著作では、ベルクソンの「哲学的直観」(1911 年)で言われる「否定の能力」を引用し、ベルクソンはエレア派についての上述のリセの講義で議論したばかりの運動の科学的概念について、「不可能」という声を聞いたと述べている。

デュ・ボスの日記でベルクソンが、事態は少し違った仕方で起こったというのは、以上で述べたデゼマール記述とは違うということであろう。エレア派のゼノンの詭弁を私の生徒に黒板で説明したある日、どの方向に探求しなければならないかをより明瞭に理解し始めたとベルクソンは言っている。デゼマールが①～④で言うような比較的決定的な成果と思われることに対し、得られたのはあくまで探求の方向に関する理解だとベルクソンは語っているように思われる。また、ゼノンの逆理の検討がベルクソンに影響を与えたのも、出発点の頃の時期だと分かる。もっとも、どの方向に探求しなければならないかが分かっ

[128] Desaymard,Joseph, *La pensée de Henri Bergson*, Mercure de France, 1912, p.11-12 および *H.Bergson à Clermont-Ferrand*, Bellet, 1910, p.15。

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

たという、その探求の方向が何を意味するかは、ここでははっきりしない。

ところで、ベルクソンのリセでの講義の記録のⅣに、エレアのゼノンについてベルクソンが行った講義を生徒の一人が書きとめた記録がある。黒いノートと呼ばれるギリシャ哲学史の講義の中に含まれており、講義の記録を編集したアンリ・ユードは、それが1884-1885年の講義だと推定している。これらを前提にこの講義を見ると、最後はこのようになっている。「いずれにしても、運動を前にして、実在が不条理か、実在が錯覚的であるかをともかく認めなければならない。」[129]その直前は「-------、エレア派は、思考と実在の間に矛盾があるというのではなく、現れるところの大部分は錯覚であると結論した。」と書かれている。

この部分から、ベルクソンがどの方向に探求しなければならないかが分かったというときのその方向について、一つの推定が出来る。ベルクソンは、思考と実在の間に矛盾があるという方向へ探求すべきと考えたとのではないか。知性と実在のあり方に齟齬がある場合があると気づいたという推定である。もし、そうであるとすれば、この点からも、ゼノンの逆理がもたらしたものとは、直接的には科学的時間の問題とは別と言える。

なお、ユードは、この講義の記録Ⅳの序文で、ベルクソンによるゼノンの講義について次のように書いている。「その驚くべき表現(「いずれにしても、運動を前にして、実在が不条理か、実在が錯覚的であるかをともかく認めなければならない」ということ)を精神の中で、ひっくり返しまたひっくり返しながら、その驚くべき表現は持続の直観の存在を示す逆理でしかないのだが、持続の直観が精神に突然現れるまで、クレルモンの大きな広場を散歩するベルクソンを想像することは、過度のロマンティスムに陥ることなく許される。」[130]ユードは、講義の記録に、デゼマールの記したことを重ね合わせているようだ。そのことの是非は本稿の主題ではない。またゼノンの逆理が、出発点において一定の意味をもつことを否定するつもりなどない。ゼノンの逆理がベルクソンの哲学に持つ意味については、既に述べたように別稿を要する問題だと考える。

ただ、確認したいのは、ベルクソンにとって、哲学的な反省の出発点とは、あくまで、科学的な時間を意識へは適用できないという否定の力を持つ直観だということである。デゼマールの捉え方に対しては、出発点の時期のベルクソンには否定の能力を持った直観と言えるものがあると考えること自体には異論はない。ただ、この直観についての、「哲学的

---

129 *Bergson Cours Ⅳ Cours sur la philosophie grecque*, P.U.F., 2000, p.179.
130 同上、 p.12.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

直観」による説明によれば、その説明の①の主張される事実や与えられる理屈を否定すると言う意味で、もっともふさわしいのは、科学的な時間を意識において否定する出発点における反省であるということである。また、事実として、出発点とベルクソンが述べる「働く」時間の反省では、ゼノンの逆理の問題が触れられていない。

ところで、ベルクソンにとってのゼノンの逆理の意味は、『試論』の叙述によってまとめれば、おおよそ次のようになる。①運動は「移動するその作用」であり「不可分な行為であること」②運動と運動体が通過した空間との混同がある③空間で時間は作ることができない④運動は心的過程である。このうち、③の時間は空間ではないというところは、出発点の反省と共通している。また②のように運動が空間化されると逆理が生じることは、空間的された科学的な時間が問題を持つという、出発点の科学的な時間に関する反省を支えたかもしれない。①は、持続の観念の相互浸透の内容に近い。ゼノン逆理の問題が、意識が直接的に見るものを暗示したということは言えるかもしれない。また、②③によって知性が、不動性から運動を作る傾向があり、誤りないし錯覚を犯すことがあることが決定的に示されると言える。『試論』の最後は、既に触れたように自由の錯覚と運動の錯覚が対比される見事な分析で締めくくられる。「自由の問題は、それゆえ誤解から生れた。エレア派の詭弁が古代人に対する関係は、その問題が近代人に対する関係と同じである。その問題は、これらの詭弁と同じように、継起と同時性、持続と延長、質と量を混同する錯覚の中にその起源を持っている。」[131]。

出発点の反省とゼノンの逆理の検討との大きな違いは、時間の「働き」の観点は、ゼノンの逆理の検討からは出てこないと思われることである。ゼノンの逆理の検討は、法則的な予測における時間そのものに対する検討ではないという点である。本稿では、時間の「働き」と、それが出発点であるということの意味の解明を試みている。出発点の反省に関する検討において、ベルクソンによるゼノンの逆理の検討に触れることが少ないのは単にそのためである。反省の出発点とベルクソンが言うのは、科学的時間に対する反省だということである[132]。[133]

---

131 『試論』、p.156.

132 しかしながら、科学的な時間に関する反省とゼノンの詭弁の関する考察との間には、幾つかの共通点がある。上述のように、出発点における考察としては、予測における科学的な時間が問題であるかどうかで決定的に違っているものの、両者には共通点があり、ここで整理する。①どちらも知性的な認識が問題とされている。出発点の反省に関しては、法則に基づく予測に用いられる時間が否定される。ゼノンの詭弁の検討では、知性は運動

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

を軌跡と見なそうとする。いずれの場合も「思考と存在の間に矛盾がある」と考えられていると言える。②前者では、時間に関して、後者では運動に関して、空間化することが問題になっている。③出発点の反省は、その展開によって、言語的な規定に関して不可分な持続を支える。ゼノンの詭弁の検討に関しては、「運動が、一つの点から他の点への移行として、精神の総合であり、心的な過程であり、その結果非延長的である」(『試論』、p.74.)と見なされるとき、不可分な持続を示唆するとも考えられる。④ベルクソンは、「これらの詭弁そのもののように、自由の問題は、継起と同時性、持続と延長、質と量を混同する錯覚にその起源を持つ」(『試論』、p.156.)と書いている。ゼノンの詭弁が、これらの混同と類比的であると見ている。⑤ベルクソンは、ゼノンの二分法を「可能的なもの」の錯覚と見なしている。「我々は、ものそのものの中に、実在的なものの中における可能的なものの先在(préexistence)の形のもとで、回顧的な予見を置く。錯覚は、ゼノンの二分法が、そのモデルを供給する、多くの哲学的な問題の根本をなす。」(『道徳と宗教の二源泉』、p.1036.)第4章で触れるが、出発点の反省は、「可能的なもの」の錯覚を問題にする反省であるとわれわれは考えている。ここでは、「可能的なもの」の錯覚であるという点で両者は共通する。しかしながら、その違いも同時におさえておくとすれば、ゼノンの逆理は運動と運動の軌跡の混同から生じているのに対して、出発点の反省は、あくまで科学的な時間の意識への適用を問題とする反省である。科学的時間の定義と、予測における時間がそこでは批判の対象である。この違いは明らかであると思われる。

133　本章は、「ベルクソンにおける時間の一側面について―時間が「働く」ということおよび自由―」参照(『メタフュシカ』第４１号所収、大阪大学大学院文学研究科哲学講座、２０１０年１２月)を、その後の検討結果を含め、さらに詳細に論じるとともに、その内容を拡充したものであ。ベルクソンにおける反省の出発点に関して、筆者の現在の見解を記している。

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

第 2 章　自由

人間は独自な何かを、本当に生み出すことが出来るのか。これは自由の問題である。物質は自然の法則に従っている。それで身体が物質でできている人間が自由であるかどうかを疑うということ、あるいは少なくとも自然の決定性と人間的な自由との関係はどのようなものかを問うということが起こってくる[134]。

---

[134] 「緒論」、p.1314.　ベルクソンは次の問題を提示する。「人間の自由は自然の決定論と両立し得ていただろうか。」現代でも同じ問題意識が持たれている。美濃はほとんど同じ仕方で問うている(美濃正、「決定論と自由」『岩波講座　哲学２　形而上学の現在』、岩波書店、2008 年、p.161-186.)「そこには、『自由』ないし『自由意志』という概念をどのように捉えるべきなのか、そして、自由ないし自由意志を(今や否定しがたい)(ママ)科学的な世界像と噛み合わせるもっとも適切な仕方とはどのようなものか(これは近世・近代哲学から引き継がれた問題だと言えるが)(ママ)、といった重要問題についての理解の深化と議論の精緻化を見て取ることが出来るだろう。」(p.163)美濃は分析哲学のこの問題に関する取組みの歴史を振り返りつつ論じている。次のようにも言う。「要するに、人間は神の力や自然法則に由来する必然性の操り人形にしか過ぎないのではないか、それゆえ人間は本当の意味での主体性、自由はないのではないか、という深刻な疑念が、近代に至るまでの哲学において自由を問題化させたのである。」(p162)また、野矢はこう言う。「あるいは、突き詰めて考えれば、人間の行動だって、たんなる自然現象にすぎないのではないか。」(野矢茂樹、『語りえぬものを語る』講談社、2011 年。p.441.)そしてまた次のように言う。「そして、人間も物体にほかならない。脳を含め身体が法則によってそのあり方を決定されているのだとすれば、いま私が手をあげたことも、あらかじめ決定されていたことになるだろう。」(p.442.)
アメリカの哲学者、ジョン・サールは自由について次のように論じている。「それで、我々は、一方では生じるどの出来事も必ず因果的に十分な条件によって説明されなければならないという深い確信を持ち、他方では、人間の自由の確信を我々に与える諸経験、理論においてはどれほど大いに否定することが出来るとしても実践において捨てることのできない確信を与える諸経験を持っているように思われる。」(Searle, John R, *Mind. A brief introduction*, Oxford University Press, 2004, p.154.)サールは率直に次のように問う。「しかし、もし自由であると想定している我々の決定や行動のあらゆる細部がビックバンの時に既に歴史の本に書かれているとしたら、もし我々の行うすべてが我々に働いている因果的な力によって完全に決定されているとしたら、もし自由な合理的な決定をするという、全体の経験が錯覚であるとしたら、そのとき、それは、なぜ我々の生物学的な生活史のそのような広がる部分であるのだろうか。」(Ibid., p.163)　これら三人の哲学者が、自然の決定論との関係で自由について考えているのは明らかである。これら三人は我々が自由であることを確信しているようにも思われる。しかしながら、自然現象は決定論に従うという事実に揺さぶられているように思われる。本注で、これらの哲学者の考えの一部を引用したのは、それを批判するためではない。ベルクソンが自由を捉える枠組みとあまりにも似ているからである。そして、これら我々と同時代の哲学者にとっても、自由は依然として問題であり続けていると感じられているのを確認するためである。同じ枠組みに立ちながら、自由を独自な観点から捉えたベルクソンの哲学を詳しく吟味する意味は、少なくない

もし、時間が存在することを確認し、存在とは働くことであり時間は十分に[135]「働く」と考えるなら、法則に基づく決定論を否定することが出来る。この場合、決定論を拒絶できるのだから、自由についての疑念の大部分はこの段階で消し去られている。この点までベルクソンの出発点にある否定の力を持つ直観によって達することが出来る。このことは、とくに第 1 章第 2 節で既に見た。

直接的な直観は、意識が不可分であることによって単に法則的な決定論を否定できるということにとどまらず、行為における自由な決定を直接的に捉えることを可能にする[136]。このとき、意識が不可分であるということによって、知性によって可分と捉えられる物質と、少なくとも人間は異なるということが理解されうる。不可分なものが我々に独自性を与える。不可分なものの総体は我々にとって、各瞬間にとってそれぞれの自我にとって、常に新しい一つの全体である。不可分なものは繰り返さない。それで常に唯一であり、独自であり新しい。非決定が、何ものも決定されておらずそのときまで予測不可能であったという意味で新しいものをもたらすので、「働く」時間は、既に時間が新しい何かをもたらすことを示していたが、新しいものをもたらすことは、不可分であることからも確認できる。そして、たいていの場合、われわれは不可分である総体をその行動として現すことが

と言える。むしろ、これらの哲学者と観点が違うだけにより重要になっているとも言える。ベルクソンは、心霊科学に興味を寄せていた。魂の死後存続を考えていた。神と合一すると感じている神秘家に対して共感を持っていた。現代において科学を重視する哲学者には受け入れがたい部分を持つと言えるかもしれない。ベルクソンの理解している諸科学は、その後も大いに発展している。科学の捉える世界観と自由との関係という枠組みは変わらないと言っても、その対立はむしろ一段と激しくなっている。ベルクソンが現代に生きていれば、それまでの見解を修正するだろうし、様々な新たな見解を持つだろう。しかしながら、ベルクソンは自由に関しては、これらの哲学者に対して、大きく違った答え方はしないように思われる。科学的な事実についての根底的な検討ののちに得られる直観を考慮することなく自由は把握することが出来ない。少なくとも、自由であるという確信の中にあるものについて探求すべきであると言うだろう。自由については、「働く」時間、否定の力を持つ直観、原初的衝動の直観による把握が、ベルクソンの特徴になるだろう。そのことを本章でより詳細に見ようとするのである。

135　もし、予めすべてが一挙に与えられるなら、たとえ時間において変化が生じているとしても、ベルクソンは、そのとき時間は働いていないと考えていると思われる(第 1 章第 2 節(1)参照)。

136 法則的な決定論が否定されるとき、非決定ということには、自由だけではなく、偶然も含まれている。人間の自由な決定が偶然ではないことを知るためには、直観によって直接的に意識を捉えるしか方法はないと思われる。偶然ではない、自由独特の、むしろ意志をそのまま実現しようとして、意志の必然に近づくような決定については、本章第 3 節で検討する。

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

できることを各瞬間に確認する。自我の内的な衝動が行動を決定することが出来る。この決定は内的な衝動によるのだから偶然ではない。この点まで、否定の力を持つ直観に加え、直観によって達することが出来る。それで、独自な新しい何かを我々は生み出すことが出来るし、この章の始めに置かれた自由に関する問題、我々を大いに気がかりにさせるこの問題に答えることが出来る。本章の概要とはこのようなものになるだろう。しかし、ここで扱う問題をより詳細に説明する。

初めに重要であると我々に思われる四つの問題に答えることによって、ベルクソンの自由の特徴を明らかにするよう試みる。出発点の反省はそれらの三つ(以下の 1、2、4 の問題)に関わっている。この意味においても、この直観は自由と互いにむすびついているので、注目に値する。

次に、さらに以下の 5-7 の問題を検討する。

1　ベルクソンの自由とはどのようなものか。ベルクソンの自由には二つの側面がある。一方で、内的状態の外的な現れ[137]が自由であるとベルクソンが考えているのはよく知られている。他方、例えば『創造的進化』では、自由とは新しいものの創造であると見なされている[138]。この側面は直接的に出発点の否定の力を持つ直観に関わる。これら二つの側面が一つでしかないことを理解することはそれほど困難ではない。しかしながら、著作によって自由の内容が変化するのはどういうわけなのか。

2　自由の根拠とはどのようなものなのか。ここで、時間が「働く」という考え方が重要になる。この根拠は出発点の否定の力を持つ直観に関わるとともに、持続の直観によっている。

3　自由な決定とはどのようなものか。この問題はより自由になるためにはどうすればよいかという問題にもつながる。

4　ベルクソンの自由と選択との関係どのようなものか。一方で、ベルクソンは対立する二つの行為あるいは意志の間での選択が自由であると考えることを拒否する[139]。伝統的な自由意志の概念を受け入れることに積極的ではない[140]。この拒絶は『試論』でも「可能的

137『試論』、p.109.
138『創造的進化』、p.724.
139 『試論』、p.115., 「可能的なものと実在的なもの」(PR), p.1343.
140 「フランス哲学会における議論」、M834

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

なものと実在的なもの」においても一貫している。他方、選択を自由と形容する[141]。この問題に答えることは、ベルクソンの自由をより明らかにするために有益である。

5 より以上のものを引き出すことができるとは、どういうことか。

6　ベルクソンの自由の内容はどのようなものをもたらすか。

7　創造がもたらす喜びとはどのようなものか。

第 1 節　ベルクソンの自由―自由の二つの側面―

(1)　自由の二つの側面

『物質と記憶』で、ベルクソンは自由について「我々は一種独特の進展によって先行するものから行動が出るのを見たと信じた。その結果、この行動の中に、行動を説明する先行するものを再び見つけ、花についての果実のように、先行するものに基づく進展の中にあって行動はそれでも絶対的に新しいものをそこに付け加える。」[142]と述べている。ベルクソンはここで、自由における新しいものの創造を語っている。『試論』では、自由は内的状態の外的な現れとして語られていた。自由が『試論』で見るような第一の側面とは違う、第二の側面を持つことは明らかである。そして、この第二の側面における新しいものの創造が、『物質と記憶』では強調される[143]。『創造的進化』(EC)[144]や「可能的なものと実在的なもの」(PR)においても同様である。そして、PR には『試論』とほとんど同じ議論が見られるにもかかわらず、新しさという二つ目の側面しか PR[145]においては見ることができない。二つの側面の違いはどこから来ているのか。二つの側面はどのように結びついているのか。

---

141 EC, p.729. 730. Cf. p.647, p.718.

142 『物質と記憶』、p.322.

143 他方、いま引用した箇所の直前で、自由とは「その流れが連続しており、ごくわずかな程度によってある状態から他の状態に移る純粋持続に身を置き直すことであろう」(MM、p.322.)とされている。これは、『試論』で述べられている自由である。

144 『創造的進化』でも、『試論』で言われる持続の捉え方も見られる。「蓄積された経験とともに各瞬間に築きあげられる我々の人格は、絶えず変化する。後略。」(EC、p.499.)と言われている。

145　ユッソンは、ベルクソンの自由についての論文の結論部で、自由は予測不可能なものあるいは新しいものを創造する能力であると述べている。またその注で、自由な行為の予見不可能性が、「可能的なものと実在的なもの」についての仕事によって解明されていると記載している。(Husson,L., “Les aspects méconnus de la liberté bergsonienne”, in *Les études bergsoniennes vol.IV*, P.U.F., 1956, p.196.)

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

二つの側面が指すものが異なっているのは明らかである。というのは、『試論』における自由の考え方を攻撃する批判に答えて、ベルクソンは『物質と記憶』において、自由が含む新しさの創造について語るからである[146]。

他方、新しいものの創造である自由の第二の側面は『試論』から出てくるとベルクソンは考えている。すなわち、行動が「一種独特の進展によって先行するもの」から出てくるという考えから、新しいものの創造が結果すると考えている。

『試論』の中心である持続の観念は、あとになってからなら、過去から現在の意識の諸状態を分析することによって、その総体を可分であるとみなすことができるとしても、進展する意識は諸状態の総体として一つであることを意味する[147]。ベルクソンはこの総体を「全体的な自我」[148]、「全体的な心」[149]あるいは「人格のあらゆる歴史」[150]と考えている。この総体は不可分な総体として増大していく。時間の流れとともに変化する。それゆえ新しく、繰り返すことはない。各々の瞬間の総体が行為として現れるとき、新しいものの創造が生じる。もし、このように考えるなら、不可分な持続の観念を考察することによって新しい何かを創造することが自由であることを容易に理解できる。ベルクソンは『物質と記憶』で、行動が「一種独特の進展によって先行するもの」から出てくるという考えから、新しいものの創造と呼ぶことのできる側面を自由が持つことが結果すると考えていた。この考え方は、我々が説明したところから恐らく出ていると考えられる[151]。

---

146 『物質と記憶』の白水社版(p.292-293)、筑摩書房版(p.373)のそれぞれの訳注、またＰＵＦ版の注(p.206)参照。

147 ここでの説明は、『試論』と『創造的進化』におけるベルクソンの叙述に基づいている。『試論』では、持続は「相互的な浸透」(p.68)、「区別のある、あるいは質的な多数性」(p.70.)、「有機化された」「総体」(p.67)と見なされている。「各々の要素は全体を代表し、抽象することのできる思考にとってしか区別されず、分離されない」(p.68.)と言われ、また「我々は必然的に、いったん実現された発展のイメージから、まだ少しも発展を行っていない魂の状態を与えるための言葉を借りるだろう」(p.81)と述べられている。『創造的進化』では、ベルクソンは「あとになってから」(p.685 など)と言う。例えば、「自由な行為あるいは芸術作品について、完全な秩序を現すと言うことができる、しかしながら、あとになってからしかまたおおよそにしか観念の言葉で表すことができない。」(p.685)

148 『試論』、p.109

149 同上、p.110.

150 同上

151 『創造的進化』では、「蓄積された経験とともに各瞬間に築きあげられる我々の人格は、絶えず変化する。」「かくして我々の人格は絶えず、芽生え、大きくなり、成熟する。その諸瞬間のおのおのは以前あったところに付け加えられる新しいものである。もっと先へ行こう。それは常に新しいものであるだけではなく、予測不可能なものである。　」(EC、

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

そのうえ、『試論』では、新しいものの創造の側面を暗示していると思われるところもある。例えば、「対立する二つの状態を経て移行するにつれて、自我は増大し、豊かになりそして変化する」[152]ことに注目しなければならないとベルクソンは書いている。ここは、「一種独特の進展」を表現している。豊かになるとは創造を意味するだろう。「同じ感情は、繰り返されることだけによっても、新しい感情である」[153]とも述べる。しかしながら、自由における新しいものの創造は、『物質と記憶』で始めて明示的に表現されたと言わざるを得ない。自由の内容は何が決めているのか。自由のこの内容はどこから来ているのか。

(2)　自由の内容はどこから来るか

a　自由と、直観、持続

自由は、意識を直接的に捉える直観によって把握される。従って、自由の内容は、直観が捉える持続から来る。それが、ベルクソンの自由の基本的なところである。

すなわち、直観が把握する不可分な持続が行為に現れると捉えるとき、自由は、「内的状態の外的な現れ」として考えられる。また、不可分な持続は総体として一つであり、その総体は常に新しいと言える。それが行為となって現れるとき、自由は新しいものの創造としての自由と考えられる。直観、持続の線によって自由の内容が決まるというのが、『試論』で確立される持続に基づくベルクソンの自由である。

b　新しさの創造としての自由と、「働く」時間、否定の力を持つ直観

ただ、ベルクソンが PR で明示的に示し、『創造的進化』第 4 章で示す[154]のは、違った経路である。法則的な決定論が否定の力を持つ直観により意識においては否定され、非決定、創造としての「働く」時間が意識の時間であることが導かれる。その「働く」時間の捉え方から、自由は、新しいものの創造として考えられる。新しさの創造としての自由については、法則的な決定論の否定、「働く」時間からその内容が来ていると言える。

c　内的状態の外的な現れとしての自由と、「働く」時間、否定の力を持つ直観

---

p.499.)と言われている。これは、『試論』で言われる蓄積したものの現われと新しさが一つのものであることの説明と見ることができる。

152　『試論』、p.116.

153　同上、p.131.

154　第 1 章第 1 節(3)b 参照

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

この自由の内容については、b で述べた経路と類似の経路も、自由の内容に対して一定の寄与を行っていると見られる。すなわち、一種の決定論としてのエネルギー保存則が、否定の力を持つ直観により否定され、利得、蓄積として時間の「働く」ことが導かれる[155]。この「働く」時間の捉え方によれば、蓄積した時間として、行為が外に現れることになるのだから、内的状態の外的な現れとなり、この自由の側面が得られる。蓄積としての「働く」時間は、この自由の概念を示唆するか支えるかしているように思われる[156]。

なお、『試論』で、ベルクソンがもっとも問題だとする決定論は、心理学的決定論としての連合説的決定論[157]である。この決定論に対しては、不可分である持続の観念がこの決定論を否定するという関係にある。

以上の自由の内容、持続の直観、否定されるべき決定論、否定の力を持つ直観、「働く」時間との関係を図示すると次のようになる。

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

155 否定の力を持つ直観が、意識においては科学的な時間に基づく決定論的捉え方としてのエネルギー保存則を否定することから、利得や蓄積としての「働く」時間が導かれる。「エネルギー保存則の理解しうるあらゆる適用は、動くことのできる体系の諸点が最初の位置にまた戻ることができる、そういう体系に対してなされる」。しかしながら、「すくなくとも後へ戻る仮説は意識の事実の領域では理解できないものになることについて我々に人は同意するだろう」。そして、「過去は生物体にとっては恐らく実在であり、意識にとっては、確実にそうである。」ここから、利得や蓄積として時間が「働く」と考えられている。この蓄積としての「働く」時間は、この内的状態の外的な現れとしての自由や、持続が不可分な一つの総体であることとよく整合する。

156 b 項といま述べたことを合わせると、「働く」時間の内容が、自由の内容を決めているというように考えることもできる。これは、既に述べたとおり、持続と「働く」時間とは、同じ時間経験に関する捉え方であるというところによる。この点については、(3)項で、項を改めて述べる。

157 同上、p.103. 「簡単に言うと、いわゆる物理学的な決定論は、結局は心理学的な決定論に還元される。そして我々がそもそも最初に告げたように、考察することが問題であるのは、この後者の学説である。」連合説的な決定論は、「自我を意識の事実、感覚、感情、観念の集まりに還元する」。心理的事実のもっとも強いものが「優越した影響を行使し他の状態をその状態とともに引きずっていく」。ベルクソンはこの決定論を次のように批判する。もし「交互に抽象の努力によって、感じる自我と行動する自我を考察するために人格を二つの部分に」分割するとしたら、「二つの自我の一方が他方に影響を及ぼすと結論することには、幼稚さがあるだろう」。不可分である持続がこの決定論とは全く逆の考え方であるのはたやすく理解できる。

自由 = 新しいものの創造

↑ 非決定(「働く」時間)

↑否定

否定的な直観 ≡漠然とした経験 ⇔ 物理的な決定論(法則に基づく予測における時間)

図　自由の内容と、否定の力を持つ直観、「働く」時間、決定論との関係(新しいものの創造)

自由=内的な状態の外的な現われ

↑具体的な自我とその果す行為との関係

直観 ≡ 不可分な持続 ⇔ 連合心理学的な決定論

↓↑ 対応

利得あるいは蓄積(「働く」時間)

↑ 否定

否定的な直観 ≡漠然とした経験⇔ エネルギー保存の法則

図　自由の内容と、持続の直観、否定の力を持つ直観、「働く」時間、決定論との関係（内的な状態の外的な現われ)

(3)　自由の内容と「働く」時間

「働く」時間は、このように決定論を意識において否定することからその「働き」が考えられている。その否定は、否定の力を持つ直観によっている。そして、新しいものの創造としての自由の場合、特に明瞭であるが、その「働き」が自由の内容を定めている。否定の力を持つ直観が物質における決定論を否定することから、時間の「働き」が得られ、それが自由の内容を定めている。他方、内的な状態の外的な現われとしての自由の場合は、ベルクソンの叙述に従えば、持続の直観が捉えた不可分な持続が自由の内容を定めていると言える。しかし、この場合も、不可分な持続に対して、そこに利得や蓄積の時間の「働き」を見ることができる。そして、蓄積する自我が総体として現れるのが、内的な状態の外的な現われとしての自由なのだから、この場合も自由の内容は「働く」時間が定めていると見ることもできる。そして、利得や蓄積は決定論的な物理原理が意識では成り立たな

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

いとすることから得られていた。そうすると、自由の内容とはどのような決定論を否定するか、そしてそこからどのような時間の「働き」を捉えるかにかかっているかと見ることができる。自由の内容は、否定の力を持つ直観と「働く」時間が決めるという線を浮かびあがらせることができる。そして、自由とは何であるかは、「働く」時間がもたらすと見ることができる。

これは、ただし、「働く」時間が自由の内容と密接に絡むということが言えるだけである。「働く」時間とは否定の直観的な力に基づいているからである。自由の経験そのものは、漠然としてしか把握できないのが否定の力を持つ直観である。自由であるかどうかを本当につかむのは直観である。偶然でも必然でもない自由とは、直観だけが把握する。自由の内容は「働く」時間、つまりは否定の力を持つ直観が決めていると言えても、意識が本当にそういう自由を持っていることは、直観による把握だけがなし得ることである。

第 2 節　自由の根拠

(1)　決定論の否定

否定の力を持つ直観が、法則に基づく決定論を時間が「働く」ことによって否定する[158]。否定の力を持つ直観と「働く」時間が、決定論の否定の根拠である。そのことによって自由を支える大きな根拠となっている。

(2)　自由

持続の直観が意識を、不可分な持続として、否定を介することなく直接的に捉える。この非媒介的な持続の直観からも、法則的な決定論を否定しうる。そして、行為の決定が、

158　『試論』第三章および結論において、いくつかの形で決定論をベルクソンは批判している、あるいは批判しているとして読むことができる。①意識においては、物理的な場合の予測と異なり、ある瞬間的な状態において初期条件が与えられることはない。過程の全体が予測に必要な条件となり、結局、意識において予測はできない(『試論』、p. 124.)。②意識においては、「時間の間隔を縮小するということは、そこに相次いで起こる意識の諸状態を空虚にしたり貧寒なものにしたりすること」(同、p. 128.)になるから、予測はできない。③意識では過程の全体が問題となり同じ条件は再現されないので法則的な予測はあり得ない(同、p. 156. など)。いずれも予測法則による決定がないという意味で、非決定がここでは言われている。①では、蓄積という時間の「働き」によって、決定論が否定される。②も同じである。③は、再現性がないのは時間の蓄積によって同じ状態が二度と現れないためであり、これも時間の蓄積という「働き」によって決定論が否定されている。
持続の中にある「働く」時間という捉え方が決定論を否定しているのである。

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

必然でも偶然でもない自由な決定であることを直観が捉える。従って、自由は直観による意識の非媒介的な把握が最終的な根拠となる。

自由は、「働く」時間、否定の力を持つ直観による法則的な決定論の否定と、直観による直接的な把握の二つによって根拠付けられている。

なお、否定の力を持つ直観は、科学的、学問的な事実の徹底的な検討の果てに出てくるものである。徹底的な知性的な検討こそが、特定の科学的な事実の意識における否定を呼び起こしている。そのようにして現れる否定の力を持つ直観が、直接的な直観を支えている[159]。ベルクソンにおいては徹底的な科学的な検討が直観を生じさせていることには、留意する必要があると思われる。

(3) 自由の根拠としての「働く」時間

前節の終わりで、自由の内容は、「働く」時間のその「働き」が定めていると言えると述べた。そして、時間が「働く」ものなら、その内容が、蓄積にしろ、非決定にしろ、その「働き」から法則的な決定論を否定することができる。「働く」時間は、自由の内容を定めるだけではなく、法則的な決定論の否定の根拠ともなっている。

(4) 別の形の決定論

ここで、ベルクソンが語っている法則的な形をとらない決定論について、触れることにしたい。『試論』において対立する二つの行動あるいは意志作用に関して、自由の擁護者と決定論者との議論が描かれる中で出てくる。そのとき決定論者は、「道はこのように描かれた。それゆえ、だからその可能な方向とは、どれでもよい方向ではなかったのであり、この方向そのものだった」[160]と言う。これに対して、ベルクソンは「あなたは決定論者たちの論証が次の子どもじみた形をまとうのを見るだろう。行為は、一たび果されると、果されている」[161]と言う。このとき「決定論者は自分たちを打ち負かされたとは見なさない」[162]とベルクソンは見ている。この形に帰着する決定論は、現在でも見られるように思うので、ここで触れるのである。

---

159 第 3 章参照。
160 『試論』、p.120.
161 同上
162 同上

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

もう少しこの形の決定論の輪郭を明らかにする。自由な行為であれ、結果的に生じる行為は一つである。このことを一つに決定されているということができる。そこから行為が決定されているということは、その行為は決定されていた、つまり必然であったと考える決定論である。

この決定論は、法則があるかないかを問題にしていない。しかし、このとき、この決定論には、論理の飛躍がある。行為は結果として一つであることと、その行為は別のあり方ではないものとして、必然的に決定されているということは別の事柄である。行為は一つの結果としてあることから、別のあり方ではないものとして、必然的に決定されていることを証明する必要がある。証明できなければ、この形の決定論は成り立っていないということができる。もし、行為の条件を問題とし、同じ条件のときに、同じ行為が現れるという答え方をするなら、直ちに、持続の中で行為が行われるということによって批判することができる。持続においては、同じ条件は現れないので、その論理は成り立たないと否定することができるからである[163]。また、神のような超越的な根拠が、別様ではない仕方で、必然的に行為を決定しているという場合は、その超越的な根拠の存在の証明を哲学の範囲の中で決定論者が行わなければならないということになる[164]。

---

163 しかし、もしいま述べた形での決定論なら、持続の観念によるのとは別の形の批判も可能であるように思われる。本文でも触れたが、行為が決定されているということと、行為が必然的に決定されているということは、別の事柄である。この形の決定論者は、前者から後者を導くことができることを証明する必要がある。ところで、ベルクソンの自由は、必然や偶然という通常の様相概念が適用できないあり方をしている。しかし、ここで決定論者は必然という様相を認めているから、様相を表す際に用いられる記号を使って、その主張を示すと次のようになる。つまり、事実である(P)ことから、必然的事実である(□P)と述べていると言える。こう見ると、二つの事柄が異なるのは歴然としているように思われる。伊佐敷の直接的には別の議論を参考とすることにより、こう考え得ると思われる。伊佐敷は、論理的決定論に関し、決定論者の論理を P→□P として捉え、その論理を通常、人は受け入れないと述べている。(伊佐敷 隆弘「時間様相の形而上学」勁草書房、2010 年、p117-119)

164 ベルクソンが、講義録Ⅱにある、1892-1893 年の講義とされる自由についてのリセでの講義(*Bergson Cours Ⅱ Leçon d'esthétique Leçon de morale, psychologique et métaphysique*, P.U.F., 1992.)で、「心理学的な決定論」と呼ぶものは、いま述べた形の決定論とほとんど同じであると思われる。そこでは、心理学的な決定論は、本稿で示した決定論よりも、より輪郭が明らかにされている。すなわち、「あらゆる現象はその条件あるいは先行するものによって決定されている」(p.248.)とする決定論である。ベルクソンはこの決定論に対して、こう反論する。「必然的な決定が、可能な計算、可能な予測でないとしたら、何を意味するのか。決定という言葉は理解不能になるか、高等な知性がその決定を覚知するような仕方で含まれている、事実と先行するものとの関係を示すかである。」

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

第 3 節　自由と原初的衝動―自由における決定

ベルクソンは、「具体的な自我と自我の果たす行為との関係が自由と呼ばれる」と述べていた。新しいものの創造としての自由が主として行為について述べているのに対して、「内的な状態の外的な現われ」としての自由は具体的な自我と行為のこの関係にかわっている。

さて、自由が具体的な自我と自我の果たす行為との関係として見なされるこの考え方から、二つの問題が出てくる。この自我に当たるものは、ベルクソンの著作全体で見るとどのようなものになるか。この自我はどのように行為を決定するのか。後の問題について少し説明する。自由は偶然でもなければ、必然でももちろんない。このことは、どのような仕方で自我が行為を決定するかと問うことを促す。

そのうえ、ベルクソンによれば自由の概念は「程度」[165]を認める。「行為は、行為が結びつく動的な系列が根底的な自我により以上に同一化しようとするだけ、それだけいっそう自由であろう。」[166]このことは、さらに、より自由であるとはどのようなことか問うことを我々に促す。

(1)　自由の主体とはどのようなものか

ベルクソンは芸術作品あるいは作家の著作を思い浮かべながら、自由について熟考する。このことは、自由の例として、右手や左手を思うとおりに上げたりできることを考えたり、あるいはメニューから好きな料理を選べることを自由と考えたりすることがよくなされるのと比べて、ベルクソンは全く異なっている。考える例の違いに既に自由の考え方が出てしまっている。身近な例から考えることは重要であるにしろ、選ぶ例が適切でないと、到達すべきところへ到達することが妨げられるという例になるかもしれない。手を上げる例は、選択を自由の本質と考える立場に立ってしまっているからである。この点に関しては、第 4 節で論じる。

(p. 255.)そして、この後半に関しては、高等な知性であろうと、諸条件が予め与えられることはない、持続においては、諸条件をすべて知るとは、行為の直前までの持続を体験することであり、それは既に予測することではないという『試論』の議論が用いられている(本章の第 2 節(1)の注参照)そして、もし必然的な決定が、可能な計算や可能な予測以外のものを意味するとそれでも主張するなら、本文でも述べたように、その場合、必然的な決定であること証明をすることなしにこの決定論は成り立たないが、そういった証明は、これまで提出されていないと思われる。

165　『試論』、p.109.

166　同上、p.110.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

さて我々は自由を検討するとき、ベルクソンのやり方、主として芸術に関わる創造的な行為と考えられる例によって自由を考えるやり方に従う。『試論』では、自我は動的系列あるいは「我々の過去のあらゆる経験」と考えられていた。総体は不可分なのでベルクソンは、自我は一つであることを強調していた。

『創造的進化』では生命に関し、それは持続と言えるのであるが、ベルクソンは内的な推力[167]あるいは原初的な衝動(impulsion originelle)[168]について語る。自我は同様に生についての同じ考え方の影響の下で衝動と見なされている[169]。「我々が、我々の存在を我々の意志に、そして我々の意志を意志が延長する衝動(impulsion)におき戻すとき、我々は、自由とは永続する発展であり、終わりなく継続する創造であることを理解し、感じる」[170]とベルクソンは言う。ここでは、自我は推し進めるものと考えられている。

「形而上学入門」でも、ベルクソンは衝動について書く。「創作の仕事自身に取り掛かるために、それより以上のあるもの、しばしば骨の折れる努力を必要とする。一挙に主題の核心に身を置くために、そしてもはや次には衝動を、行くがままにさせるしかない、そういう衝動をできるだけ深くへと迎えに行くために、努力を必要とする」[171]とベルクソンは説明する。ベルクソンはこの衝動は「運動への促し」[172]あるいは「推進力となる衝動」[173]と考えている。ここでの衝動は、衝動が推進するものであるという点で、『創造的進化』での衝動とほとんど同じものと思われる。しかしながら、この衝動の例は、「形而上学的直観」を説明するために、ここでは用いられている。ベルクソンはこう続ける。「形而上学的直観は同じ種類のあるものである。」[174]ただ、ここで例示された創作は自由な行為と考えられるので、その観点から見ることができると思われる。自由の経験は、直観によって捉えられる経験であるとここから考えることができる。あるいは直観によって捉えられた経験を

---

167 『創造的進化』(EC)、p.783.
168 同上、p.584.
169 「緒論」では、「もしあなたが意志によって、私の意志する能力あるいは、私に類似した存在の能力あるいは私の意識の躍動に類似していると想定された、有機化された存在の生命的な推力(poussée)を意味するなら私は意志とは何かを理解する。」(p.1291.)とベルクソン言っている。ここでは自我のあり方から、生命進化のあり方が想定できると述べている。自我の捉え方と、生命進化の捉え方とは恐らく相互に影響しあっていると思われる。
170 EC、p.698
171 「形而上学入門」、p.1431.
172 同上.
173 同上、p.1432.
174 *Ibid.*, p.1431-1432.

自由な行為である創作の経験と同じ種類のあるものと見なすことができる。

『道徳と宗教の二源泉』では、「神秘家にとって神の本質そのものである至高の愛」[175]を説明するために、ベルクソンは、交響曲を作曲する音楽家の情動と作家としての哲学者の魂の状態の二つの例を用いている。たとえ形而上学的な直観や神の至高の愛や神秘的な直観について語られているとしても、芸術作品の例であるので、我々は自由の観点からも、これらの例を見ることができると考える。芸術家と芸術作品の例は、ベルクソンが『試論』で自由とは、どのようなものかを語るときに、そもそもの初めから出てきているものである。そこでは、「要するに、我々の行為が全人格から発し、行為がその人格を表現し、作品と芸術家との間でしばしば見出される、その定義しがたい類似を人格に対して持つとき、我々は自由である」[176]と言われている。芸術の例から自由について何らかの示唆を受け取ろうとすることは、それほど無理なことではないはずである。

ベルクソンは「承認あるいは拒絶、方向、霊感をそこで求めるために、音楽家はその平面(知性的な平面)の外に位置するある点の方へさかのぼった。知性が音楽において明確に述べられるのを恐らく助ける、不可分な情動(émotion)、しかし音楽以上でありそして知性以上であるその情動がその点に位置する。」[177]ここで、音楽家の自我は「不可分な情動」として考えられている。そして、ベルクソンはこの情動の「神秘的な直観」[178]との関係に言及する。知性の言葉で直観を説明しようとするとき、この情動を参照するのがよいとベルクソンは考えている。直観によるこの情動への接触が、創造をもたらす「承認あるいは拒絶、方向、霊感」を与える。この言葉は、これまで、否定の力を持つ直観の特質について、我々が考えてきたことを思い起こさせる。承認あるいは拒絶とは、否定の力を持つ直観の否定の力そのものである。方向については、否定に置き換わるべきものを探すという方向を示していると考えた[179]。霊感にはいろいろな含みがありそうだが、方向を感じ取ることも霊感の一つとは言える。否定の力を持つ直観が、創造と関わっていることが、明らかになっていると言えそうである。

作家としての哲学者の魂の状態に関しては、ベルクソンはこう書く。「それ(創作の方法)は、知性的なそして社会的な平面から、創造の要求がそこから出発する魂のある点にまで

---

175 DS, p.1190.
176 『試論』、p.113.
177 同上
178 同上.
179 本論考、第 1 章第 2 節(2)、第 4 節(2)(4)、第 5 節(10)など。

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

さかのぼることに存する。」[180]　そして続ける。「それ(この要求)はいつもそこで、独自な情動であり、ものの奥底から受け取った衝撃(ébranlement)ないしは躍動(élan)である。」「その情動にすっかり従うために、言葉を作り上げ、観念を創造しなければならない。」[181]。ベルクソンはまた、「哲学者が創作するとき、哲学者自身の魂の状態の分析は、神秘家達が神性の本質そのものを見る愛がどのようにして人格であると同時に、創造の力であるかを理解することを助けるだろう。」[182]と述べる。ベルクソンの叙述に従えば、人格である魂は創造の要求であると考えることができる。この魂は創造することを求めている。このとき、直観自体が既に、何かを創造するものとしての魂を捉えようとしていると思われる。

いずれにしても、自由における自我とは、独自な情動であり、ものの奥底から躍動を受け取る創造の要求である。

様々な著作の叙述から、ベルクソンの哲学の領域が広がるにつれて、自我は、魂の状態に深くさかのぼることによって直観によって把握される、原初的な衝動あるいは創造の要求であると考えられるようになっていくことが理解できる。

(2)　自由における決定

我々は、「具体的な自我と自我の果たす行為との関係が自由と呼ばれる」というベルクソンの自由の捉え方に従って、具体的な自我に当たるもののあり方がどのように各著作で異なるか第 3 節(1)で見てきた。前項と幾分重複する部分も生じるかもしれないが、本項ではこの自我に当たるものがどのように行為を決定するかという点を見ていく。法則的な決定論は、いずれにしても決定のあり方は必然的であると見る。自由な行為の場合も、結果として一つの行為があり、それが決定されていると言えるのは明らかである。出発点における否定の力が内在する直観は、時間が非決定であることを示していた。あるいはそのことは新しいもの創造がありえるということも示していた。しかし、時間が非決定とは、予め決定されていないということであり、自由な行為がなされたときには創造としての行為が結果する。どのように創造的な行為がいわば決定されているかをまぎれなく捉える必要があると考える問題意識に基づいて、本項の検討は行われる。

a　内的因果性

---

180 同上、p.1191.
181 同上。こういった点は、直接的な直観が把握するところであろう。
182 同上、p.1190.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

ベルクソンは、『試論』において、自然の外的な因果性[183]との対比で、内的な因果性という言葉を用いて、自我の行為との関係を表現している。この関係の特徴は次の通りである。① 自由における決定は、観念から努力へ、努力から行為への進行である。観念から努力へ進む進行が、行為を決定していると言える。努力の感情[184]をベルクソンはそこに見ている。しかしながら、この観念の実現は、確実なものとしては現れない。常に行動を停止することができる。②観念は、結果についてのある種の前もっての形成(préformation)である。この前もっての形成は外的な因果性におけるものとは異なっている。結果は原因の中にはない。自由においては、前もっての形成は不完全である。それに対し、外的な因果性では、現在における未来の前もっての形成は、定義と定理の関係と見なされ、「現在における未来の数学的な前もっての形成」[185] として、また数学的な内在の関係として考えられている。③ベルクソンの時代の科学的な理論において、原因と結果の間に論理的な必然性の関係を確立しようとし、継起の関係を内在の関係に変化しようとし、根本的な同一性によって因果性を置き換えようとする傾向がある[186]。

b 心理学的因果性

1903 年 2 月のブランシュビック宛の手紙では、心理学的な因果性[187]というブランシュビックが用いた言葉をベルクソン自身も使っている。自由に固有な決定を、物理的な因果性と比較することによって、捉えようとしている。このような捉え方は、『試論』における捉え方と類似している。

そして、ベルクソンは創造について「それ(心理学的因果性)は反対に行為自身による、先行するものにおいては存在しなかったあるものの創造を含んでいる」[188]と言う。どのように創造を行動の決定として理解すべきだろうか。

のちの著作になるが、ベルクソン自身がこの問いに答えていると思われる。「行動がなされる瞬間に、もし行動が真に自由である、つまり、内的な色合い(coloration interne)においてと同様外的な素描(dessin extérieur)においても全体が創造されるなら、どうだろう。」

183 『試論』、p.143.
184 同上、p.138.
185 同上、p.141.
186 同上、p.136-137.
187 M586
188 同上

[189] 先行する意識状態を、『試論』の言葉を使って仮に観念だとすれば、その意識の先行状態を実現しようとする努力によって、行為が生じる。そのとき、その行為は、外的な素描として全体的に創造されている。しかし、同時に先行的な意識状態は、そのとき内的な色合いにおいて創造されている。先行する内的な状態を実現しようとする努力によって、直前の行為とは異なる新しい行為が創造される。そのとき、しかし、行為によって意識自体も新たなものになる。行為が遂行されるとき、直前の意識にも行為になかったものとして、つまりは先行するものにはなかったものとして、行為と新たな意識が創造されると考えられる[190]。「行為自身による、先行するものにおいては存在しなかったあるものの創造を含んでいる」とは、こういうことであろう。

c　衝動、情動

『創造的進化』では、自我の内的状態とは、創造の要求である原初的衝動として考えられている[191]。「形而上学入門」では、この衝動は、運動への促しであるとベルクソンは考えていた。『道徳と宗教の二源泉』では、作家の方法として「知性的なそして社会的な平面から、創造の要求がそこから出発する魂のある点にまでさかのぼる」こと勧めている。

これらの例から、自由な行為は「創造の要求」から生れると考えられるに至っていると思われる。自由な行為とは、「創造の要求」によって決定されている。

より自由になる一つの方法は、深い魂の中に創造の要求を探しに行くことであり、芸術的なあるものの創造としてこの要求と一つになろうとすることであると思われる。

自我とは、創造の要求であり、行為を決めるのはこの創造の要求であり、より自由にな

---

[189] 「緒論」、p.1261.

[190] 『道徳と宗教の二源泉』においても、ほぼ同様の捉え方を見ることができる。「知性は、超人的なものでさえ、どこへ導かれるか言うことができないだろう。進行中の行動はそれ自身の道を創造し、行動が完遂される条件を大部分創造するからである。」(DS、p.1227.) 行動のある瞬間は、新たな意識状態を作り、そこに働く努力や意志を作り、行動の状態と意識の新たな状態が、行動の条件になる。そして、そのように常に予測できない変化をしながら進むと考えられる。

[191] 『創造的進化』においても、因果性という言葉で、自由における決定を示すところがある。直訳すると「自由な選択の意味に解された効力のある因果性(causalité efficace)」(EC、p.729-730.)と言われている。ここの efficace は、ここの因果性は、ベルクソン独自の自由における因果性の考え方と思われるため、あえてこのように訳している(本章第 4 節(2)参照)。なお、この「自由な選択」の意味は、第 4 節で検討する。

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

るとは、この創造の要求とより長く接触し続け、その創造の要求をできるだけ実現しようとすることである。これが、この節の初めの問いに対する答えになる。

第 4 節　選択と自由[192]

(1)　「可能的なもの」の間における選択

対立する二つの行動の同等の可能性の中から選択することを、ベルクソンは自由の捉え方として誤っているとして否定する。『試論』におけるその議論[193]はよく知られている。区別された同等の可能性を考えることは持続の過程の誤った記号化である。「たとえ紙の上に幾何学的な図形を作り上げないにしても、自由な行為の中に幾つかの継起的な段階、すなわち、対立する動機の表象、ためらいや選択を区別するやいなや、―そのようにして幾何学的な記号表示を一種の言語的な結晶化のもとに隠しているのだが―、意図せずに、ほとんど無意識的に、図形を考えている。」[194]そして、「自由についての真に機械論的な考え方が、自然な論理によって、もつとも硬直的な決定論に達することを理解するのは容易である。」[195]と言う。そして、さらに「自由を行動そのものの、あるニュアンスあるいは質の中に探し求めなければならない。この行為と、この行為ではないもの、あるいはこの行為があり得たかもしれなかったものとの関係の中にではない」[196]とベルクソンは言う。選択ということには自由はないとベルクソンは考えている。そして、こう言う。「自我と諸動機が、それら自身、真の生物についてのように継続的な生成の中にある動的な進行が熟慮であるのだが、あいまいさの全体は一方も他方も(自由の擁護者も決定論者も)、熟慮を空間における振動の形のもとで思い描くということからくる。」[197](括弧内は引用者)

---

192 Jakub Čapek は、『創造的進化』では選択する能力を自由と同一視しているとしながら(p.251.)も、ベルクソン哲学の自由は可能的なものの間で選択するという可能的なものの観念を退けており、「選択の自由」ではないと記している。ただ、ベルクソンが『創造的進化』で、選択の自由を認めていることとの関連は明確ではない。(Jakub Čapek, *Les apories de la liberté bergsonienne* (in *Annales Bergsoniennes* Ⅱ, P.U.F., 2004, p.249-259.))、選択の自由をベルクソンが否定することに対する常識の抵抗が大きいときに、一方で選択の自由も認める場合があるとするなら、ベルクソンの自由の概念が不明瞭になる恐れがある。本節では、そういう問題意識に立っている。

193 『試論』、p.115-120.

194 同上、p.117.

195 同上

196 同上、p.120

197 同上

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

そして、また、最晩年の「可能的なものと実在的なもの」においても、「可能的なものの間における選択」(p.1343)は、「可能的なもの」[198]の錯覚として、自由における根源的に新しいものを見誤らせるとして否定される[199]。

(2) 選択の能力

以上の叙述から、ベルクソンが選択を自由とは考えないことは明白である。しかし、他方、『創造的進化』で、植物とは違う動物の自由として、行動を選択できることが自由であることを、明示的にではないにしろ述べているように一見思われる[200]ところがある。もし選択の能力を持たないなら、そのことは決定論に人間が支配されていることを意味する。選択の能力を持っていることは誰もがそしてもちろんベルクソンも認める。そして、ベルクソンの叙述を全体に渡って見るとき、意識が選択であり、意識が自由であることから、選択が自由と言われているようにも見える。やや細かな議論を追うことになるが、この点をよく見てみる。

ベルクソンは「意識とはためらいあるいは選択を意味する」[201]と言う。また別のところで「動物界の範囲全体で、我々は言ったのだが、選択の能力に比例したものとして意識は現れる」[202]と書いている。意識が、選択ないしは選択の能力として捉えられている。

ところで、この少しあとでは、次のように言う。「脳が複雑になるにつれて、そのようにして有機体がその間で選択する可能的な行動の数が増え、意識はその生理的な随伴物をはみだすに違いない。」[203]。ここで、人間の場合のはみ出し方が問題である。やや細かくなるが、ベルクソンの考えをより正確に描くために引用を続ける。「記憶は人間の意識と犬の意識とではまるで別のものになるはずである。」「犬では、記憶は知覚に束縛されたれたままであろう。」「人間は、反対にその好みのままにどんなときにでも現実の知覚からは独立して、記憶を喚起することができる。」「両者のうちの複雑な方の脳は、より多くの仕組みをそれらの間で争わせることによって、意識が一方からの締め付けからも他方からの締め

198 ベルクソンは、観念が「可能的なもの」として実在に先立って存在し、「存在の獲得によって実現される」という考え方は、「可能的なもの」の錯覚である(PR、p.1341.)と考えている。
199 この点については、第 4 章で詳しく扱う。
200 EC, p.647, 718, 729.
201 同上、p.617.
202 同上、p.647.
203 同上、p.648.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

付けからも解放されるようにし、独立に到達することを可能にしたかもしれない。」[204]ここでは、可能的な行動からの選択はむしろ、脳に対応すると見られている。人間固有のものとしては、そういう可能な行動の仕組みの増大よって、それらを戦わせることによる意識の独立が考えられている。むしろ人間の意識では、選択よりも、脳に依存した選択を超えた、意識の独立が強調されていると思われる。

また、「その結果、動物の意識と、もっとも知性的なものとでさえ、人間の意識との間での相違は、根本的なものである。意識は正確に生物が意のままにする選択の能力に対応している。意識は実在的な(実際的な、réel)行動を取り囲む可能な行動の外縁と共外延的(coextensif)である。意識とは、発明と自由と同義語である」[205]とベルクソンは書く。ここでも人間の意識と動物の意識の相違が語られる。そして、そのあとに、意識が、発明と自由と同義語であるという部分が来る。また、しかし、この直前では、もっと人間の意識の他の動物との違いが述べられている。「人間の脳は、あらゆる脳と同様、運動的な仕組みを組み立てるために、それらのうちで任意の瞬間に始動装置の働きによって我々が作動させる仕組みを選択させるために作られている。しかし、人間の脳は、それが組み立てることのできる仕組みの数、そしてその結果その間で脳が選択を託す始動装置の数が、限りないということにおいて、他の脳とは相違する。さて、制限されたものから無制限までには、閉じられたものから開かれたものまでの距離がある。それは、程度の相違ではなく、本性の相違である。」[206]。意識が発明、自由と同義語と言われるとき、仕組みの中からの選択について言われているのではなく、仕組みの数が不定になり、本性の差が生じた人間の意識について言われていると思われる。そして、さらに、この段落の始めに引用した部分に続く部分は、発明と自由が特に人間について言われているということをさらに明確にすると思われる。「さて動物では、発明は習慣的な行動の主題についての変奏ばかりである。」「意識は人間において、人間においてだけ解放される。」「しかし、人間においてとは別のいたるところで、意識はその網の目を通過しようとした網に引っかかるままになった。意識は、自分が組み立てた仕組みに束縛されたままだった。意識が自由の方へ引っ張ると主張した自動性が意識の周りに巻きつき、意識を引きずる。」[207]また、人間について「自動

204 同上
205 同上、p.718.
206 同上
207 同上、p.719.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

性をそれ自身に対して分裂させ、自動性を支配」[208]することができる、「その流れがまず意識を引きずり、やがて意識を飲み込む物体の上に意識がもっぱら置かれることから、意識を免れさせる」[209]ことができると言われる。

これらから、人間以外では、発明は不十分な状態であるように思われる。また、自動性にまとわりつかれ、自由は、ベルクソンの考える意味では人間以外では達成されていないと考えられる。そして、人間と動物では、仕組みの中からの選択はどちらも共通に持つとされているのも明らかである。ただ、その仕組みの数が制限されていることと制限されていないことの違いが決定的だとされている。自由と発明は、その制限されていないということの側に属していると見られるのである。つまり、仕組みの中からの選択そのものは、自由とは考えられていないと考えることが適切であると思われる。つまり、意識は選択の能力に比例するというところまではよい。しかし、意識は、自由や発明というとき、単なる選択の能力が、自由と言われているのではないと考えるのが妥当だと思われるということである。

意識とは自由であると言われる箇所が、『創造的進化』にはもう一箇所ある。そこで考えられている意識が単なる選択を意味するかどうか、見てみたい。「意識はその有機体からの変化をこうむるにしても、意識は、意識が活気付ける有機体とは異なっている。意識のある状態がその素描を含んでいる可能的な行動は、あらゆる瞬間に、神経中枢において実行の始まりを受け取るので、脳はあらゆる瞬間に意識の状態の運動的な分節を強調する。しかし、意識と脳の相互依存はそこに限られる。意識の運命はそのために脳の物質の運命に結び付けられていない。要するに、意識とは本質的に自由である。意識とは自由そのものである。しかし、物質の上に身を置くことなしに、物質に適応することなしに物質を通り抜けることはできない。この適応が知性性(intellectualité)と呼ばれるものである。」[210]ここでも、可能的な行動と脳との関係が考えられていると思われる。「運動的な分節」とは可

208 同上
209 同上
210 同上、p.724.この部分のすこしあとには、次の内容が続く。「そして、知性は、働く(agissant)、つまり自由な意識に戻りながら、物質が挿入されるのを知性が見るのが習慣である枠の中に、意識を自然に入るようにしてしまう。」本稿の文脈からは、「働く(agissant)」が「自由(libre)」と言いかえられている点は、興味深い。「働く」時間が自由と関連することは、本稿で繰り返し述べてきたことだからである。言葉の端に過ぎないものの、ベルクソンにおいて「働く」という捉えかたは見逃せない意味を持ち、そこにすでに自由が含まれていると言っていいように思われる。

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

能的な行動を意味していると思われる。自由は意識と同一視されている。しかし、そのとき考えられている意識は、脳の物質の運命に結び付けられていないところが考えられており、その意識が自由だといわれている。

ここまで、ベルクソンの考え方を吟味すると選択は、ベルクソンに固有の自由とは考えられていないと思われることについて述べてきた。しかし、「自由な選択」とベルクソンが直接的に言うところがある。このとき、選択は自由と考えられているかについても、あいまいさを残すことを避けるため見ておきたい。ここでの自由と選択とは何が考えられているかということである。『創造的進化』の第 4 章の無の観念を扱う部分の直前で二度、「自由な選択」[211]という言葉をベルクソンは用いる。「この神秘は解明されねばならない。もし、ものの根底に持続と自由な選択を置くなら、そうしなければならない。」「もし、あらゆるものの原理が論理的な公理の仕方で存在するなら、公理の諸適用あるいは定義の帰結のように、ものそのものがこの原理から出てくるに違いないだろう。そして、自由な選択の意味に解された効力のある因果性(causalité efficace)[212]については、ものにおいてもその原理においてももはや余地はないだろう」と言われる。どちらも、「自由な選択」を肯定する文脈にある。ただ、「自由な」という形容詞がついているからと言って、ここでは、選択そのものを自由とまで言うのは無理があると思われる。初めの引用では、自由な選択は持続と並べられている。また、あとの引用では、自由な選択は、効力のある因果性と考えられている。従って、当然のことではあるが、(1)項で述べた、可能的なものの中からの選択をここでは意味することはあり得ない。また、脳が組み立てる「運動的な仕組み」[213]、脳と相互依存[214]する可能的行動でもあり得ない。効力のある因果性とは、第 3 節で、自由における決定が、内的因果性、心理学的因果性と言われるのと同じ表現の仕方と思われ、自由における決定のあり方を示していると思われる。では、ここでの選択とは何を意味するか、まさしく、今述べた、ベルクソン的な自由における決定について言われていると思

---

211 同上、p.729, 730.

212 causalité efficace は、直訳的に効力のある因果性と訳した。伝統的に使われる、cause efficace, cause efficiente の場合は、動力因、実効因と通常訳されている。しかし、ここでの causalité efficace は、文中でも述べている通り、ベルクソン独特の因果性の意味を表すために用いられていると思われる。なお、真方敬道の岩波文庫版、松波新三郎他の白水社版では、causalité efficace は、それぞれ、生成的な因果性、動力因と訳されている。

213 同上、p.718

214 同上、p.724.

われる[215]。この章での我々の検討の経緯からは、第 3 節で明らかにした原初的衝動による行為の決定であるといってもよいと思われる。行為は原初的衝動によって選ばれていると言えるからである。

ところで、『創造的進化』第 1 章では、可能的な行動は生物の知覚が素描するものと考えられている。「さて、選択は、いくつもの可能的な行動の先取りされた表象を前提とする。行動の諸可能性が行動そのものの前に、それゆえ描かれていなければならない。見る知覚はほかのものではない。」[216]この考え方は、『物質と記憶』で論じられたものである。それが、『創造的進化』にも引き継がれている。動物全体で考えられる選択の能力とは、身体に根拠を持つ、行動における選択の能力と考えられる。

(3)　時間と空間

第 3 節の冒頭で、自由の例として、右手や左手を思うとおりに上げたりできることを考えたり、あるいは好きなメニューから食事を選べることを自由と考えたりすることがよくなされると述べた。本節(1)、(2)項から考えると、ベルクソンはこういう選択を自由とは考えない、少なくとも自らにおける固有な自由の捉え方ではないと考えていると思われる。今述べた例は、単に選択の能力がある例とベルクソンは捉えると思われる。(2)項で述べたように、その能力自体に異議をはさむことはない。

なぜそれがベルクソンに固有の自由だと考えられないかと言えば、ベルクソンが思考を始めたのは「働く」時間の中においてだからである。行動の能力は、ある瞬間の能力であり、選択の能力には時間が考えられていない。ある瞬間において、能力としてどれだけの行動があるかが並べられており、その中のどの行動を選ぶかというのが、選択の能力である。選択の能力は、いくつもの可能的な行動が一瞬間に置かれていることから、空間的に考えられていると言える。

ベルクソン自身の言葉で、ベルクソンの自由と、選択との違いを語ってもらうのがいいだろう。ベルクソンは『物質と記憶』の「要約と結論」で次のように言う。やや長いが引用したい。

---

[215] PR で、時間の「働き」として、「創造および選択の乗り物」(PR, p.1333.)と言われるとき、選択は、「可能的なもの」の間における選択でないのはもちろんである。しかし、また、ここでの検討を考慮すると、選択の能力でもないと考えられる。自由において、時間の中で行われる決定が、選択と言われているように思われる。

[216] 同上、p.577

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

「生物の進歩は、まず刺激を誘導することのできる、また行動を組織することのできる神経系の形成、次に漸次的な複雑化をもたらす、諸機能の分化にある。高次な諸中枢が発達すればするほど、同じ刺激が行動に対して選択を提示する運動的な経路はますます数多くなる。空間における運動にゆだねられるますます大きくなる範囲は人が実際よく見るところである。人が見ないのは、時間における、増大し、また付随する意識の緊張である。単に、既に古くなった諸経験の記憶によって、より豊かでより新しい決定において過去を現在に有機化するためにこの意識がますます過去を保持するだけではない。そうではなくて、より強い生で生きていて、意識は、非媒介的な(immédiat)経験の記憶によって、現在の持続において増大する数の外的な瞬間を収縮することによって、諸行為を創造することがよりできるようになる。その諸行為の内的な非決定が、物質の望むだけの諸瞬間と同じだけ多くの多数性に配分されるに違いないので、それだけいっそう容易に必然性の網の目を通過する、そういう諸行為を創造することがである。」[217]

前半で空間における選択しうる行動の増大について述べている。そして、後半で、時間における意識の緊張の増大についてベルクソンは注意を促している。つまり創造を時間の中で考えている。

『物質と記憶』の第 4 章では、「我々が、この本の初めで、身体と精神の区別は空間の関数としてではなく､時間の関数として確立されねばならないと言ったことは正しかった」[218]とベルクソンは言う。そこでの言葉を用いれば、自由についても､「時間の関数」として考えられていると言える。そして、本節(1)で既に引用したとおり、自由を空間化して考えることに対する批判は『試論』以来のものである。「対立する動機の表象、ためらいや選択を区別するやいなや、―そのようにして幾何学的な記号表示を一種の言語的な結晶化のもとに隠しているのだが―、意図せずに、ほとんど無意識的に、図形を考えている。」

選択の能力ということについては、そこでは、創造の要求としての衝動が時間の中で変化発展するものと考えられていないとする限りにおいて、選択の能力はベルクソンに固有の自由ではない。空間的に考えられる選択はベルクソンの自由ではなく、ベルクソンの自由は時間の中で考えられているというおおもとのところに、選択の問題を考察することで

217 『物質と記憶』、p.377-378.
218 同上、p.314.

やはり達してしまったということである。

第 5 節　より以上のもの―新しさの創造―

ベルクソンの自由に関して、やや分かりにくい点が、あと一つあるように思われる。ベルクソンは、精神が「自分が持っている以上(plus que)のものを自分自身から引き出す」という言い方を、ある時期の講演で使っている。この意味はどういうことかということである。それに対する一つの答え方を我々は既に持っているといっていいように思われる。第 3 節で「行為自身による先行するものにおいては存在しなかったあるものの創造」とはどういうことであるかということを考えた。その答えが、この「より以上のもの(plus que)」という、一見神秘的に[219]さえ見える言い方に対する答えにもなっていると考えられる。

(1)　より以上(plus que)ということ

1911 年の「意識と生命」という講演では、ベルクソンはある特徴的な言い方で、努力や創造を表現している。精神や創造について、「より以上(plus que)」のものを引き出すという表現で語ろうとする。

「明らかに我々の前で一つの力が働いている。その力は、束縛から自由になろうとし、またそれ自身を超えようとし、始めにその力が持っているものを与え、次には持っているもの以上を与えようとする。精神をどうして別の仕方で定義できるだろうか。精神的な力は、それが存在するなら、含んでいるより以上のもの(plus que)を、みずからから引き出す能力によってでないとしたら、どこによって、他のものから区別されるだろうか。しかし、この力がその途上で出会うあらゆる種類の障害を考慮しなければならない。」[220]

「努力は骨が折れる。しかしまた、貴重であり、その努力が達する作品よりずっと貴重である、なぜなら努力のおかげで、あったより以上を(plus que)自らから引き出し、自分自身より以上に自分を高めたからである。」[221]

「その創造とは、自らによる自らの創造、わずかなものから多くを、無から何かを引き

219　『創造的進化』の中では、ベルクソン自身がこういう創造が、知性的な見方からは、神秘的に見えることを語っている。(EC、p.706.)

220　「意識と生命」, p.830-831.

221　同上、p.832.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

出し、そして世界にあった豊かさの何がしかに絶えず付け加える努力による人格の拡大のことである。」[222]

この最後の引用例では、より以上(plus que)という表現そのものはないにしても、内容的には同じことを言っていると見られる。さらに、1912 年の「魂と体」においても、同様の表現がある。

「それゆえ要約すると、身体は時間においては現在の瞬間に閉じ込められ、空間においては占める場所に限定され、そして自動機械として行動し外的な影響に機械的に反応するわけだが、その身体のそばで、空間において身体よりずっと遠くへひろがり、時間を横断して持続する何か、もはや自動的でも予測されているのでもなく、予測不可能で自由な運動を身体に対して要求し命じる何ものかを、我々は捉えている。あらゆる面で身体をはみ出し、新たに自分自身を創造することによって行為を創造するこの何かとは、『自我』であり、『魂』であり、精神である。精神とは、その力が含むより以上(plus que)をそれ自身から引き出し、その力が受け取るより以上(plus que)を返し、それが持つ以上(plus que)を与える。」[223]

もし、ある時点の前とあとを比べ、以前に持っていたものと、以後に持つものを比べるとき、なぜより多くのものを以後に持つことができるかという単純な疑問が生じる。そして、さらに、増えた分は、以前になかったわけであり、無から生じたことになるというように考えが進んでしまい途方にくれることになるかもしれない。

(2)　持続と創造

引用例では、より以上のものを引き出すのは、精神的な力や努力である。そして、実際より以上のものとしての創造があるのは、行為や人格についてである。この節のはじめで述べたように、第 3 節では「行為自身による、先行するものにおいては存在しなかったあるものの創造」とは何かについて検討した。「行為自身による、先行するものにおいては存在しなかったあるものの創造」と「より以上のもの」という表現を比べると、行為につい

222 同上、p.833.
223 「魂と体」、p.837-838.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

て考えれば、全く同じ事態を述べていると考えられる。そこでは、「緒論」や『道徳と宗教の二源泉』のベルクソンの言葉に基づいて考えた。そのときの考え方にならえば、以前とは、先行する内的な状態であり、以後とは、その状態を実現しようとする努力によって、創造される直前の行為とは異なる新しい行為である。そのとき、しかし、行為によって意識自体も新たなものになる。つまり、行為が遂行されるとき、直前の意識にも行為にもなかったものとして、つまりは以前より以上のものが行為と意識として引き出されて来ていると言える。より以上のものを引き出すのが、精神的な力や努力であるのは、力や努力を原初的衝動と考えれば、一つの全体として常に新しいものであり、そして新しい行為を生み出すことは、これまで述べてきたところである。もし、全体として一つでありながら時間的に発展する自我と、その行為の相互関係、つまりは時間的に不可分な持続によって、考えれば、より以上のものが生れるということを理解することは困難ではない。そして、改めて、ベルクソンの創造ということが、真に創造であるものを表しているということに驚かされる。

(3)　知性的な把握の問題

ベルクソンは『創造的進化』の中で、同様の問いに答えているそこでは、新しさや創造は、「背理」であり「空虚で無駄な表象にすぎない」と、「意識と生命」や「魂と身体」の記述とは、一見逆のことが、述べられているが、それは知性的観点からのものであり、丁寧に見ることが必要である。

「新しいもの(choses nouvelles)が存在しているものに付け加えられ得るということ、このことは、疑いなく不条理である。というのは、ものは、我々の知性によって行われる固化から結果するからであり、知性が構成したものとは別のものは決してないからである。創造されるものについて語ることは、知性が自らに与える以上に自らに与えるということになる。それ自身と矛盾する断言であり、空虚で無駄な表象である。しかし、行動が進むにつれて増大するということ､行動がその進展につれて創造するということ､そのことは、我々のそれぞれが、自分が行動するのを見るとき、確認するところである。ものは、知性が､与えられた瞬間に､この種の流れの中において行う瞬間的な切断によって構成される。諸切断をそれらのうちで比較するとき、神秘的であるところも、この流れを参照するとき

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

明晰になる。」[224]

ここの前半で語られているのは、知性が切り取るものについてであり、そのとき、新しいものが創造されることが理解しがたく神秘的にさえなるということである。後半は、行動が進展の中にあるということであり、前項で述べたのとほぼ同じ仕方で、進展の中にある行動は、新しいものを創造することが語られる。そして、最後の部分でこれらのことがまとめられる。増大する不可分な持続の中で考えるとき、流れとして見るとき、新しいもの、以前より以上のものが創造される。それが、ベルクソンの意味する創造である。そして、それは、既にある要素の新しい配置ではない[225]。[226]

なお、以上は、『創造的進化』の発表ののちの、時期的に近接する二つの講演において、「より以上のもの」が語られるところを見たが、その後十年を経て 1922 年に書かれた「緒論」においても、精神が、「より以上のもの」を創造することが語られており、必ずしも一時的な把握の仕方ではないと思われる。

「精神が、それが持っているより以上(plus que)を、自らから引き出すこと、精神性とは、そのことそのものに存するということ、精神の浸透した実在とは創造であるということを、直観は理解し、知る。」[227]

第 6 節　ベルクソンの自由がもたらすもの

ベルクソンの自由の捉え方がもたらすものは豊かである。自由の二つの側面のそれぞれに関して明らかにしたい。第 1 節では、ベルクソンの自由の持つ二つの側面に触れたものの、その二つの面がどう関係するかということや、直観、決定論の否定との関係、「働く」

---

224 EC、p.706.

225 「既に知覚された諸要素の別の秩序における新しい集合」(EC、p.499.)ではない。「可能的なものと実在的なもの」(PR)でも、新しいものが、古い要素の再配置ではないことが問題にされている(PR、p.1343-1344.)。

226 グイエもこう述べている。「創造とは、それゆえ、ここでは、信仰の真実でもなく、理性の観念でもなく、経験の事実である。」(Gouhier, H., *Bergson dans l'histoire de la pensée occidentale*, Vrin, 1989, p.61.)なお、グイエは、plus que で表される創造に関し、因果律や知性と関連について次の著書でも触れている。cf. *Trois essais sur Etienne Gilson: Bergson, la philosophie chrétienne, l'art*, Vrin, 1993.

227 「緒論」、p.1275.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

時間との関係などを明らかにすることに限定されていた。ベルクソンの自由がどのようなものであるかということは前提とされていた。ここで、ベルクソンの自由とはどのようなものかを概観したうえで、その自由がどういうものを我々にもたらすかを考える。ベルクソンの自由とは、自分自身でありつつ、新しい、独自なものを自らが生み出すことができる自由であるということに尽きる。しかし、ここではできるだけ広くベルクソンの自由が意味しているものについて考察する。

(1)　内的状態のあらわれとしての自由

a　その内容

『試論』では、自由についての二つほどの表現がある。

第一に、『試論』の「結論」で、ベルクソンは、「自由に行動するとは、自分を取り戻すことであり、純粋な持続の中に身を置きなおすことである」[228]と述べている。もっと一挙に言ってしまえば、自由とは、持続であるということである。なぜ、持続が自由かといえば、持続ということが、決定論を否定する根拠だからであり、持続とは自由であるあり方の直観による把握だからである。この点については、第 2 節で述べた。

第二に、よく引用されるように、「人格の内的状態の外部への現れは、まさしく自由な行為と呼ばれるものである。自我だけがその作者だったのであり、その現れは自我全体を表現するだろうからである」[229]とベルクソンは言っている。内的状態が外部へ抵抗なく現れることができれば、確かにそこに自由を感じることができる。内的状態とは持続のことである。持続とは「過去の全体験」[230]であり、「心全体」[231]であり、「全人格」[232]なのだから、そこから発する行為として自由なのだと考えられている。「確かに、自由な決意が発するのは、心全体からである。」[233]「一言で言えば、自我から発する、そして自我からだけ発するあらゆる行為を自由と呼ぶことに同意するなら、我々の人格の印を持つ行為は、真に自由である。というのは、我々の人格だけが作者の資格を要求するだろうからである。」[234]と

228　『試論』、p.151.
229　同上、p.109.
230　同上、p.112.
231　同上、p.110.
232　同上、p.113.
233　同上、p.110.
234　同上、p.114.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

ベルクソンは言う。自分自身が現れ、自分自身であることが自由であると考えられている。

そして、行為が「根底的な(fondamental)自我と同化する」かどうかで、自由かどうかが決まるという。「行為は、その行為が結びつく動的な系列が根底的な自我とよりいっそう同一化しようとすればするほど、それだけいっそう自由となるだろう。」[235]と自由に程度を認める。

内的状態の外部へのあらわれとして、芸術家と芸術作品の間におけるような類似があれば、われわれの行為は自由だとも言われる。ここでも強調されているのは「全人格から発する」ということであり、心全体が現れているかどうかという観点から、芸術作品の例が語られる。芸術作品の例がもし、『創造的進化』や PR で出てくるとすれば、創造や新しさが必ず語られるはずなのだが、『試論』では、自由とは、持続が現われることとして一貫している。

一見、自由とはほとんど関係のない次の例も自由と言われている。

「最も権威主義的な教育でも、もし、その教育が心全体に浸透することのできる観念や感情だけを我々に伝えるとしたら、我々の自由の何ものも抹消しないだろう。」[236]この例は、むしろ外部の、内的状態への浸入の場面について語っている。「権威主義的な教育」という外部が浸入する場面である。しかし、「もし心全体に浸透する」なら、内的状態は、決して妨げられてはいない。自分自身であることは変わらないからである。こういう自由も確かにある。

ベルクソンの自由の「内的状態の外的な現れ」という側面は、少なくとも類似の発想といえるものを『道徳と宗教の二源泉』にも見ることができる。自由という言葉は明示的に使われていないが、偉大な人に従う場合、神的な情緒と一体となるとき、それは自由な行為でもあるとベルクソンは考えていると思われる。『試論』に描かれる自由の捉え方は、ベルクソンにとって深く染み入っているもののように思われる。

「抵抗に出会わないという点で、同意しか課さないという点で、先に定義した責務と異なっているが、しかし何かを課す点でそれでもやはり責務に似ている、ある行動の要求が最も静かな情動の中に入り込みうる。」[237]ここでの「ある行動の要求は」、音楽が「我々を

235 同上、p.110.
236 同上
237 『道徳と宗教の二源泉』、p.1008.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

これらの感情の中に導きいれる」[238]という仕方と似た仕方で、情動の中に入って行く。『試論』で言えば、「心全体に浸透する」ことで、「行動の要求」に従うことになるような、圧力による責務ではない、切望としての責務が考えられている。また、次のように言われる。

「しかし、情動の雰囲気がそこにあるなら、それにかき立てられ、それに従って私は行動するだろう。強制でもなく必然でもなく、私が抵抗することを欲しない心の傾きによってである。」[239]

「哲学者は、例えば、魂を抱き、そこにあるものを焼き尽くし、その場所全体を以後占めることのできる熱狂を思う。人格はこの情動にそのとき一致している。しかしながら、人格はかってそれほどまでにそれ自身であったことはなかった。人格は単純化され、統合され、強化されている。」[240]

「地球において、いずれにしても、他の種全体の存在理由であるこの種は、部分的にしかそれ自身ではない。もし、それらの代表者の一部が生の一般的な仕事に付け加えられた個人的な努力によって、道具が置く抵抗を打ち砕くことに、物質性に打ち勝つことに、最後に神を見出すことに成功しなかったとしたら、完全にそれ自身になることを考えさえしなかっただろう。」[241]

もともとは自分自身ではないものが浸透してきながら、しかも自分自身であるというあり方が語られている。自由と言う語は使われていないが、ここには『試論』における自由と少なくとも類似したものがあると考えられる。

b　意義

この自由は、様々な意味合いを持つであろうが例えば、次のようなものがあげられる。

(a)　治癒

意識が互いに外在化し、いわば引き裂かれた心をぬぐい、全体としての自己を取り戻させ、治癒をもたらすことができる。

238 同上
239 同上、p.1015.
240 同上、p.1189.
241 同上、p.1194.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

(b)　手応え

基本的な自我への同化が自由であり、行為を自我との一致の観点から見ることで、自我全体の重みを手応えとして感じさせる。

(c)　納得認知[242]

強制的な法も、納得認知すれば、それは自我と浸透し合うことができたのであり、自由と考え得る。強制的なものと妥協するのではない、自由を確保する道が探れる。

(d)　決断

『試論』では、例えば重大な決断の場面がある。ここでは、自由とは、自らの決断に自分の全経歴と現在のすべてをかけることである。自由の概念でありながら、決断とは何かも、この自由の概念は示している。

(2)　新しいものを創造する自由

a　その内容

(a)　『創造的進化』

『創造的進化』では、しかし、自由は、新しさや創造と結びつけて考えられるようになる。ベルクソンは知性を批判する文脈でこう言っている。「常に知性は自由な行為に固有の新しさや創造の部分を顧みないであろう。常にそれは、行動それ自身を、古いものを古いもので、同じものを同じもので組み立てることによって得られる人工的で近似的な模造品に置き換えるだろう」[243]ここでベルクソンは、知性を、物質の枠に適用した意識と考えている。そして、自由な行為まで、物質と同じ枠で捉えるとして知性を批判している。その批判の中で、自由な行為にとって、新しさは固有なものであると考えられている。

『創造的進化』は、『試論』とは違い、個人の意識における自由を主として扱うことはない。生命進化におけるあり方を、エラン・ヴィタル(生命の躍動)として捉えるのがこの『創造的進化』の主題である。ただ、自然なり生命進化を説明する際、芸術作品を例として説明される場合がある。そういう例示に、『創造的進化』では、個人の自由を見ることができる。第 3 節でも、そういう観点から自由を見た。芸術作品を予見不可能な創造として述べ

242　ここの「納得認知」とは、フランス文学者の渡辺一夫の表現である。渡辺一夫は、「『法』の納得認知」は自由であると考えている。(「自由について」、『人間模索』、講談社、1976 年。所収、p.141.)

243　『創造的進化』、p.724.(EC、319 頁)

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

たあと、自然の作品も同じことだとして、こう述べる。

「そこに現れる新しいものは内なる衝力(poussée intéreure)から発する。その衝力は進展(progrès)ないし継起(succession)であり、継起に固有な効力を付与する。あるいは継起からその効力の全体を保持し、いずれにしても、継起あるいは時間における相互浸透の連続性を、空間における瞬間的な単純な並置に還元できないものにする。」[244]

こういった点から、第３節(2)項では、自由において行為を決定する、衝動を考えた。ここでは、個人の「内なる衝力」によって、新しさが生み出される自由を考えることができる。こういう新しいものを創造する自由がよりよく読み取ることができるのが、次の「可能的なものと実在的なもの」である。

(b)　「可能的なものと実在的なもの」(PR)[245]

表題にある「可能的なもの」(le possible) とは、「観念の形において予め存在していること(先在)」[246]を指している[247]。ベルクソンは「可能的なもの」を考えることは、「予め未来が描かれてい」[248]て、未来が「実在に先立って存在する」[249]と考えることであるとして、それは錯覚だと論じる。そして、「可能的なものをその場所におき戻」[250]すことによって、「限界のない領域が自由に与えられている」[251]と述べている。

その自由については、新しさという言葉を使ってやや逆説的ではあるけれど、次のよう

---

244 同上、p.783.

245 Jankélévitch,V., *Henri Bergson*,P.U.F.,1959(『アンリ・ベルクソン』阿部一智他訳、新評論、1988 年。)は、その序論で PR の重要性に触れ、第六章Ⅱで「可能的なもの」を論じている。そこでは「つまるところ精神の充満の中にも新しさの場所があることになるのだ。」(p220, 邦訳 p.298)と言われている。Husson,L., “Les aspects méconnus de la liberté bergsonienne”, in *Les études bergsoniennes vol.IV*, P.U.F., 1956 では、ユッソンは、この論文の結論部で、「予見不可能なものあるいは新しいものを創造する能力」という語に注を付け、「自由な行為の予見不可能性が、『可能的なものと実在的なもの』についての仕事によって解明されている。」(p.196)と記載している

246 PR、p.1342.

247 「可能的なもの」の錯覚については第 4 章で論じる。

248 PR、p.1342.

249 同上

250 同上、p.1343.

251 同上

に語っている。

「それらの学説が非決定とか自由とか言ったとき、非決定ということを可能的なもののあいだにおける競争、自由というものを可能的なもののあいだにおける選択とそれらの学説は理解していた。あたかも可能性が自由によって創造されないかのように。あたかもまったく別の仮説が実在的なものに対する可能的なものの先在を置くことによって、新しいものを古い要素の再配置でしかないように帰着させるのではないかのように。そして、その学説が遅かれ早かれ、新しいものを計算可能であり予測可能であるとみなすように仕向けられるはずではないかのように。」[252]

ここでベルクソンは、自由を認める学説においても自由を間違って考えている、「可能的なもののあいだにおける選択と見」ていると批判しているのである。自由を認める学説自体が、自由を認めない学説(「まったく別の仮説」)のしているように「実在的なものに対する可能的なものの先在を置くことによって、新しいものを古い要素の再配置でしかないように帰着させる」というのである。つまり、ここからも明らかなように、ベルクソンにとって自由とは、「古い要素の再配置」ではなくて、「新しいもの」なのである。「計算可能であり予測可能である」とは見なせない、「新しいもの」であると、ベルクソンが考えていることが読み取れる。

上記のように自由が言われるとき、自由は新しいものを新しいものとして経験することとして考えられている。「知性的習慣」[253]のため、「実在的なもの」から、「可能的なもの」を作ってしまい(「実在的なものが可能的なものになる」)、あたかも「可能的なもの」の間で選択をし、「実在的なもの」を生み出すかのように考える。そう考えることは、「進化の各瞬間の根源的な新しさ」[254]を見誤ることである。

「可能的なもの」の錯覚から逃れ、「予見不可能な新しさの現実の湧出」[255]がある時間を認めれば、「なんだか分からない自然の必然性の奴隷」[256]になっていた我々がそこから脱っし、新しさを創造する喜びと、自由に行動できる強さを持つと言うのである。

---

252 同上、p.1343.
253 同上、p.1339.
254 同上
255 同上、p.1344.
256 同上、p.1345.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

(c)　新しさということ

「新しいもの」とは、古い要素の再配置ではなく[257]、計算によって予見できないものであり、「新しいもの」とは、時間の中で創造されるとベルクソンは考えている。

「可能的なもの」とは「根源的に新しいことの見そこない」[258]を生じさせ、「我々の意識が我々の中で新しいものの永続する開花を捉え」[259]るのを妨げるものである。「予見不可能な新しさの現実の湧出」こそが、「予見不可能な新しさの連続的な創造」[260]こそが「実在的なもの」である。「可能的なもの」を錯覚だと言うことによって、ベルクソンは我々の中に新しいものが生まれるということを強く主張しようとしている。

b　意義

(a)　創造の確信

『試論』における持続に身を置きなおす自由によって、様々な意味を見ることができた。新しさの自由については、自らが新しいものを創造できる存在であることを確信させる点が、もっとも大きなこの自由の捉え方の意義であると思われる。意識であり生きる人間である限り、新しさを創造する存在である。人によって程度の差があるのはやむを得ないにしても、生きることによって新しいものをこの世界にもたらすことができる。生きるということ自体が新しさの創造である。自由とは、生きる各瞬間に新鮮さを感じながら、そしてまた、自らが生み出す新しいものの、みずみずしさを感じつつ何かを生み出すことである。

(b)　力と喜び

ＰＲでは、力と喜びについてベルクソンこう言っている。「哲学は、諸現象の動く世界において何か絶対的なものを見出すという利益を得るだろう。しかし、我々は、より喜ばしく、より強いと自分自身を感じる利益も得るだろう。」[261]

そして、まず喜びについてこう続ける。「より喜ばしい。というのは、我々の眼の前で作

257　第 5 節(3)の注参照。
258　同上、p.1336.
259　同上、p.1335.
260　同上、p.1331.
261　同上、p.1344.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

り上げられる実在は我々のおのおのに絶えず、芸術が幸運に恵まれた人に時おり得させる満足のあるものを与えるからである。我々の欲求の恒常性によって催眠状態にさせられた我々の感覚が第一に見かける固定と単調さを越えて、実在は我々に絶えずよみがえる新しさ、ものの動く独創性を発見させるだろう。」[262]

また力に関しては、「しかし、我々はとりわけより強くなるだろう。というのは、起源にあり、我々の目の前で継続する、創造の偉大な作品に我々は、我々自身の創造者として我々自身が参加していると感ずるから。」[263]自由の新しさは、「活動する力」や「喜び」を与えてくれる。自由に新しい行為をなし得るとすれば、そのことを確信することは、「活動する力」を与えてくれる。自分自身によって、自分自身によってしかできない新たな行為を生み出し得ることは喜びをもたらす。一人ひとりの人間は、生きているだけで、あるいは生きることで、創造する存在であり、自分しか作ることができないものを生み出すのであり、そのことは、喜びと力につながる。

第 7 節　喜び

ここで、喜び(joie)について、節を改め、ベルクソンがどう捉えているか考えて見たい。PR 以外では「意識と生命」、「哲学的直観」、『道徳と宗教の二源泉』などでベルクソンは喜びに触れている。

(1)　喜びと創造

「(前略)　我々は、喜びのある至るところに、創造があると考える。創造が豊かであればあるほど喜びはいっそう深くなる。」[264]

「もし、それゆえ、諸領域全体において生の成功が創造であるとしたら、人間の生は、芸術家や学者(savant)の創造と違い、あらゆる瞬間に人間全体で継続されうる創造において、その存在理由を持つと想定しなければならないのではないか。その創造とは、自らによる自らの創造、わずかなものから多くを、無から何かを引き出し、そして世界にあった豊かさの何がしかに絶えず付け加える努力による人格の拡大のことである。」[265]

---

262 同上、p.1344-5.
263 同上、p.1345.
264 「意識と生命」、p.832.
265 同上、p.833.　第 5 節参照

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

喜びとは、創造がもたらすものと考えられている。そして、その喜びをもたらす創造が「生命の意味と人間の運命」[266]、「人間の存在理由」とまで考えられている。後半部分のより以上のものを引き出すということの意味は、第 5 節で明らかにしたところである。

(2) 哲学の喜びと芸術

PR でも、「より喜ばしい。というのは、我々の眼の前で作り上げられる実在は我々のおのおのに絶えず、芸術が幸運に恵まれた人に時おり得させる満足のあるものを与えるからである。」と語られていた。時間の存在を認めるときに出てくる、創造の喜びが芸術に匹敵するものと考えられている。芸術と哲学の違いは、「芸術は幸運に恵まれた人に時おり得させる」ものであるのに対して、ベルクソンのいう哲学がもたらす喜びは、常にしかも人間すべてに与えられるというところにある。先ほどの引用でも、「芸術家や学者の創造と違い、あらゆる瞬間に人間全体で継続されうる創造」と言われている。

さらに、そのことは、「哲学的直観」においても、また「哲学的直観」とほとんど同じ時期の講演である「変化の知覚」でも述べられている。

「芸術が、素質と幸運に恵まれた人に、しかもときおりにしか決して与えなかった諸満足を、我々を取り囲む幻と化したもの(fantôme)に生命を再び吹き込むことによって、また我々自身を再生させることによって、すべてのひとに、あらゆる瞬間に、その満足をこのように理解された哲学が与えるだろう。」[267]

「我々は、毎日の我々の生にこの(普遍的な生成の)見方を浸透させ、その見方によって、哲学から、芸術の満足に似ている、しかし、より頻繁な、より連続的な、人間の大多数により近づきやすくもある満足を得ることができるだろう。」[268](括弧内は引用者)

そして、「変化の知覚」では、哲学的な把握による満足は、ある意味でむしろ芸術の満足以上のものと考えられている。

---

266 同上、p.832.
267 「哲学的直観」、p.1365.
268 「変化の知覚」p.1391

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

「芸術は、我々がありのままに見かける、より以上の質とより以上の色合いを恐らく我々がものの中で発見するようにさせる。芸術は我々の知覚を拡大する。しかし、深さにおいてというよりむしろ表面においてである。それは、我々の現在を豊かにする。しかし、ほとんど我々に現在を越えさせない。哲学によって、現在から、現在がそれとともに引きずる過去を決して分離しないことに我々は慣れることができる。哲学のおかげで、すべてのものは深さを獲得する。深さより以上のもの、以前の知覚が現在の知覚と連帯したままであることを可能にする、また直接的な未来それ自身が、現在において部分的に描かれることを可能にする第四次元のような何かをである。云々。」[269]

ここにベルクソンの考える哲学と芸術の違いを見ることができる。芸術は、我々の知覚の拡大である。この芸術に対する見方は、『笑い』以来のものである。

「諸物と諸存在の個性は、それを見ることが我々にとって物質的に有益ではないといつでも我々から見落とされる。」[270]

「最後に、要するに、我々はものそのものを見ない。我々はたいていの場合、ものに張られた名札を読むだけにとどめる。必要に由来するこの傾向は、言語の影響の下でいっそう顕著になった。」[271]

「自然が芸術家にした我々のうちの彼ら自身に対して、自然がおおいを持ち上げたのは、偶然的に一つの面からである。自然が知覚を必要に結びつけるのを忘れたのは一つの方向においてだけである。各々の方向は我々が感覚と呼ぶところに対応しているので、芸術家が通常、芸術に運命付けられているのは諸感覚のうちの一つによって、その感覚だけによってである。」[272]

芸術が必要を越えてものそのものを見るという、感覚の拡大であるという考えをここに見ることができる。

そして、哲学は現在という時間を我々に越えさせることで、芸術をこの面では越えてい

269 同上、p.1391-2.
270 『笑い』、p.460.
271 同上、p.460.
272 同上、p.461.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

ると、「変化の知覚」では考えられている。

(3)　喜びと快楽

ところで、喜び(joie)に対比的に考えられているのは、快楽(plaisir)である。

「自然は正確なしるしによって我々の目的が達成されたことを我々に告げる。このしるしが喜びである。私は喜びと言い、快楽とは言わない。快楽は、生物について生命の維持を得るために自然によって考え出された技巧でしかない。生命が放たれた方向を快楽は示さない。しかし、喜びは常に、生命が成功したこと、前進したこと、勝利を得たことを告げる。あらゆる大きな喜びは勝利の特徴である。」[273]

「存在の都合のよさしか目指さないその応用によって、科学は充足感、少なくとも快楽を我々に約束する。しかし、哲学は既に我々に喜びを与えうるだろう。」[274]

快楽は生命の維持に関係するのに、喜びは創造という成功だと考えられている。そして、そのことが、哲学と科学の違いとまで言われるということである[275]。

273　「意識と生命」、p.832.

274　「哲学的直観」、p.1365.

275　ベルクソンは科学が捉える時間が、意識の時間ではないというところから、その独自な思考を出発させた。出発点には、科学的な時間と意識的な時間の二つがある。そして、それぞれの時間的な捉え方は、認識方法として、知性と直観の二つが対応し、また、行動や生活の必要性としての実践に対しては思索が対応し、学問の分野として、科学と哲学が対応する。感情に関しても、快楽と喜びがそれぞれの系列に対応している。二つの対立する二項が少なくとも必ず起源にあることは、これまでも言われてきていることだが、ベルクソンに特徴的であるように思われる。そして、これは、ベルクソンの方法が既存の科学的な、学問的な事実の徹底的な吟味から出発し、原理的には、既存の知見を否定する直観を得ることにあると考えられる。もし、このような方法を常に取るとすれば、既存の知見とそれを否定する独自な思考が対のようにしてあることになるからである。しかし、このことから単純に二元論的であるということにはならないだろう。どちらをも含む一項が考えられたり、いずれか一項をより重要なものと考えられたりすれば、一元論的になるからである。『道徳と宗教の二源泉』では、「これらの世界の各々において、生命の躍動と生の物質は創造の補完的な二つの側面であろう。後略」(DS, p.1193.)と言われる。ここでは、生命の躍動と生の物質とは原初的衝動ないし創造的エネルギーの二つの側面として考えられているように思われる。なお、1912 年のトンケデェク宛の手紙では次のように言われている。「これらすべてから、創造的で自由な、同時に物質と生命を生じさせる、その創造の努力は、生命に関しては、種の進化によってまた人間の諸人格の構成によって継続される神の観念がはっきりと、引き出される。」(M964)神の観念と、創造的エネルギーが対応し

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

『道徳と宗教の二源泉』でも、快楽と喜びの違いは維持される。

「どの程度に来世への信仰が重要であるかを知るために、どれほど人が快楽に身を任せるかを知ることで十分である。もし、虚無に対してのもらい得、死に立ち向かう手段と見ないならば、これほどまでに快楽に執着しないだろう。確かに、我々が確信しているなら、絶対的に死後も生き残ることを確信しているなら、もはや他のことは考えることができないだろう。諸快楽は存続するだろう、しかし、くすみ、色あせてであろう。というのは、それらの強度は我々が諸快楽に固定する注意でしかなかったからである。朝の日の光における電球の光のように、それらはあせるだろう。快楽は、喜びに輝きを奪われるだろう。」[276]

ただ、ここでの喜びとは何かは、『道徳と宗教の二源泉』が難しいのと同じように難しい。表面的でしかないことを恐れずに言わざるを得ないとしたら、次のような箇所が参考になる。

「魂の生への執着は、今後は、この原理、喜びの中における喜び、愛でしかないものの愛と不可分であるだろう。」[277]

この原理については、愛であり[278]、神である[279]「創造的エネルギー」[280]と見れば、この

ていると思われる。ただ、トンケデェク宛の手紙では、「これらすべてから、一元論と汎神論一般への反論が、その結果引き出される。」と続けられおり、「一元論と汎神論一般」に対して、ベルクソンは批判的である。一元論や二元論という議論は、この論考で筆者が扱おうとしている主題ではないものの、二元的なものの他にそれらの基にあるものが考えられていることは見て取ることが出来る。ただ、そのことと一元論か二元論かという問題との関係はここでは置き、今述べたいのは、ベルクソンにおいてしばしば二つの項が現れるのは、否定の力を持つ直観を得る方法によるのではないかということである。なお、ベルクソンが一元論をどう考えているかという問題に関する解説としては、アルノー・フランソワの「『一元論』によってベルクソンが理解するもの」(« Ce que Bergson entend par « monisme » Bergson et Haeckel » in *Lire Bergson*, P.U.F., 2011.)という論考が参考になる。

276 『道徳と宗教の二源泉』、p.1245.
277 『道徳と宗教の二源泉』、p.1155.
278 同上、p.1193,1194.
279 同上、p.1194.
280 同上、p.1193,1194.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

創造的エネルギーを見出すことが、喜びになると思われる。喜びとは、著作によって、変化はあるものの持続の中における創造がもたらすものと言える。そして、その創造と喜びは神的なものにつながっている。そのことは、「可能的なものと実在的なもの」(PR)でも同じ[281]である。

[281] PR における「より偉大な『主』(un plus grand Maître)と結びついた主人(maître)」(PR、p.1345.)という表現は、神秘家を「人々に対しては能動的な『神の補助者』(adjutores Dei)」(DS、p.1173.)と捉える表現と類似している。ところで、興味深いのは、PR の元になった 1920 年の講演において、『道徳と宗教の二源泉』にかなり先立つ時期に、PR と同じ内容が語られていると見られるからである。「もっと偉大な『主』」と共同してはたらく主人」ということを、ベルクソンは、講演において既に言っているようである。このことは、1920 年に行った、ＰＲのもととなった *Mélange* にある、講演の概要(M1323 - 1326)には、出て来ないものの、ジャック・シュヴァリエが、「ベルクソンとの対話」の中でほとんど、同じ言い方でベルクソンが講演で語ったとして記しているからである。シュヴァリエは講演を聴いており、「我々は、かくして、より偉大な『主』(un plus grand Maître)の作品のために共同で仕事をする主人(maîtres)となる。」(Chevalier, Jacques, *Entretiens avec Bergson*, Libraire Plon ,1959, p.30)とベルクソンが言ったと記している。また、その十年後になって、その講演について触れるところでは、「ベルクソンが、より偉大な『主』(un plus grand Maître)の作品のために共同で仕事をするよう求められた主人(maîtres)について話した、その講演について、私は、ベルクソンに思い出させた。」(*Ibid.,* p.123.)とも書いている。ＰＲの「もっと偉大な『主』」(un plus grand Maître)や「主人」(maîtres)という言い方と講演の言い方とは同じである。「可能的なもの」の錯覚という、新しいものの創造をより問題にする錯覚に達しているときに、創造と偉大な主としての神が触れられていることは留意すべきことのように思われる。

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

第 3 章　直観

ベルクソンは、『試論』において「自由とはそれゆえ事実である。そして、確認される事実の中でより明晰な事実はない」[282]と書いている。ベルクソンがのちに用いる意味[283]で、直観という語を使うなら、この文章は意識において直観が自由であることを把握する、ということを意味する。しかし、直観による把握が間違いないということ、あるいは、『試論』での言い方によれば事実であるということは、何を意味しているのだろうか。ここには明らかにすべきものが残っているように思われる。直観の確実性の問題は必ずしも明瞭ではないと思われる。それで、本章では、このことに関連する二つの問題を扱う。

1　直観の確実性とはどのようなことか。

2　直観を支えるものとは何か。

なお、否定の力を持つ直観については、第 1 章第 3 節および第 4 節で検討を行った。この直観が出発点の反省において見られることから、叙述の都合上、先行して検討した。本来的には、その内容は本章に属する。本稿における直観に関する見解とは、それらも含めたものである。

第 1 節　直観の確実性の問題

(1)　確実性の問題

もし意識の事実であり、外的世界の事実ではないのなら、その事実は疑うことが通常は出来ない。意識において痛みを感じるなら、この痛みは意識においては誤ることなく存在している。そしてそのことは通常疑えない。外的世界の事実ではなく意識の事実だからである[284]。しかしながら、例えば自由の問題は自然の決定性と自由の関係から生じている[285]。直観が関わるにしてもたいていの場合、意識の事実だけを考えることはできない。他方、言葉を用いるなら、言語が介在していることになり、既にもはや意識の直接的な事実ではない。従って、そのような場合、特に直観の確実性の問題は必ずしも明瞭とは言えない。

282　『試論』、p.145.

283　第 1 章第 4 節(1)の注参照

284　本節(2)注参照

285　第 2 章冒頭の注参照

直観の確実性については吟味すべき問題が残っているように思われる。

(2)　直観の確実性の考え方

ベルクソンにおいては直観の確実性について考え方は、恐らく少なくとも三つある[286]。第一に、直接的なものからしか出発できないとベルクソンは考えているように思われる。ベルクソンは、フランス哲学会の「非媒介的なもの(immédiat)」に関する議論において、「いかなる哲学も、それがどのようなものにせよ、これらの所与から出発せざるを得ない」[287]と述べる。これらの所与とは、「我々の意識の究極の所与」、つまり「非媒介的な(immédiat)感情」あるいは「非媒介的な(immédiate)意識」を意味している。それらの所与の確実性に関し[288]、ベルクソンは、これらの所与は疑いの対象にならないと考えているように思われる。

次に、「単純な結論や根本的な解決」[289]を期待できる概念的な操作との対比で、ベルクソンは次のように書いている。「反対に不完全な解決と暫定的な結論を伴った経験の場に関して、それは(この形而上学は) 、ついには確実性と等価になりうる増大する確からしさ

---

286 直接的には直観ではないが、『創造的進化』において進化論の確実性について次のように述べている。「これは(進化論の仮説)は厳密に証明できない。しかし理論的あるいは実験的な証明の確実性より以下で、明証(évidence)の代わりをし、限界としてそこをめざすあの限りなく増大する確からしさ(probabilité)がある。進化論の提示する種類の確からしさとは、そのようなものである。」(EC、p.515.)　ここでも、理論的あるいは実験的な証明の確実性とは別の確実性ないしは確からしさをベルクソンは考えている。また、『道徳と宗教の二源泉』では、哲学的な確実性について次のように述べている。「ここでは、我々はもはや本当らしいものの領域にしかいない。しかし、哲学的な確実性は程度を含むということ、それは論証と同時に直観に訴えるということ、もし科学を背にした直観が延長されうるとすれば、それは神秘的な直観によってしかありえないということは、何度繰り返しても繰り返し過ぎることにはならないだろう。」(DS, p.1193.)なお、念のため言えば、本章で扱う直観は、科学を背景とした直観だと一応言えるが、直接的には神秘的な直観までは考慮していない。

287 M771

288 「ベルクソン講義Ⅰ」において、同様の考え方が見られる。「始めに、それは(主観的な方法)は我々を誤らせることは出来ない。意識は、少なくともある意味で誤ることが出来ない。しかし、心理学的な事実が問題であるとき、意識はその事実をそれがあるのとは別の仕方で見ることはできない。というのは、その事実とはまさしくそれが現れているところのものであるからである。心理学的事実にとって、現れることと在ることとは一つでしかない。」(*Bergson Cours　I　Leçon de psychologie et de métaphysique,* p.36.)

289 「緒論」、p.1288.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

(probabilité)に達するだろう。」[290]ベルクソンはまた次のように書く。「哲学が我々にもたらすものにおいて、おそらくすべてが等しく検証され検証しうるということはない。多くの場合､多くの点で精神が危険を受け入れることを要求するのが哲学的方法の本質である。しかし、哲学者は、確信を得たという理由や、揺るぎなく確実であると感じるものがあるという理由でしか、これらの危険を冒さない。」[291]ここでベルクソンが考えているのは、恐らくのちに『道徳と宗教の二源泉』で「突合せの方法」[292]と呼ばれるものである。「意識と生命」(『精神エネルギー』)では、「(「事実の線」の)おのおのは、切り離されると単に確からしい (probable)結論へ我々を導くだろう。しかしそれらの集中によってすべてが一緒だと、私はそう期待するのだが、我々を確実性の道のりで感じる確からしさの蓄積に直面させるだろう。」(括弧内は引用者)[293]　ベルクソンが考える危険とは「事実の線」の延長が関係する危険であると思われる。事実の線の延長とは、既に直接的な事実ではない。延長させることには危険が含まれている。既に言及したように『道徳と宗教の二源泉』では、ベルクソンは「突合せの方法」を次のように説明する。「測量士は近づくことのできる二つの点から交互にその地点にねらいをつけることによって、近づくことのできない点の距離を測定する。我々はこの突合せの方法が形而上学を決定的に進めさせることのできる唯一の方法であると考えている。」[294]

第三に、ベルクソンは直接的な経験について､「もう一度になるが、直接的な経験から出発したとしても､外的な経験の進展と､そこに結びついている推論の方法の全体の進展が、その採用を命ずるという条件でしか、この経験の諸結果を採用するようにさせることが出来なかった。」[295]そして、こう続ける。「我々の最初の反省のそのような結果は、全く別の道によって再びそこに達したときしか我々によって明晰に見いだされ、決定的に受け入れられなかった。」[296]　ここでの「我々の最初の反省の結果」とは、「純粋な状態における内的な経験は、その本質そのものが持続することであり、結果として、破壊することの出来ない過去を現在の中に絶えず延長する『実体』を我々に与えることによって、どこに記憶

290 同上
291「哲学的直観」、p.1360.
292『道徳と宗教の二源泉』(DS)、p.1186.
293「意識と生命」、p.817.
294 DS、p.1186.
295「緒論」、p.1314.
296 同上.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

が保存されているかを探すことを我々に免れさせ禁じていた」[297]ということを指している。他方、「全く別の道」とは、記憶の脳への局在の問題に還元され、最後に失語症の問題に還元された「精神の身体との関係」の問題を指している。

ベルクソンのこれらの反省から、そして特にこの第三の考え方から、たとえ直接的なものの直観からすべての人が出発することを余儀なくされるにしろ、もし別の道があるなら、直観はより確実になると考えることができる。我々は、この意味において直観の確実性の問題を扱う[298]。

なお、我々は、言語的な表現として不可分なもの、あるいは相互浸透とし語られる持続は既に言語が用いられており、正確に非媒介的なもの(immédiat)であるとは言えないと考える。従って、直接的な経験と言われるものであっても、言語的に表されたものについては、その言語的な把握の確実性がやはり問われるものになると考えられる。そして、本章の結論に予め触れることになるが、否定の力を持つ直観がこの言語的な把握の確実性について別の道として、直観による言語的な把握を支えるということを、本章で確認することとなる[299]。

(3)　持続の直観が捉えるもの

a　直観の問題

直観と持続に関して、既に幾度か述べてきているが、ここでの議論に必要な範囲で述べ

---

297 同上、p.1315.

298 なお、ベルクソンの直観が、「莫大な事実の塊を一緒に一つに溶かす」(「形而上学入門」(IM)、p.1432)ことから生れてくることに留意することも重要である。新しい科学を作り出すことまで含めてベルクソンは莫大な事実を集めることを考えており(「緒論」、p.1309)、事実を集めることはそうしないより確実性が高まると言える。事実を溶かすとは、事実を既成の概念のままに見ないと言うことだろう。しかし、ここに危うさが入り込む余地も考えられる。また、科学と観察と経験の全体が充分ではないのに充分だと判断して、直観が自ら把握するものについて誤るということがあり得る。あるいは、莫大な事実の塊をうまく溶解できないこともあるだろう。「半世紀以来の形而上学の部分的な陰りは、前よりもはるかに分散した科学と接触する際に、今日、哲学者が出会う尋常ではない困難を主として原因としている。」(IM、p.1432)つまり、諸事実が拡大し過ぎしたり、その把握が制約されたりして、直観が十分働くことができなくなることも考えられる。なお、本文で述べたとおり、本稿では莫大な事実を集め、溶解することとは別の種類の確実性を検討する。

299 なお、この点については、ごく簡単にではあるものの、既に第 1 章第 4 節(2)でも触れている。

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

る。直観とは、「主として、精神による精神の内奥の認識である」[300]。あるいは、直観とは「精神に対する直接的な視覚である」[301]。「我々は、それゆえ形而上学に、限定された対象、主として精神と、特殊な方法、何よりも直観を割り当てる。」[302]ここで、「直接的な」とは、「見られた対象からかろうじて区別される視覚であり、接触であり一致でさえある認識」[303]の仕方を形容している。ベルクソンは『試論』において、持続を説明するのに、メロディ、鐘の音、時計の音と音の例を示す。「見られた対象からかろうじて区別される視覚」とは、『試論』で語られる音に関する種々の例によってその意味を推定することが出来る。意識による音の把握の仕方において、①音を聞いたばかりの意識状態を思い起こすときの、②１つの全体の、③時間的に不可分なあり方を把握すること考えられる[304]。対象と一致していた意識が、対象から離れ始め、一致していたそのごく直前を思い起こす仕方で捉えることが、対象とかろうじて区別され視覚のことであろう。その視覚は、意識状態の時間的推移を不可分な全体として捉えると考えられている。このように直観を捉えるなら、次のように言うことができるだろう。「我々が空間化された時間において我々の状態について行っている並置の下に、内的な生活を再び捉えることが問題であった。その経験はすべての人の手の届くところにあった。」[305]。

また、直接的であるとは、「介在されるものは何もない。その一つの面が空間であり、他の面が言語であるプリズムを通した屈折も少しもない」[306]ということである。介在するものにより誤りが生じるということはない。

しかし、この視覚、「見られた対象からかろうじて区別される視覚」は、「接触であり一致でさえある認識」として把握されるかもしれないものの、既に「見られた対象からかろうじて区別される視覚」であるなら、「接触であり一致でさえある認識」そのものではない。旋律を聴いているときと、旋律を思い起こすときとは、違った意識状態である。旋律を思い起こすときに捉えた意識状態は、旋律を聞いているときの意識状態と同じだというようには感じられる。しかし、それは、旋律を思い起こすときに捉えたあり方が、旋律を聴い

300 「形而上学入門」、p.1424.
301 「緒論」、p.1273、p1285.
302 同上、p.1277.
303 同上、p.1273.
304 『試論』、p.59、p.67、p.83、p.83-84、p.84-85.など)
305 「緒論」、p.1312.
306 同上、p.1273.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

ているときのあり方であるという、一種の推定のように思われる。「かろうじて区別される」だけの違いにせよ、二つの意識状態には、時間的な相違がある。わずかとは言え時間的に違った意識状態が同じであると言えるのは、何が保証するのか。「見られた対象からかろうじて区別される視覚」が、同じであると捉えているとしか言えない。直観が捉えるものが確実であるかという疑問はここから生じるように思われる。そして限りなく対象に近づこうとして、やはり「かろうじて区別される」のであれば、「接触で在り一致でさえある認識」であることには、難しさが残るように思われる。ベルクソンは「可能的なものと実在的なもの」で、次のように言っている。

「同様に、我々の性格の創造において、我々の創造的な能力について非常にわずかなことしか我々は知らない。それを知るためには、我々自身に戻り、哲学をし、自然の坂をさかのぼらなければならなかった。というのは、自然は行動を欲し、思索をほとんど考えなかったからである。自分自身に躍動(élan)を感じ、行動できることを確信することがもはや単に問題ではなく、思考がこの能力を把握し、この躍動をとらえることが問題となるやいなや、認識の通常の方向を逆転させねばならないかのようにその困難は大きくなる。」[307]

以上のことは、意識の直観的な把握の困難について語っていると思われる。また、「形而上学入門」でも、「自然の坂をさかのぼる」という同じ表現を用い、同様の認識の困難を語っている。

「もし形而上学が可能であるなら、形而上学は、思考の仕事の自然な坂をさかのぼるための、精神の拡大によって直ちに、研究するものの中に身を置くための、最後に、もはや概念から実在へではなく実在から概念へ行くための、努力でしかないということを忘れているということである。」[308]

b　持続

次に直観が捉える意識の持続についてである。「我々の言う直観は何よりも、内的な持続

[307] PR、p.1334.
[308] 「形而上学入門」、p.1415-6.

にかかわる。」[309]。持続について、第 1 章第 4 節においても引用したが、直観が明示的に語られる『思想と動くもの』の「緒論」においても、『試論』においてと同様、持続は、「メロディの不可分で壊すことのできない連続性であって、そこでは、過去が現在の中に入り、現在とともに、未分の(indivisé)全体(tout)を形作り、その全体は、各瞬間に付け加わってくるものであるにもかかわらず、むしろ付け加わってくるもののおかげで、未分(indivisé)で、不可分で(indivisible)さえあり続ける。」[310]として、旋律の例によって説明されている。この不可分な一つの全体は、時間的であることが決定的である。一つの全体をそのまま受け止めれば時間的な全体である。そこから、過去と現在を同時的な一瞬に並置するところへ行かないように留意が必要である。直観がつかまえるものは、あくまで時間的に不可分なものである。「持続は、不可分である。しかし、このことは少しも過去と現在が同時的であることを意味しない。」[311]

持続は、ここまで、旋律の例によって示され、不可分という表現によって表されてきた。これらのことによって、我々は持続を把握したということになるのだろうか。次にこのことを吟味することにしたい。

(4)　直観とその表現との関係

a　直観と言語

直観に関して、「介在されるものは何もない。その一つの面が空間であり、他の面が言語であるプリズムを通した屈折も少しもない」と考えられているから、その直観を言語で表現することは、直観による把握とは、別のものである。このことは、繰り返しベルクソンが言ってきていることである。まず、『試論』では、「数や空間と関係を持たない多数性の表象は」「常識の言語には翻訳できない」[312]、「内的な生活の継起的な諸相は、各々がその種において独自であり、言語と共通の尺度がない」[313]と言われる。あるいはまた、次のように言われる。「小説家は我々の感情を等質的時間の中に展開し、言葉によってその諸要素

309　「緒論」、p.1272.
310　同上、p.1312.
311　C412
312　『試論』、p.81.
313　同上、p.154.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

を表現するというそのことによって、彼の場合も我々に影しか提示しない。」[314]、「我々は諸観念を他のものに互いに連合させ、そしてこれらの諸観念が相互に浸透する代わりに並置されるというただそれだけのことによって、我々は心が感じていることを全体的に翻訳することに失敗する。思考は言語と共通尺度がないままに留まる。」[315]

また、「緒論」や「形而上学入門」でも、直観を言語によって表現できないことが繰り返し語られる。

「内的な経験は厳密に適切な言語をどこにも見出せない。」[316]

「直観は、知性がその空間的な置き換え、隠喩的な翻訳しか捉えないものを我々に与える。」[317]

「本来的にその人格であるところのもの、その本質を構成するものは、定義によって内的であるので、外からは認められることができないし、全く別のものに対して共通の尺度がないので記号によって表され得ない。」[318]

「我々の持続はイメージによって間接的に暗示される、しかし、もし概念という語にその固有の意味を残すなら、概念的な表象に、持続は閉じ込められ得ない。」[319]

「内的な生を諸イメージによって表現することはできないだろう。しかし、諸概念、つまり、抽象的なあるいは一般的なあるいは単純な諸観念によっては、なおさら、それを表現しないだろう。」[320]

「形而上学の主要な存在理由は、記号との断絶である」[321]

b　直観の表現

以上のように、直観をそのままに表現することはできないというのがベルクソンの基本的な立場に見える。しかし、伝えるための表現を全く否定しないのもベルクソンである。しかし、その前提には科学的な時間ではない時間が意識にはあると少なくとも自ら気付く

314 同上、p.88.
315 同上、p.109
316 「緒論」、p.1288.
317 同上、p.1312.
318 「形而上学入門」、p.1394.
319 同上、p.1402.
320 同上、p.1399.
321 同上、p.1426.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

ということがあるようである。

「自分自身に自分の存在を構成する持続の直観を与えることができないような人に、何ものも決してそれを与えることができないだろう。諸イメージと同様、諸概念もである。」[322]

そして、そのうえで、表現手段は、イメージと概念であると考えられている。

「我々は、概念とイメージの表現の二つの手段しか持たない。」[323]

イメージについては、まとめると、おおよそ、次のように考えられている。①「必然的に記号的で概念的な表現よりもずっと直観そのものに近づいている」[324]イメージがある、②「哲学の体系が圧縮されている」[325]イメージがある。③我々の持続は、間接的に諸イメージによって暗示されうる、④「どんなイメージも持続の直観に置き換わらないだろう。しかし、非常に違ったものの次元から借りてこられると、様々な多くのイメージは、それらの作用の集中によって、捉えるべき直観がある正確な点のうえに意識を導くことができるだろう。」[326]

概念については、次の通りである。①「直観は『諸説明』を与えるために」「必然的に記号的、概念的な表現に」「頼らなければならない」[327]、②「体系が展開されるのは概念においてである」[328]、③「観念はどんなに柔軟に作ったとしても、物と同じだけの柔軟さは持たないだろう」[329]、④「有機化の深い原因」を、「知性は単なる否定によっていつも特徴づけるだろう」[330]

以上で、直観を表す表現についてのベルクソンの考え方を整理することができた。次に、具体的に持続の直観は、どのようにして捉えられているか確認する。

---

322 同上、p.1399.
323 「哲学的直観」、p.1357.
324 同上、p.1347.
325 同上、p.1357.
326 「形而上学入門」、p.1399.
327 同上、p.1347.
328 同上、p.1357.
329 「クロード・ベルナールの哲学」、p.1438.
330 「緒論」、p.1273. なお、知性が否定によって対象を捉えるとは、例えば、「純粋な統一でも区別された多数性でもない」というように捉えることを指していると考えていいと思われる。

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

(5)　持続の直観の表現の吟味

a　直観による把握―イメージ

ベルクソンは非媒介的な意識において生じることについて書いている。「(意識の)諸状態を思い出すとき、自我は諸状態を現実の状態で一つの点に対する別の点のように並置しないで、ある旋律の音を融合した、言わば全体として我々が思い出すときに起こるように諸状態を有機化することで充分である。」[331]　ベルクソンが示す柱時計の音の例は、旋律の例とほとんど同じである。「もし、私自身に戻り、生じたばかりのことについて、そのとき注意深く自問するならば、初めの四つの音が私の耳を打ち、私の意識を動かしたということ、しかしそれらのおのおのによって生じた感覚は、並置される代りに、固有の外観を与えるように、一種の楽節を作るように互いの中に溶け合っていたことに気付く。」[332]そして、ベルクソンは「持続が、かくして非媒介的な(immédiat)な意識に現れる。そして、延長から引き出された象徴的な表象に場所を譲らない限り、その形式を保存する」[333]と述べる。

二つの場合を考える。一つは、一続きの旋律の中にある音として最後の一つの音を聞く場合、もう一つは、その旋律の前の部分の音はなく、その音だけを単独で聞く場合である。二つの場合は全く違っている。最初の場合、旋律の最後の音は記憶によって先行する諸音と一体となっている。「ある旋律の音を融合した言わば全体として我々は思い出す」。『物質と記憶』のベルクソンは、純粋知覚の場合なら、それぞれの音は「知覚が現れるところに」[334]、つまり対象において存在する、あるいは対象において音は知覚される[335]と言うのではあるけれど、ここでは記憶が入ってきている。旋律は「非媒介的な意識」に現れる。このとき「見られた対象からかろうじて区別される視覚」は、「接触であり一致でさえある認識」とは異なるということは、残り続けているように思われものの、記憶によって、意識の諸状態が一体となってあるということを直観が捉えていると言っていいと思われる。

そしてこのとき、意識状態の持続というあり方を捉えるのに、音によるイメージが役立っている。

331　『試論』、p.67.
332　同上、p.84.
333　同上、p.85.
334　『物質と記憶』、p.195.
335　「緒論」、p.1317.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

b　直観により把握されたものの言語表現

全体を形成するものとしての旋律の諸音は互いに溶け合っている、そして、そのことをベルクソンは、不可分である、あるいは相互浸透の状態にあると語る。しかしながら、不可分ないしは相互浸透という語に注目するとき、それは、直観による把握でも、そのイメージでもなく、言語表現でしかない。そのうえ、これらの表現は否定的な表現である[336]。不可分(indivisible)が分割可能(divisible)の否定であることは明らかである。相互浸透に関しては、ベルクソンの場合この表現は一つには物体の不可入性の否定に由来しているように思われる。というのは、『試論』の第 2 章の初めでベルクソンは物体のこの性質について論じており、不可入性は「物質についての性質というよりむしろ数の性質」[337]であると述べている。不可入性(impénétrabilité)ではない性質として相互浸透(pénétration mutuelle)は見られている可能性が考えられるのである。そして、その場合、語源的には相互浸透は不可入性の否定と考えられる。

さて、『創造的進化』でベルクソンは否定について論じている。この点については、第 1 章第 3 節(3)でも触れた。「否定的な判断とは、それゆえ肯定的な判断に別の肯定的な判断を置換する理由があることを示す判断である。第二の判断の性質はしかし特定されず、注意は第一の判断の内容にしか及んでいない。」[338]　不可分あるいは相互浸透という語に関しては、別の肯定的な判断は特定されていない。旋律が思い浮かべられている。しかしながら、不可分あるいは相互浸透という語に関して、置換されるべき判断とはどのようなものであるかを知るという問題は、残されている。この場合、可分であるか可分でないか、つまり不可分かの二種類、二値しか取らないと考えた場合でも、やはり不可分ということは、可分の否定を言うに留まるのだから、意識を非媒介的に捉えることにはならない。

持続を捉えるのにどこか難しさを感じるとしたら、否定的な表現であるというところから来ているかもしれない。そして、このことは、直観を表す言語に本質的なことであるかもしれない[339]。言語のように区別され、可分であるあり方とは、正反対の不可分なあり方

336 第 1 章第 4 節(3)b 参照
337 『試論』、p.60.
338 EC, p.739.
339 本章第 1 節(4)b においては、概念による、直観の表現に関して、知性が否定によって有機化の深い原因を特徴付けるとベルクソンが考えていることを、概念の特徴の④として見たところである。

をするのが直観で捉えられる対象のあり方だからである。可分なものとしての捉え方を常に否定することでしか、直観による把握は表せない。少なくとも、意識状態についての持続は、否定的な表現によってしか、語られないということが、事実としてある。

第 2 節　否定の力を持つ直観

持続に関して、直観による把握を言語で表す場合、否定的な表現であるということは、否定的な力を持つ直観が捉える内容の重要性を増している。否定の力を持つ直観は、対象についての知性的、言語的な把握を否定するから、結局、否定による言語的な表現によって対象を捉えることになる。言語的な把握では、否定の力を持つ直観、ないしは直観のこの面も、直観的な把握と同じ否定によっているということになる。

(1)　否定の力を持つ直観と言語

出発点の否定の力を持つ直観は、科学による、知性的な言語的な、あるいは記号的な把握の否定として対象を把握する。知性的、言語的な把握がここではそれ以上ないところまで突き詰められており、それが否定される。否定の力を持つ直観は、言語的な把握としては、その直観のあり方からして、最初から否定的にしか言語では把握できない。

ごく簡単に出発点の反省を振り返ると、漠然とした経験的な把握として、時間が「働く」ということが捉えられている。そして、その「働き」が「すべてが一挙に与えられることを妨げる」「働き」として捉えられる。しかし、このことは、結局、「すべてが一挙に与えられる」ことが、ここでの直観においては否定されているということである。この否定から、否定の力を持つ直観の対象に対する、言語による把握は生じてきている。時間は非決定であるということであり、そこから時間が不可分ということまで導かれることは既に、第 1 章第 4 節(2)でやや簡単に触れた。しかし、ここではやや詳しく見ることにする。

(2)　空間と区別のある多数性

空間に多数のものがあることと、区別されて多数のものがあることとの関係を考える。まず、空間に多数のものがあるとき、多数であるとは異なる多数のものであるということなので、その多数は区別されている。従って空間の中にある多数のものは、区別されている。区別され分けられているという意味で、可分である。他方、区別されて多数のものがあるとき、任意の二つのものを並置し、異なるものであることが確認できる。このように

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

して、区別のある多数のものは並置することができる。そのことは、同時に空間内にあることを意味する。従って、区別のある多数のもの、互いに可分であるものは、空間に位置していることになる。ベルクソンは、以上のことを次のように言っている。「空間だけが等質的であり、空間に位置するものは区別された多数性を構成する、そして、あらゆる区別された多数性は空間における展開によって得られる」[340]

空間に多数のものがあることと、区別されて多数のものがあることとは、一方が他方から互いに導くことのできる関係にある。両者は、必要十分の関係にあると言える。これについては、空間、区別、多数ということの言語的な意味を考えることから、両者の関係を得ることができた。

(3)　時間は空間ではないこと

出発点についての『試論』の記載によれば、①力学では、持続そのものを定義せず、二つの持続の等しさを定義する、②①の場合、もっぱら空間と諸同時性だけが問題になっていると述べられていた[341]。ここでは、意識における時間は空間ではないと、否定の力を持つ直観が把握していると見ることができる。また、同様の趣旨のことを他の箇所でも述べる。「この最後のイメージ(その諸部分が相互浸透することなく接し合っている連続した線あるいは鎖の形)が、もはや継起的ではなく同時的な、以後と以前(ママ)の知覚を含むこと、そして、継起でしかないのに唯一の同じ瞬間に収まる継起を想定することには、矛盾があることに注目しよう。」[342]（括弧内は引用者）　ここでは、継起である時間は、空間ではないと見られている。また、ベルクソンは次のように言っている。「同様に持続も継起でさえも、これらの語を意識が受け取る意味においては空間にはないということが結果する。外的な世界の継起的な諸状態のおのおのは単独で存在する。そして、それらの多数性は、まず諸状態を保存することができ、次に他方との関係で一方を外在化させることによってそれらを並置することのできる意識にとってしか実在性を持たない。もし、意識が諸状態を保存するなら、外的な世界の様々な状態が、感じ取られることなく一緒に有機化されて相互に浸透する意識の事実を生み、この関連そのものの効果によって過去を現在に結ぶから

340　同上、p.80.
341　第 1 章第 1 節(3)(b)参照。
342　『試論』、p.68.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

である。」[343]ここの前半で、持続や継起は空間にはないとやはり言われている。後半では、空間にはない継起や持続がどのようなものかが説明されている。

PR においても、すべてが一挙に与えられている科学的な予測における時間が、意識において、「映画のフィルムの上に並置された展開前のイメージ」のようになっているとして否定されるとき、予測における時間は空間として考えられており、それを否定の力を持つ直観が、意識の時間ではないと否定している。

(4)　不可分であること

否定の力を持つ直観から得られる(3)によって、意識における時間は空間ではないので、そのことを(2)に適用すると、意識の時間では、区別のある多数ものがあることが否定され、不可分ということ、時間は不可分であるということが求められる。

つまり、否定の力を持つ直観によって、意識の時間は不可分であることが得られたと言える。このことは、直観が捉える持続が不可分であるという捉え方を、直観とは別の否定の力を持つ直観あるいは直観の持つ否定の側面によって確認することができたということである。直観の把握する内容を、第 1 節(2)項で述べた別の道によって確認することができたということになる。否定の力を持つ直観が、直接的な直観を支持している。本稿で考えている確実性を否定の力を持つ直観が支えている。

ただし、否定の力を持つ直観が、直接的な直観を支えるのは、言語的な把握の側面に限られるのも事実である。本章第 1 節の末尾でも若干触れたところであるが、直観による直接的な把握そのものに関しては、否定の力を持つ直観も別の道とは言えない。何度も述べてきたように、否定の力を持つ直観には、経験に関して漠然とした把握しかないからである。もっとも、第 1 節で触れたベルクソンが示す例のように科学的な探求が意識における時間のあり方について何らかの寄与をすることは今後ありうるかもしれない[344]。

---

343 同上

344　あくまで筆者の一つの連想程度のこと過ぎないものの、不可分な持続に関係するかも知れない事実を、茂木が述べている。「伝達する時には当然、有限の物理的時間が経過するが、心理的な時間の中では、その経過は無視されて、心理的瞬間の中につぶされてしまう。つまり、私たちは物理的時間を超えて、一瞬のうちにクオリアを感じとるということである。」（茂木健一郎『脳内現象　〈私〉はいかに創られるか』日本放送出版協会、2004 年、p.115-6）時間がつぶれるということが、不可分ということへの連想を誘う。もっとも、ここでの事実は『物質と記憶』の知覚の収縮の考え方により近いかもしれない。

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

(5)　科学的な時間の一種の排除

また、次のような仕方でも、否定の力を持つ直観は、直接的な直観を支えている。その直観は経験を直接的に把握するものの、しかしながら、それは、他の観点を拒否する直接的な否定の力を持たない。これに対し、否定の力を持つ直観は、否定に置き換わるべき経験に関して漠然としてしかその経験を把握しない。しかし、否定の力を持っている。二値的な論理を前提にし、排中律によって、時間に関して一つは不可分なもの、もう一つは可分なものの二つしかないとすれば、否定の力を持つ直観によって、意識において可分なものが否定されることによって、不可分な時間しか残らないことになる。このようにして、否定の力を持つ直観は､意識において科学的な時間を退けることができる力を持っている。この意味においても、直接的な直観を否定の力を持つ直観が支えている。

(6)　直観における論理的な証明の欠如

ベルクソンは「その形而上学に対して概念の操作で満足するよう求めること」[345]をしない。ベルクソンはほかのところで同様に哲学においては「純粋な推論」と「忍耐強い観察」[346]の間で選ばなければならないと書いている。この場合、直観は、直観によって把握される真理を証明することは出来ない｡そして否定の力を持つ直観もそうすることは出来ない。否定の力を持つ直観ができるのは、証明ではない。というのは、直観は「概念の操作」に由来するのではないからである。ただ、この直観は否定の力によって意識の知性的な把握を否定することが出来る。しかし、それでも否定の力を持つ直観は知性がその主張を証明できないと論理的には言うことはできない。そのため、概念を用いることによってその望むことを証明する余地は知性に常に残されている。

(7)　ベルクソンにおける直観の確実性

ここでの結論は次のようなものである。直観は持続を不可分なものとして、旋律を思い浮かべるときのように非媒介的に把握する。その直観を否定の力を持つ直観が、意識における科学的な時間を否定することによって強く支えている。他方で、否定の力を持つ直観は不可分なものとして時間を把握する別の道である、こう直観を見るとき、直接的な直観

345　「緒論」、p.1288.
346　「魂と身体」、p.860.

とは別のものとして否定の力を持つ直観、あるいは、直観の否定の力を持つ側面の位置は大きい。

しかしながら、直観は、非媒介的であるにしろ、否定的であるにしろ、概念的な把握ではない。その正当性を論理的に証明することも出来ないし、他の観点を論理的に排除することも出来ない。たとえベルクソンが、知性は意識が決定論に従うことを証明できることなどないと確信していても、そうなのである。従って、知性が意識における決定論を証明することが出来ない限りにおいて、直観が与える真理を信頼するということになる。ベルクソンにおける直観の確実性とは、このようなものと考えられる。ベルクソンは次のように書いている。「時間は直接的(immédiatement)に与えられている。それで充分である。時間の非存在とその邪悪が我々に対して証明されるまで、予測できない新しさの実際の湧出があることを我々は単純に確認する。」[347]

[347] PR, p.1344.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

第 4 章　「可能的なもの」の錯覚とベルクソンの出発点

ベルクソンは、「可能的なものと実在的なもの」(PR) [348]で、虚無、無秩序、「可能的なもの」の錯覚について論じている。そして、最初のものは、最後のものの中に含まれていると付け加えている[349]。ところで、ベルクソンは主要な四著作においては、「可能的なもの」の錯覚を明示的にあるいは直接的に扱っていない。しかしながら、「可能的なもの」の錯覚に関わる 1920 年の講演以降では、「緒論」(1922 年)、PR(1930 年)、『道徳と宗教の二源泉』(1932 年)の各著作で常に「可能的なもの」の錯覚に言及している。「可能的なもの」の錯覚の意味をより明らかにし、また、ベルクソンの出発点の考察との関連を明らかにするため、本章では次の五つの問題を扱う。

1　「可能的なもの」の錯覚と、第 1 章で扱ったベルクソンの出発点の考察との関係はどのようなものか。

2　ベルクソンの著作において、「可能的なもの」の観念はどのように発展してきているか。

3　否定の力を持つ直観と錯覚という捉え方とはどのような関係にあるか。

4　否定の力を持つ直観の展開あるいは「可能的なもの」の発展に注目するとき、ベルクソンの哲学はどのようなものと考えられるか。

5　「可能的なもの」の錯覚に至る発展を追うこと、また、出発点と直観や自由との関係を考察することは、どのようにして回顧的錯覚ではないと言えるか。

348　「可能的なものと実在的なもの」(PR), p.1336.V・ジャンケレヴィッチは、その『アンリ・ベルクソン』の序論において、「回顧性の錯覚の重要性を示」し、「可能的なものと実在的なもの」を、「ベルクソニスムの理解のために肝要である」(Jankélévitch,V., *Henri Bergson*,P.U.F., 1959、p.2.)としている。また、ジル・ドゥルーズは、『ベルクソンの哲学』において、にせの概念としての「可能的なもの」に触れている(Deleuze,G., *Le bergsonisme*, P.U.F., 1966, p.100.)。アルノー・フランソワは、ベルクソン、ショーペンハウエル、ニーチェにおいて用いられる重要な概念の一つとして可能的なものについて論じている。そして、「可能的なもの」批判と「実在」の概念との関係に注目している。(「可能的なものと虚無の二重の批判から実在の概念の新たな決定が結果する…」)(François, Arnaud, *Bergson, Schopenhauer, Nietzsche Volonté et réalité*, , P.U.F., 2008, p.271.)檜垣は、「可能的なものと実在的なもの」を持続の充溢性との関連で扱っている。(檜垣立哉『ベルクソンの哲学』勁草書房、2000 年、p.76-78.)PR が論じられることは、これまでそれほど多くはなかったと思われるが、最近の本で、PR に触れる論考もある。(Cherniavsky, Axel, *Exprimer l'esprit　Temps et langage chez Bergson*, L'Harmattan, 2009, Tellir, Dimitri, *La métaphysique bergsonienne de l'intériorité　se créer ou se perdre*, L'Harmattan, 2012.)

349　「可能的なものと実在的なもの」(PR), p.1336.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

ベルクソンが、「可能的なもの」の錯覚を論じるのは、実在そのものの新しさ、新しいものを創造する自由そしてそこから生れる喜びや力を明らかにするためである。従って、「可能的なもの」の錯覚そのものを論じる本章に、これらの面は一体的なものである。しかし、叙述の都合上、新しいものを創造する自由やその喜びについては、第 2 章の自由で論じた。その結果、本章では、もっぱら『可能的なもの』の錯覚について論じているが、「可能的なもの」との関連で実在と行為における新しいものの創造を述べた第 2 章第 6 節、7 節は、本章における光の面として、本章にも属するものである。

第 1 節　可能的なもの」の錯覚とベルクソンの出発点の考察との関係

「可能的なもの」とは、PR では「観念の形での先在」[350]を意味する。「存在の獲得によって実在化されるという」「可能的なもの」の観念とは、「それゆえ純粋な錯覚である」[351]。つまり、「可能性が実在性に先在する(先立って存在する、préexister)」[352]と考えることが錯覚である。

ベルクソンは、PR で「可能的なもの」の錯覚に関連して、四つの点について書いている。①第一に、今述べたように、「可能的なもの」の錯覚とは「可能性は実在性に先在する」と考えることである。しかし、「実在的なものが可能になるのであって、可能的なものが実在的になるのではない」[353]。つまり、「可能的なもの」が実在的になると考えることは錯覚であり、③とも関連するが、「実在的なもの」から「可能的なもの」が作られるというのである。②「可能的なもの」の消極的な意味として、「実現において乗り越えがたい障害」[354]がないという意味がある。これは錯覚としての「可能的なもの」ではない。「この特殊な意味において、不可能ではないものを可能であると呼ぶことが出来る。」[355]。③「『可能的なもの』とは、実在的なものがいったん生じると過去にそのイメージを投げ返す、そういう精神の行為を伴った実在的なものでしかない。」[356]この精神の行為とは、回顧や遡及

350 PR、p.1342.
351 同上、p.1341.
352 同上、p.1342.
353 同上、p.1344.
354 同上、p.1341.
355 同上
356 同上、p.1339.

ということである。こういう「精神の戯れ」あるいは「思考の操作」[357]が「余分なもの」(du plus)としてあるのが錯覚である。④「可能的なもの」の錯覚は、宇宙や自由な行為の「根源的な新しさ」[358]を見誤らせる。ベルクソンは、「可能的なもの」の観念を退けることによって、自由や、「新しいもの」[359]、「予測できない新しさの創造」[360]を得ることが出来ると考えている。

さて、出発点の否定の力を持つ直観は、第 1 章で述べたとおり、法則に基づく予測において用いられ科学的な時間、つまりすべてが一挙に与えられる科学的な時間を意識においては否定する。このとき、各瞬間の状態が一挙に与えられている時間のあり方は「可能的なものと実在的なもの」で言われる「可能的なもの」の一つの観念と見ることができる。この時間の各瞬間は、映画のフィルムにおいてのようにその実現に先立って先在していることになるからである。すべてが一挙に与えられている、予測における科学的な時間を、意識における時間もそのような時間であると考えるとき、「可能的なもの」の錯覚に当たると考えられる。ベルクソンは、「可能的なもの」は否定されるべきであるという、否定の力を持つ直観から出発したと言える。

第 2 節　「可能的なもの」の観念の発展

今述べたように、出発点の否定の力を持つ直観に、「可能的なもの」とほぼ同様な観念を見ることができる。しかしながら、すべてが一挙に与えられているということに対して、ベルクソンはまだ、そのことを「可能的なもの」とは呼ばない。

『試論』では、「対立する二つの行為あるいは意志の同等の可能性」[361]からの選択ということに関して、ベルクソンは、同等の可能性という観念は、この場合、それぞれの可能性が記号となり、空間化されており、意識の進展を捉えていないと考えている。我々は、この同等の可能性とは、「可能的なもの」の錯覚であると考えることができる。というのは、PR では、「非決定ということを可能的なもののあいだにおける競争、自由というものを可能的なもののあいだにおける選択」と考える捉え方を、「可能的なもの」の錯覚として批判しているからである。そして、このような競争や選択は『試論』の「対立する二つの行為

357 同上、p.1342.
358 同上、p.1336, 1339.
359 同上、p.1343.
360 同上、p.1344.
361 『試論』、p.115.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

あるいは意志の同等の可能性」の中からの選択と同じと考えられるので、『試論』の「同等の可能性」は「可能的なもの」の錯覚に当たると考えられるのである。

『創造的進化』において、ベルクソンが否定的な判断を扱うとき、実在の観念と対照的に可能的なものの観念についてベルクソンは論じている。「ものの非－存在を提出する諸判断は、それゆえ、実在的であれ想像上であれ、ある人がある可能的なものが実在化されていると誤って信じていた場合に、可能的なものと現実的なもの(actuel)の間において(すなわち二種類の存在(*existence*)(斜体字は原文)、一方は考えられたもの、他方は確認されたものの間において) 対照を定式化する判断である。」[362]　ここでは、可能的なものは確認される存在との対比において、考えられた存在と見なされている。引用した部分の直前には、もっとはっきりと可能的なものと実在との対比をベルクソンは書いている。「いま、〇〇はないという二語(n'est と pas の二語、二語で否定を表す。)を付け加えるとき、もっと先へ進み可能的な(possible)対象を実在的な(réel)対象として立てるとすれば、間違っているということ、そして私が話している可能的なもの(possible)が、現実の実在(réalité)から、その実在と両立しがたいと見なされて排除されているということ以外の何を私は理解できるだろうか。」(括弧内は引用者)[363]　ここには、可能的なもの(possible)と実在的なもの(réel)との、あるいは可能的なものと実在性との対比がある。この種の対比は、まさしく、「可能的なもの(possible)と実在的なもの(réel)」(PR)においてなされている対比と同じである。

『創造的進化』では、また、PR の「可能的なもの」の錯覚においてと同じ、観念の先在についての考え方を同様に見ることができる。その観念とは、ここでは虚無の観念である。「かくして、実在が空虚を埋めるという観念、あるいは虚無は、すべての欠在と考えられて、事実上ではないにしても権利上はあらゆるものに先在するという観念が我々の中に植えつけられる。」[364]　虚無の観念は、存在に先在するということ、それが観念であるという意味において、「可能的なもの」の観念に類似しているように思われる。ベルクソンは次のように続ける。「無(Rien)の観念は、そこにおいてあらゆるものの廃棄という観念を見ると人が主張するなら、それ自身を破壊する観念であり単なる語に帰着するということ、そして、反対に真に観念であるとすれば、そこに全体(Tout) の観念においてと同じだけの

362　『創造的進化』、p.740.
363　同上
364　同上、p.747.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

素材を見つけるということを示すことによって、我々は、この錯覚を一掃しようと試みたのである。」[365]　あらゆるものを次から次へと否定することで、そのたびに別のものが置き換わっているのに、否定だけに注意を向けるのが無の観念であるので、無の観念にはあらゆるものが実はあるとベルクソンは指摘する。それで、いま引用した後半に注目するなら、虚無の観念は全体の観念と同じだけの内容を持つということができる。その場合、あらゆるものの観念がその実在に先在すると考えていることになる。こう考えれば、虚無の観念は、「可能的なもの」の定義に一致する。このとき、虚無の観念は「可能的なものと実在的なもの」で言われる「可能的なもの」の観念の一つであると言うことができるだろう。

「予見と新しさ」と題された 1920 年の講演[366]で、ベルクソンは初めて「可能的なもの」が錯覚であると述べる。「可能的なものがその実在化の以前にある」[367]という観念を錯覚と呼んでいる。ベルクソンは、生命を持つ存在や意識を持つ存在、そして宇宙の全体に関して、根源的な新しさと予測不可能性を主張する。PR で記述される「可能的なもの」の錯覚に関する四つの点は、既にこの講演で述べられている。

『思想と動くもの』の「緒論」で初めて「可能的なもの」の錯覚が記載される。「緒論」

---

[365] 同上

[366]1920 年 9 月に、ベルクソンがオックスフォードの哲学会で行なった講演は、「予見と新しさ」と題されていた。1921 年 1 月の《Revue de métaphysique et de morale》に、ベルクソン自身によるその講演の要約が掲載されている。同じ内容が、*Mélange* にもある。1959 年 7 月の《La Revue philosophique》には、ベルクソンによる手書きの 6 枚の要約の 3 枚目の複写が載せられている。

ベルクソンが、実際、講演で語ったことについては、第 2 章の最後の注でも触れたが、ジャック・シュヴァリエの「ベルクソンとの対話」からうかがうことが出来る(「ベルクソンとの対話」の、1920 年 9 月 24 日の項他に記載)。シュヴァリエは、その講演を直接聴き、語られた内容の概要を書き留めているからである。それと、講演の要約を比較すると、ベルクソンは、雑誌に載った要約には、載せていないことも語っているようである。(第 2 章第 7 節(3)参照)ただ、 1920 年の講演における「可能的なもの」の意味するところについては、講演要約でほぼ十分に把握できるように思われる。

この講演で注目すべきは、雑誌に載せた要約の中でベルクソン自身がこの講演の主題について書いている次の言葉である。「ベルクソン氏が、宇宙の各瞬間の根本的な新しさをわれわれが見るのを妨げる、われわれの知性に自然な、ある錯覚について強調することにより、この演説の主題としようとするのは、予見不可能性ということについてである。」（M1323）ベルクソンが何より言いたいのは、「宇宙の各瞬間の根本的な新しさをわれわれが見る」ということである。それは、一言で言えば「予見不可能性」ということである。しかし、それを見ることを、「われわれの知性に自然な、ある錯覚」、「可能的なもの」の錯覚が妨げているというのである。

[367] M1324

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

は書かれたのは、1922 年であるが、出版されるのは 1934 年である。「可能的なもの」の錯覚に関係する四つの点がここでも記載されている。①実在化に対して先在していると考えられていること、②可能的なものの消極的意味としての、可能的なものの別の側面、③「回顧的な運動」[368]、「回顧の論理」[369]、「回顧の論理は『可能的なもの』の形式のもとで、現在において実在として現れるものを過去に押しやる。」[370]、④「根源的な新しさ」[371]、「根源的な予測不可能性」[372]そして「絶えず新しさが湧出し、進展が創造的である持続」[373]の強調。

1930 年にスウエーデンの雑誌に発表され、1934 年に仏語で出版された PR における「可能的なもの」の錯覚については、第 1 節で述べた。

『道徳と宗教の二源泉』においても、ベルクソンはとくに第 1 章の正義の観念に関し、「可能的なもの」の錯覚について批判している。「絶対的な正義の増大する近似として、相対的な正義のますます広くなる形式が定義されるとき、我々は道徳において再び見つけるのは、これ(「可能的なもの」の錯覚)である。」[374](括弧内は引用者) 相対的正義とは、「その商業的な起源に忠実な」[375]正義、すなわち実際の状況において、「平等や釣り合いの諸考慮」[376]を持ち込む正義を意味している。これに対して、絶対的な正義とは、「侵すことの出来ない権利と、あらゆる価値に対する人格の不可約性との無条件的な肯定」[377]を指している。ベルクソンは、「可能的なもの」の錯覚に関し、「実在的なものにおける『可能的なもの』の先在の形で、ものそのものの中にこの回顧的な予見を置く」[378]と書いている。ベルクソンは続ける。「いったんこれ(絶対的な正義)が提出されると、それら(相対的な諸正義)は、絶対的な正義に至る、我々によって回顧的に引かれた道に沿ったそれだけの停止と見なされうる。」[379]絶対的な正義は「可能的なもの」として先在しておらず、「ある瞬間に、

368 「緒論」、p.1263
369 同上、p.1267.
370 同上
371 同上、p.1263.
372 同上、p.1267.
373 同上、p.1268.
374 『道徳と宗教の二源泉』、p.1036.
375 同上、p.1035.
376 同上、p.1034.
377 同上、p.1035.
378 同上、 p.1036.
379 同上

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

突然の跳躍」[380]がある。ベルクソンは「義務の起源についてと同時に社会的進化の性格についてひどく誤ることのないよう」[381]二つの正義を区別することが重要であると考えている。「可能的なもの」を錯覚と見なす考えは、道徳についての重要な見方となっている。

「可能的なもの」を否定する考え方は、出発点から最後の著作にまで一貫している。この考え方は根本的であり、重要な役割を占めていると思われる。

錯覚としての「可能的なもの」を一つの到達としてみるとき、各著作では、その「可能的なもの」への発展を見ることができる。出発点では、単にすべてが一挙に与えられるという予測における時間が否定されるだけである。あとから振り返れば、これは「可能的なもの」の一つと見ることができるが、否定されるべきものを一つにまとめる「可能的なもの」の観念は、出発点だから、当然のことながらなかった。『試論』では、可能性が選択に関し問題にされる。しかし、可能性という語そのものは語の普通の用法を出ていない。ただ、自由の問題が錯覚から生れたと考えられている。第 1 章で引用したその箇所を再度引けば次の通りである。「自由の問題は、それゆえ誤解から生れた。エレア派の詭弁が古代人に対する関係は、その問題が近代人に対する関係と同じである。その問題は、これらの詭弁と同じように、継起と同時性、持続と延長、質と量を混同する錯覚の中にその起源を持っている。」[382]このうち特に継起と同時性の混同に関しては、すべてが一挙に与えられる時間は、意識の時間ではないとする出発点の反省から来ていると見ることができる。つまり、『試論』では、出発点の反省が錯覚を捉えるところに至っている。『創造的進化』では、第 1 章で、すべてが一挙に与えられていると考えるのは、機械論だけではなく目的論も同じだとされ[383]、すべてが一挙に与えられていると考える対象が広がっている。そして第 4 章の否定の検討のところでは、可能的なものが実在的なものと対比されるという、「可能的なもの」が錯覚とされる PR と同じ捉え方が出てきている。そのうえ、虚無については、「可能的なもの」の錯覚の重要な側面である、実在化に先立って先在するという捉え方も出てきている。ここまでで、「可能的なもの」の錯覚の要素はほぼ出揃ったと見られる。1920 年の講演は、その錯覚を「可能的なもの」の錯覚と名づける。そこでは、同時に「可能的なもの」の錯覚が持っている問題も明らかにされている。つまり「可能的なもの」の

380 同上
381 同上、p.1043.
382 『試論』、p.156.
383 第 1 章第 5 節(3)参照。

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

錯覚は、自由や実在の新しさを見失わせることが問題なのである。「可能的なもの」の錯覚とは、錯覚だと言うことによって自由や実在の新しさを改めて知らせるものである。

可能的なものは、①すべてが一挙に与えられているということから、②そこに目的論も含まれ、③実在と対比され、存在を持たない、考えられたものとしての可能的なものになり、④それが錯覚としての「可能的なもの」となるという発展を見て取ることが出来る。

そして、出発点の否定の力を持つ直観そのものも、実在化に先立って観念として「可能的なもの」があり、それが存在を与えられるという「可能的なもの」に対して、そこでは時間が「働」いていないとして、錯覚と捉える捉え方にまで発展してきていると見ることができる。

第 3 節　否定の力を持つ直観と錯覚という捉え方との関係

(1)　錯覚

錯覚のごく普通の意味は、ある正しいものに関して、誤って別のものを正しいと見ることである。

正しいものと誤ったものの二つが錯覚と言う場合には必要である。正しいものは既に捉えられているか、かなり明確な場合が考えられている。そして、人に対して誤りだと正したり教えたりする。

(2)　出発点における否定の力を持つ直観と錯覚との類似と相違

一方、否定の力を持つ直観には、否定される内容と、それに置き換えるべき経験の二つがある。誤りと正しいと思われるものの二つが含まれるのは錯覚の判断と同じである。ただ、否定の力を持つ直観では、置き換えられるべき正しいものが、まだ漠然としてしか捉えられていない。自分なり人なりに教えることができるのは否定すべきであるということだけである。錯覚の場合では、置き換えるべき判断がいつでも提示でき、それで誤っていると人に画然と正すことができる。直観が関係する錯覚の場合において、否定の力を持つ直観と錯覚とする判断との違いはここにある。

正しいものを直接的に捉えるのは直接的な直観である。それで、直接的把握が直観によってなされたあとには、否定の力を持つ直観は、否定される内容に加えて、それに置き換わるべき内容が直観によって明確化されていると言える。このように直観で補われることを考えると、その否定の力を持つ直観は、錯覚という捉え方と同じになる。ベルクソンの

著作で、錯覚という捉え方がしばしば見られるのは、こういう二つの直観あるいは直観の二つの面によると思われる。

直観についてはあるいは直観の直接的な把握の面に関しては、直接的な視覚として、否定という捉え方まではその直観の中に直接的には含まれないと、ここでは見ている。錯覚という見方に必要な、肯定と否定の二つの内容が直接的な直観にはない。一方の肯定だけがある。それで、錯覚と直観を考える場合、直接的な直観より否定の力を持つ直観の否定と肯定があり、人を諭す教育的な面があるという点で、錯覚は否定の力を持つ直観とより類似している。『試論』では、持続の直観によって意識が直接に捉えられている。今述べてきた、否定の力を持つ直観の否定内容に置き換わるべきものが掴まえられている。それで、自由の問題は錯覚だとはっきり言えるのであろう。直観の関係する錯覚は、直観的認識とともに、否定的な直観がそこにはあると考えられる。そして、錯覚という判断の枠組みは、否定の力を持つ直観に由来していると思われる。

(3)　出発点の否定の力を持つ直観と、ベルクソンにおける諸錯覚

出発点の反省について、我々は否定の力を持つ直観であると考えた(第 1 章第 3 節)。科学的な時間を意識では否定するというとき、知性的な把握を別の知性的な把握が否定しているのではないからである。そして、ここでは、否定に置き換わる経験についての、直観による直接的な把握はない。それで、既に触れたように継起と同時性の混同がある、継起を同時性として錯覚しているとベルクソンが言うのは、持続を直観によって捉えた『試論』に置いてということになる。

「可能的なもの」の錯覚では、自由や実在の新しさが否定の力を持つ直観に加えて、直接的な直観によっても捉えられている。肯定的に捉えられるのは新しさである。しかし、「可能的なもの」を否定するところには、否定の力を持つ直観が働いていると考えられる。第一に、「可能的なもの」とは、すべてが一挙に与えられているというあり方が「可能的なもの」全般に広げられたものであるということである。そして、もともとのすべてが一挙に与えられることを否定的に捉えたのが否定の直観的な力であったからである。次に、「可能的なもの」という考え方自体が、「可能的なもの」は実在に先立って与えられていると考えるのだから時間の「働き」を考慮しない考え方であり、直ちにそのことから、「可能的なもの」は否定される。そしてその否定を行うのは否定の力を持つ直観になる。従って、「可能的なもの」の錯覚の場合にも、錯覚と見る判断には、否定の力を持つ直観の力が働いて

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

いると見られる。

虚無の錯覚の場合は、経験に直接与えられているかどうかということから、虚無は問題にされる。その意味では、直接的な把握、あるいは直観がより重要かもかもしれない。虚無を否定し、実在的なものを肯定する否定の力を持つ直観がここに働いているだろうか。ベルクソンはここでは、虚無の観念が自己破壊的な観念で、その観念自体が成り立たないと批判する。この批判の仕方自体はむしろ知性的な批判である。しかし、他方でもしこの観念に意味があるとすれば、逆に虚無の観念であるにもかかわらず、そこにはすべてのものの観念が含まれているともベルクソンは言っていた。「反対に真に観念であるとすれば、そこに全体(Tout) の観念においてと同じだけの素材を見つけるということを示すことによって、我々は、この錯覚を一掃しようと試みたのである。」第 2 節で触れたように、その場合、あらゆるものの観念が既に与えられていることになる。そのとき、すべてが一挙に与えられていることを出発点の否定の力を持つ直観は否定するはずであり、虚無の錯覚の背景に否定の力を持つ直観を見ることができる[384]。

『創造的進化』の映画的方法の錯覚については、出発点の反省は映画的方法に対する反省と言えると述べた(第 1 章第 5 節(3)b)。すべてが映画のフィルムのように予め与えられていることを否定する反省が、出発点における反省である。連続しているものを瞬間的な眺めで切り取る映画的方法は、各瞬間を区別されたものとして捉え、そのことは空間的に捉えることだから、時間として捉えているのではない。すべてが一挙に与えられるというその捉え方を否定するのは、出発点における否定の力を持つ直観であると言える。

以上から、ベルクソンが扱う諸錯覚は、否定の力を持つ直観がその基本的な捉え方を与えるものと言える。諸錯覚は、否定の力を持つ直観にその捉え方自体の起源を持つということができる。ベルクソンの哲学的な問題の重要な捉え方である、錯覚という捉え方の起源が出発点の否定の力を持つ直観にあるとすれば、出発点のこの直観は、無視し得ない重要な役割を果していると言える。

384 また、PR での絶対的無秩序の錯覚についても、同様に考えることができる。このとき、二つもしくはそれ以上の秩序の除去が考えられており、あらゆる秩序を次から次へと否定することで、そのたびに別のものが置き換わっているのに、否定だけに注意を向けるのが絶対的無秩序の観念であるので、そこには、あらゆる秩序の観念が与えられていることになる。すべてが一挙に観念として与えられていて、それに存在が与えられるという捉え方については、出発点で働いたと同じ否定の力を持つ直観が錯覚として否定すると言える。

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

第 4 節　「可能的なもの」の発展と否定の力を持つ直観の展開

(1)　到達点としての「可能的なもの」の錯覚

出発点における否定の力を持つ直観において、意識に関して問題視される、すべてが一挙に与えられるということが、錯覚としての「可能的なもの」にまで至る展開を第 2 節で見た。また、否定の力を持つ直観が様々な錯覚という捉え方の基にあることを第 3 節で見た。結局、第 2 節、第 3 節を合わせれば、出発点の反省、同時性と継起を混同して生れる自由の問題、映画的手法は、「可能的なもの」の錯覚と見ることができる。それぞれ何が「可能的なもの」に当たるかは、第 2 節で述べた。その「可能的なもの」には、時間が「働」らいていないことによって、否定の力を持つ直観が、錯覚だと捉えるのである。

出発点の否定の力を持つ直観は、直観を促すとともに、その否定の力を持つ直観も、可能的なものの内容が拡大し、あるいは否定の力を持つ直観として錯覚の新たな概念を生み、ベルクソンの著作とともに展開してきている。このように見るとき、「可能的なもの」の錯覚は、単なる一つの錯覚というよりも、出発点の反省の一つの到達点と思われる。時系列からもそうであるし、その含む内容からもそう考えられる。

出発点の否定の力を持つ直観は、すべてが一挙に与えられるということを問題視した。結局、それは、不可分なものを可分なものとして捉える知性的、言語的な介在を問題とすることであった。そしてこの知性的、言語的な介在とは、出発点における否定の力を持つ直観の展開を見るとき、一つには「可能的なもの」を考えることに帰着するように思われる。そして、「可能的なもの」を通さずに見るときに現れる実在とは、新しさということに帰着する。「可能的なもの」は既に在るもののことを意味する。そのことが誤りだとされる。実在とは、既に在るということがないもの、新しいものと考えられることになる。出発点における否定の力を持つ直観は、「可能的なもの」の錯覚にまで発展してきたとは、以上のようなことである。こう見るとき、この直観の一つの流れをつかむことが出来る。「可能的なもの」と錯覚の発展の流れである。否定の力を持つ直観が大きな役割を占める線がベルクソンの哲学にはある。そのことを本稿により示そうと試みたのである。

(2)　否定の力を持つ直観からみたベルクソンの哲学の見取り図

ベルクソンの哲学を認識の観点から見ると、ベルクソンに独自な認識の方法は直観である。そして、いずれにしてもそこに至る取っ掛かりは、科学的な、あるいは学問的な事実を集め検討することである。そこから、否定あるいは禁止によって真理を得る否定の力を

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

持つ直観にベルクソンは捉えられる。ベルクソンは、出発点における反省を、とくに出発点として特記する。

我々は、この否定の力を持つ直観は、ベルクソンの思考において、一つの契機ないしは転換点であると考える。否定の力を持つ直観は、否定の強い力が我々自身に働くからである。我々にはその強い力のゆえに無視しがたいと考えられた。直接的な直観における共感し、対象と一体化する捉え方とは、主たる対象の捉え方においてかなりの違いがある。否定の力を持つ直観に関しても、否定する内容ではなく、それに置き換わる漠然とした経験の把握は共感的であろう。その意味で、どちらも直観である。しかし、前者と後者では、否定、禁止と共感との大きな違いがある。また、ベルクソンにおいて、否定の力を持つ直観の進展を見るとき、一つの契機として考えるに足る内容を持つと思われるに至った。そのことを本論考では示そうとしたのである。我々は、直観に至るまでにまず否定の力を持つ直観があると考える。この否定的な直観が促し、直接的に把握する直観に至る。これが直観的な認識の確立であろう。

そして、最初の契機である否定の力を持つ直観は、その否定する対象を、①機械論の否定から目的論の否定に広げ、②「可能的なもの」という、存在以前にある、考えられた観念全般にまで広げている。③否定の力を持つ直観が否定と、漠然としたものに過ぎないとしても肯定の両者を持つという特徴が錯覚という捉え方につながり、明示的には特に自由の問題、映画的方法、「可能的なもの」を錯覚とする展開をしている。つまり、①②③を合わせれば、「可能的なもの」の錯覚に至る、否定の力を持つ直観と「働く」時間の発展の流れがあるということである。④否定の力を持つ直観にある漠たる経験としての「働く」時間も、意識から生命進化、宇宙全体、神的な時間にまで広がっていると見られる。⑤また、否定対象が「可能的なもの」に広がることによってそれに伴い、経験が把握する対象の特質が、自由な行為や実在の新しさに帰着する展開をしていると考える。また、本稿では主として否定の力を持つ直観を考察の対象としているが、直観について言えば、そこにおける共感的な把握は、生命進化に対するものから、神を直観する神秘家への共感へと発展している。すなわち、「私の意識の躍動に類似していると想定された、有機化された存在の生命的な推力」[385]に対する共感から、「神こそが、それ(神秘家の魂)によって、そしてそこにおいて働く」[386]と言われる神秘家に対する共感と展開している。認識方法としての直観に

385 「緒論」、p.1291.
386 『道徳と宗教の二源泉』(DS)、p.1172.

は、否定と共感の二つの契機[387]が考えられ、そのそれぞれの直観の対象が拡大している。

否定の力を持つ直観、否定に置き換わるべき漠たる経験としての「働く」時間に本論考では注目してきた。そのときベルクソンの哲学の見取り図は以上のようなものになると考えられる。

第 5 節　回顧の錯覚という問題

(1)　「可能的なもの」の観念に関する回顧の錯覚という問題

ベルクソンは、現在に生じたものを過去に投げ入れ、「可能的なもの」の観念として先在すると考えることは「可能的なもの」の錯覚であり、「根源的な新しさ」[388]を見失わせると考えている。この錯覚は『道徳と宗教の二源泉』において、「道徳の起源についてと同時に社会的進化の性格についてひどく誤らせる」[389]と考えられていることは、既に本章第 2 節で述べた。他方、ベルクソンは「この論理(回顧の論理)を放棄することもそれに反抗することも確かに問題ではない。その論理を拡大し、柔軟にし、新しさがたえず湧出し、進展が創造的である持続にそれを適用しなければならない」[390]とも書いている。事実、ベルクソン自身が、静的な宗教と動的な宗教の関係について遡及的に検討していることを認めている。ベルクソンは、「静的な宗教に取って代わる前に、第一のもの(静的な宗教)の中に場所を占めるための第二のもの(動的な宗教)の試みを考慮している。真実を言えば、遡及的にそれらの試みを試みに変えるのは我々である。」[391]と述べる。ベルクソンは、こういった試みの有益性を評価している。「これらの試みは、それでもやはり間隔に目印をつけるのに、動的な宗教が置かれる不可分な行為を要素に分析するのに、そして同時に、到達しなかった躍動の明らかに共通の方向によってどうして決定的な突然の跳躍が偶然的な何ものも持たなかったか示すのに役立つだろう。」[392]　次の文章もまた、回顧を否定しない。「い

---

387 ベルクソンは否定の力を持つ直観に類似した禁止について、また直接的な直観に属する道徳の創造について書いている。「それ(人間の権利のような正義)は禁止によってしか、ある一定の瞬間において正確にはっきりと表されない。しかし、それは、積極的なところにおいて、その各々が、人格の、したがって人類のより完全な実現である継起的な創造によって前進する。」(DS、p.1037.)恐らく、この二つの契機は、それぞれ否定の力を持つ直観と直接的な直観による把握に対応する。

388 *PR*, p.1336, 1339.

389 『道徳と宗教の二源泉』(DS)、p.1043.

390 「緒論」、p.1268.

391 DS、p.1158-1159.

392 同上、p.1159.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

ったん現れた神秘主義の光のもとで、ディオニソス的な酔いが回顧的に、神秘的なある状態を告げるものとして見なされうるかを知ることが問題である。」[393]ベルクソンは、「突然現れた火山が長く続く地震を過去において解明するように、ある正確な瞬間に置ける出現が、その準備に我々を回顧的に立ち合わせる」[394]と書く。

我々は、第 2 節で回顧的に「可能的なもの」の観念を見たことは、この点を指摘されるとき、否定できない。しかし、回顧的に見ることで問題なのは、自由な行為や宇宙の全体に関する根源的な新しさを誤解することである。回顧そのものが問題ではないのは、ベルクソンが上述しているとおりである。「可能的なもの」の完全な観念がベルクソンの出発点にあり、その観念が時間の経過に従い実現されていると考えるというようなことがなければ、問題はない。実際、ベルクソンの思考は各著作で新しい何かとともに発展してきていると我々は考えたのである。

(2) 本論考の全体に関わる回顧の問題

我々が、本論考でベルクソンの思考を遡及的な観点から検討していると批判されることも考えられる。というのは、のちになって現れる自由や直観や「可能的なもの」の錯覚を出発点の反省との関係で 我々は扱ってきたからである。しかしながら、「可能的なもの」の錯覚の場合にしたのと同じ仕方で、我々はこの批判に答えることが出来る。出発点の反省と比較して、自由や直観や「可能的なもの」の錯覚は、新しいものを持っていることそもそもの最初から、我々は認めている。

我々が行ったのはベルクソンが出発点と呼ぶ反省を、初めて知性的なものでない認識方法に至った一つの重要な契機と捉えることである。そして、それを否定の力を持つ直観ないしは、直観の一つの側面として考えた。そしてその直観が、否定的な面を持つことが、直接的な直観を促すことになったと考えた。直接的な直観は、対象を直観によって直接的に掴まえるという意味で、直観という認識方法の確立であると考えられる。否定の力を持つ直観は、この点に関しては漠然とした把握でしかない。しかし、初めて知性的な把握ではない把握にいたっている点では、大きな意味を持つ。そのうえ、否定の力を持つ直観が直接的な直観を促している。その意味では、否定の力を持つ直観こそが躍動としては大きいと見ることもできる。我々は、否定の力を持つ直観とそこで得られる「働く」時間とい

393 同上、p.1160.
394 同上、p.1168.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

う認識は、考慮に値する契機であることを示そうとしたのである。そして、その直観と時間が「働く」という認識がベルクソンの哲学において、自由や直観と緊密な関係を持ち、「可能的なもの」の錯覚に至る一つの展開をしていることを示そうとしたのである。

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

結論

第 1 節　出発点の反省の重要性

ベルクソンの出発点の反省は、強い印象を与えられる。本論考は、それが何によるのかを解明しようとしたものとも言える。出発点の反省の持つ重要性は次のようにまとめられる。

第一に、この反省には、直観に内在する否定の力が働いているということである。ベルクソンは、知性的認識とは異なるベルクソン独自の認識方法にこの出発点で達している。

第二に、この直観に内在する否定の力は、非媒介的な直観を促す力も持つ。そして、否定の力を持つ直観は、持続の直観の確実性をある面で支える。

第三に、ここには、存在は働くものである、時間は存在するものとして「働く」という経験に対する捉え方がある。これは、ベルクソンの原初的な経験の把握の少なくともひとつであると言える。時間的な始まりにあるだけでなく、ベルクソンの思考の根底にある。

第四に、この反省にある非決定としての「働く」時間は、決定論の否定の一つの根拠であり、非決定、創造の乗り物としての「働く」時間は、自由の新しいものの創造という内容を定めている。

第五に、この反省が、「可能的なもの」を錯覚とする捉え方に発展することで、自由な行為や宇宙が、新しいものの創造であることが、より明確に主張されている。

第六に、出発点の反省は、ベルクソンの哲学の方法も示す。ベルクソンは、科学的、学問的な事実の検討ののち、否定の力を持つ直観を求める。そして、その否定の力は、非媒介的な直観を促す。そのことによって独自な哲学が生れる。新しい経験の分野を検討するたびに、この方法が用いられていると見られる。(本論考では、この点については、一部に触れたに過ぎない。)

この出発点は、ベルクソン哲学のもっとも内奥にあるものを我々に感じ取らせる。ここから実際にベルクソンに独自なものが生れる。直観に内在する否定の力と、「働く」時間がベルクソンの思考の核にあって、思考を展開させる。ベルクソン哲学の根源にあるものに、ここで触れているように思われる。

第 2 節　自由な行為

ベルクソンは、直観を説明するために著作の例を「緒論」において記載している。我々

は､文章を書く例によって､結論の一つとして自由な行為について描写することを試みる。

どのようにして、創造的なあるものを書くことが出来るか。どのようにして、自分自身であると同時に独自で新しい何かを創造することが出来るか。

ベルクソン的な自由とは、独自で新しいあるものを生むことができるということを意味する。この場合、そのことによって、我々は我々自身でありうる。(第 2 章)

書くためには、創造的な衝動あるいは否定の力をつかまなければならない。これは直観的な把握である。そのためには、関係する資料や事実を集め、検討しなければならない。資料の中や先行する人々の考えの中に受け入れがたいものがあるとき、否定の力を持つ直観が不同意を否定の力によって我々に伝えてくれる。書くための出発点の一つとは、この否定の力をつかむことである。(第 1 章) 否定の力を持つ直観によって掴まえた否定的な衝動に従って、文章を書くことが出来る。

あるいは、何かについての書きたいという衝動あるいは情動を自分の中に探しに行かなければならない。これも直観による。否定の力を持つ直観は向こうからやってくる。我々は否定の力につかまえられる。しかし、この直観は探さなければならないから、つかむのが難しい。しかし、創造的な衝動を掴むことなしには、書くことは出来ない。書くことの訓練においてもっとも重要なのは、この種の衝動に触れることであり、この衝動とはどのようなものであり、どのようにして見つけ得るかを体得することである。訓練による以外の方法はない。書かれたものを読むことにより、共感によって、その書き手の書きたいという衝動をつかまえようとする訓練がそれに役立つだろう。しかしながら、もしこの衝動を掴むことができれば、書くことができ、しかも自由でありうる。自分自身であり、独自な新しい何かを生み出すことが出来る。この衝動は、自我そのものである。自我の全体は一つの全体であり、新しく独自である。自我の奥深くに位置するこの衝動も同様に新しく独自である。

もしこの衝動からずれるとき、否定の力を持つ直観が働き、書かれたものを修正する。否定の力を持つ直観はこのようにして衝動を捉える直観を支える。(第 3 章)この衝動に従うとき、我々は新しい何かを常に感じ、世界の各瞬間の根源的な新しさを見る。「可能的なもの」の錯覚に陥ることなど出来ない。(第 4 章)

第 3 節　結論

本節では、本稿全体の結論をまとめる。なお、序論で述べた、四つの問題については各

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

章で検討してきた。結論の第 1 節は、序論の第四の問題に関し、第 2 節は第一の問題に関係して述べたが、それらも含め、本節で本稿の結論をまとめる。

ベルクソンはある考察を出発点として提示している。ベルクソンにとって、出発点は特記しなければならない何かである。しかしながらこの考察に関し、出発点であること以上の名前を特に与えることはない。この出発点を吟味することによって、我々は、出発点の反省とは、否定的な力を持つ直観によって行われる反省であり、そこには「働く」時間という経験の把握があることを明らかにした。既にこの出発点において、ベルクソンは、知性的な認識方法ではなく、後年、「哲学的直観」で語る否定の力を持つ直観に達している。また、『創造的進化』や「可能的なものと実在的なもの」において、自らの哲学と他の哲学との決定的な違いだとする、時間が「働く」、時間は効果を持つという時間の捉え方が出発点において既になされている。こういう出発点の反省は、それ自体、ベルクソンの哲学にとって重要である(第 1 章、結論第 1 節)。

しかし、それだけに留まらず、「働く」時間は、法則的な決定論を否定する一つの根拠であり、つまり自由へ道を開く根拠であり、新しさの創造というベルクソンの自由の一つの側面を生み出している(第 2 章)。そして、第 2 章では、否定の力を持つ直観とともに、共感的で対象と一体化するような直接的な直観も含めて、ベルクソンの自由の持つ二つの側面、自由の根拠、自我の衝動の発展による行為の決定(結論第 2 節)、選択の自由の否定などについて、ベルクソン独特の自由と直観の関係について考察した。

さて、否定の力を持つ直観は、言語的な把握に関しては、持続の直観における、持続が不可分であるということと同じ認識に達し、さらに、時間を可分なものとして捉える科学的な時間を、直接的に否定することによって、不可分である持続の直観を支えている(第 3 章)。

さらに「可能的なもの」の発展、諸錯覚を追うことによって、出発点の反省からの一つの重要な流れがあると思われる。出発点における反省は、『試論』における、自由かどうかが問題とされること自体が錯覚だとする批判から、『創造的進化』における、虚無、無秩序、動くものを瞬間的な眺めで切り取る映画的方法をそれぞれ錯覚とする批判を経て、「可能的なもの」を錯覚とする批判に至っている。「可能的なもの」を、時間が「働」くという把握によって、否定の力を持つ直観が錯覚だとしているのである。出発点の反省は、哲学的な難問を錯覚だと指摘することにより取り去ろうとするベルクソンの哲学的問題の解決の方法の起源にあると言える。

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

つまり、晩年に「可能的なもの」の錯覚に至る、(「可能的なもの」への発展と錯覚というとらえ方に関しての)出発点の反省からの流れを見ることができる。(第 4 章)。

ベルクソンの出発点の反省は、それ自体、重要な内容を持つともに、自由や直観と深くかかわり、その反省が晩年にまで展開、発展していると言える。これが、本稿で述べようとしたことである。ベルクソンにおける共感的な、対象と一体化する直観と、その直観による把握される持続の発展の流れをより確実なものとして把握するためにも、この出発点に発する流れは重要と思われる。ベルクソンは W.ジェイムズに宛てた手紙で、次のように言っている。「しかし、主観的には、私はエコール・ノルマルの卒業に続く、1881 年から 1883 年の二年間の間に私の考え方に生じた変化に大きな重要性を帰属させることを差し控えることは出来ない。」[395]その変化とは、出発点における反省であり、ここでは「一連の諸反省の出発点」[396]と言われている。「私は『試論』に、私の科学的時間に関する諸考察を要約した。(中略)その諸考察は私の哲学的な方向を決め、それ以来私がすることのできたすべての反省がその諸考察に結びついている。」[397]こういうベルクソン自身による叙述が、我々が出発点を一つの見逃せない段階に達したと考えることを裏書する。この手紙は、1908 年の時点のものだが、最晩年に至るまでのベルクソンの反省の全体、ベルクソンの哲学に対して、出発点における諸考察の持つ意味は変わらないと言えるように思われる。

もし、この出発点の否定の力を持つ直観により注目すれば、ベルクソンの哲学を生む根源的なところに触れることができると我々には思われる。

(参考)

最後にこの論考の結論を便宜のために箇条書きにしてまとめる。

1　時間―出発点―

[意識の時間]

・ベルクソンの哲学的反省の出発点は、諸資料を吟味し関連付けることにより、すべてが一挙に与えられる時間とは別の時間が意識における時間だという否定の力を持つ直観であ

395 1908 年 5 月の W. ジェイムズ宛の手紙、M765
396 同上、M766
397 同上

る。
・意識における時間は、「すべてが一挙に与えられるのを妨げる」時間であり、「働く」時間であると考えられている。

[自由]
・出発点の諸反省は、すべてが一挙に与えられる法則における科学的時間の意識における否定から、時間の存在を手がかりとして、否定の内容を展開することによって、時間が非決定であることを導く。法則的な決定論が否定されることは、自由の確保にとって決定的である。
・「働く」時間が意識や生命における時間であると認めれば、意識が新しいものを創造する自由をもち、世界に新しさが生れる。

[存在の「働き」]
・出発点の反省における前提は、時間は「働く」、存在するものは「働く」、作用するという捉え方である。この根底的な捉え方自体は、多くの人が容認すると思われる。もう一つの想定は、時間の中でただ少しずつ予見されたものを実現するそういう時間は、時間として「働か」ないと考える捉え方である。実在のすべては一挙に与えられており、時間は実在に何も付け加えない。その意味で、実在の全体に対しての「働き」を時間は持たないと言える。これも容認する人は数多いだろう。
・しかし、だからといって、小出しに実現することが時間の「働き」、意味だと考えることまでは排除できない。ここが否定の力を持つ直観による自由の論拠の問題である。決定論者の居場所はそこになる。

[持続と「働く」時間]
・持続は直接的な直観により、「働く」時間は、否定の力を持つ直観により把握される。後者は、既存の知見を、漠然としながらも決定的な経験が否定する内容を持つ。持続の直観が直接的に把握するのは持続そのものであり、直接的には既存の知見の否定ではない。
・否定の力を持つ直観が捉える、時間の非決定という「働き」は、否定する内容と時間が存在するという漠然とした経験から捉えられている。これに対して、持続の直観は、意識諸状態が時間的に不可分ないしは相互浸透していることが直接的に認識されるという違い

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

がある。

・時間の非決定という、時間の「働き」と、不可分であるという持続の認識とは、言語的な規定に関しては、互いに一方から他方が導かれる関係にある。否定の力を持つ直観における漠然とした経験については、直観が把握する持続と同じ経験と言える。

2　自由

[自由の根拠]

・自由は直観で把握される。すなわち、意識が不可分であるという直観と、意識の時間では、すべてが一挙に与えられていないという否定の力を持つ直観が、自由の根拠であるということである。

[決定論の否定]

・一つの全体的条件が一つの結果を与え、そのことは、結果が条件によって必然的に決定されていることだと考える決定論がある。ここでの必然は、同じ条件が繰り返すとき、別の結果ではなく同じ結果が生じると考えられている。意識は不可分であり、同じ条件は二度と起こらない。したがって、この意味の必然的決定はなく、つまりこの決定論は否定される。あるいは、時間の「働き」から非決定を導き出すことによっても否定しうる。

・また、結果に決定があるということは単に決定があるということに過ぎない。結果があることと、それが予め必然的に決まっていることとは違う。結果が決まっていることからは、それが必然的な決定であることは演繹できない。それが必然的であるというには、決定のあり方のどういう性質が必然と言えるのか示す必要がある。もしそのとき、物理的な決定や連合説的な決定を想定するなら、それらの決定論は、持続が不可分であることから時間が「働く」ことから否定しうる。

[自由における決定]

・全体的状況を一つの条件と考えるとき、自由な行為において、一つの結果があり、その意味で自由においても、行為の決定はある。しかし、その決定が独特であることを認めなければならない。

・それは必然ではなく、偶然でもない。原初的衝動も行為も時間の中にあり相互に影響しあいながら絶えず新しくなりつつ、自我の原初的衝動ができるだけ実現するように行為が

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

行われる。自我の原初的衝動がよく現れれば現れるほど、言わば原初的衝動による必然に近づくと言える。従って偶然ではない。しかし、原初的衝動は絶えず新しくなっており、予めある原初的衝動が単に実現するという必然ではない。また、原初的衝動自身が繰り返さないのだから、繰り返しを前提とする法則的な必然はここでは、そもそもありえない。

[自由の二つの側面]

・ベルクソンの自由は、意識が自分自身を現し、しかも新たなもの独自なものを創造する自由である。自由がそう考えられるのは、それぞれ、持続の直観と否定の力を持つ直観がそう捉えることによっている。

[選択と自由]

・ベルクソンの自由は、時間の中における自由であり、内的衝動の発展が自らを現し、新たなものの創造として行為を決定するのがベルクソンの自由である。

・選択の能力は、同一の瞬間において幾つもの行動から選ぶことが出来るということであり、空間的である。自我全体が時間の中で発展しつつ現れるベルクソンに独自の自由ではない。

3　直観

[確実性の問題]

・直観とは別の道が直観を支えるとき、直観はより確実になると考える。この意味で直観の確実性を、本稿では考える。

[否定の力を持つ直観が直観を支える]

・直観は、否定の力を持つ直観ないしは直観のその側面により支えられ、より確実性を与えられている。直観は概念的な真理ではないため、直観の認識の確実性を証明できず、直観に反するものを証明によって排除することも出来ない。直観の確実性は、直観を否定する証明がなされない限りにおいて、直観がその確実性を確認し続けるというあり方をする。

4　「可能的なもの」の錯覚

[出発点の反省]

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

・ベルクソンの反省の出発点において否定の直観的な力の対象となった、すべてが一挙に与えられる時間とは、意識においては錯覚としての「可能的なもの」に当たる。

[新しさ]

・「可能的なもの」とは、観念として既に在ると考えられているということを意味する。錯覚であるとは、そのことが誤りだということである。実在とは、既に在るということがないもの、新しいものである。「可能的なもの」が錯覚であるとは、世界には新しさがあり、意識には新しさを創造する自由があることを意味する。

[否定の力を持つ直観の到着点]

・反省の出発点において、すべてが一挙に与えられることを否定した直観的経験とは、世界には新しさをもたらし、意識には新しさを創造する自由を与え、喜びと力を与える時間の経験であることが明らかにされる。これは、否定の力を持つ直観をたどってみるときの、ベルクソンの哲学の一つの結論と言える。

・出発点の否定の力を持つ直観は、すべてが一挙に与えられるということを問題視した。結局、それは知性的、言語的な介在を問題とすることであった。そしてこの知性的、言語的な介在とは、出発点におけるこの直観の展開を見るとき、「可能的なもの」を考えることに帰着するように思われる。そして、「可能的なもの」を通さずに見るときに現れる実在とは、新しさということに帰着する。出発点における否定の力を持つ直観が、「可能的なもの」の錯覚にまで発展してきたとは、以上のようなことである。否定の力を持つ直観が大きな役割を占める線がベルクソンの哲学にはある。

[「可能的なもの」の観念の発展]

・出発点の反省とは「可能的なもの」の一つ、すなわちすべてが一挙に与えられているという観念を否定している。

・「可能的なもの」を否定するという考え方は、出発点の反省から『道徳と宗教の二源泉』に至るまでベルクソンの思考において一貫している。この考え方は、根本的なものであり、不可欠な役割を果たしている。

[否定の力を持つ直観と錯覚という捉え方との関係]

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

・正しいものを直接的に捉えるのが直観である。それで、直接的把握が直観によってなされたあとには、否定の力を持つ直観は、否定される内容に加えて、それに置き換わるべき内容が直観によって明確化されていると言える。しかし、直観には、直接的に誤ったものを否定する内容は含まれない。錯覚に関わるのは、むしろ否定の力を持つ直観である。直観で補われることを考えると、ベルクソンが扱う諸錯覚は、否定の力を持つ直観の枠組みに起源を持つということができる。

[「可能的なもの」の錯覚への展開]

・「可能的なもの」の発展、諸錯覚を追うことによって、出発点の反省からの一つの重要な流れがあることが分かる。出発点における反省は、『試論』における、自由かどうかが問題とされること自体が錯覚だとする批判から、『創造的進化』における、虚無、無秩序、動くものを瞬間的な眺めで切り取る映画的方法をそれぞれ錯覚とする批判を経て、「可能的なもの」を錯覚とする批判に至っている。

[否定の力を持つ直観からみたベルクソンの哲学の見取り図]

・否定の力を持つ直観、およびその否定の対象に置き換わるべき漠たる対象としての「働く」時間に本論考では注目してきた。

・ベルクソンにおいて、この否定の力を持つ直観の進展を見るとき、一つの契機ないしは転換点として考えるに足る内容を持つと思われる。その否定の力を持つ直観が促し、直接的に把握する直観に至る。

・そして、この転換点であるこの否定の力を持つ直観は、その否定する対象を、①機械論の否定から目的論の否定に広げ、②「可能的なもの」という、存在以前にある、考えられた観念全般にまで広げている。③否定の力を持つ直観にある漠たる経験としての「働く」時間も、意識から生命進化、宇宙全体、神的な時間にまで広がっていると見られる。④また、否定対象が「可能的なもの」に広がることによってそれに伴い、経験が把握する対象の特質が、自由な行為や実在の新しさに帰着する展開をしていると考えられる。

[「可能的なもの」の観念に関する回顧の錯覚という問題]

・我々は、回顧的に「可能的なもの」の観念の発展を見たことは、この点を指摘されるとき、否定できない。しかし、ベルクソンは、『道徳と宗教の二源泉』では、回顧の試みの有

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

益性をむしろ評価している。回顧的に見ることで問題なのは、自由な行為や宇宙の全体に関する根源的な新しさを誤解することである。回顧そのものが問題ではないのは、ベルクソンも記載するとおりである。

[本論考の全体における回顧の問題]

・我々が、本論考でベルクソンの思考を遡及的な観点から検討していると批判されることも考えられる。しかしながら、「可能的なもの」の観念の発展に関して行ったのと同じ仕方で、我々はこの批判に答えることが出来る。

・我々が行ったのは、ある意味で、ベルクソンの思考の発展において最初の契機に印をつけることである。通常はむしろその後に来る直接的な直観に関心が集中する。我々はその前にある否定の力を持つ直観に注目して来た。直接的な直観は、対象を直観によって直接的につかまえたという点で誰もが認める大きな意味がある。否定の力を持つ直観は、この点に関しては漠然とした把握でしかない。しかし、初めて知性的な把握ではない把握にいたっているという点では、大きな意味を持つ。そのうえ、否定の力を持つ直観が直接的な直観を促している。我々は、こういう否定の力を持つ直観とそれにより捉えられた「働く」時間は、少なくとも考慮に値する契機であることを本稿で示そうとしたのである。そして、その直観と時間が「働く」という認識がベルクソンの哲学において、自由や直観と緊密な関係を持ち、「可能的なもの」の錯覚に至る一つの展開をしていることを示そうとしたのである。

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

文献表

1)

Bergson, Henri, *Œuvres*, Édition du centenaire, P.U.F., 1959.

————, *Mélange*, P.U.F., 1972.

————,*Correspondances*, P.U.F., 2002.

————, *Essai sur les données immédiates de la conscience,* P.U.F., 2007(Présentation, par Frédéric Worms, Dossier Critique, par Arnaud Bouaniche)

————, *Matière et mémoire,* P.U.F., 2007(Présentation, par Frédéric Worms, Dossier Critique, par Camille Riquier)

————,*L'évolution créatrice,* P.U.F., 2007(Présentation, par Frédéric Worms, Dossier Critique, par Arnaud François)

————, *Les deux sources de la morale et de la religion*, P.U.F., 2008(Présentation, par Frédéric Worms, Dossier Critique, par Frédéric Keck et Ghislain Watelot)

————, *La pensée et le mouvant*, P.U.F., 2009(Présentation, par Frédéric Worms, Dossier Critique, par Arnaud Bouaniche et les autres personnes)

Hude, Henri(éd), *Bergson cours　I* ,P.U.F., 1990.

————,　*Bergson cours　II*,P.U.F., 1992.

————,　*Bergson cours　III*,P.U.F., 1995.

————,　*Bergson cours　IV* ,P.U.F., 2000.

Ragghianti, Renzo(éd), *Leçons Clermontoises I* , L'Harmattan, 2003.

————, *Leçons Clermontoises II*, L'Harmattan, 2006.

Matton, Sylvain(éd) et al., *Cours de psychologie de 1892-1893 au lycée Hemri-IV,* SÉHA, 2008.

2)

Anscombe, G.E.M., *Intention*, Harvard University Press, 2000.

Bardy, Jean et al., *Bergson*：*naissance d'une philosophie*, P.U.F., 1990.

Cherniavsky, Axel, *Exprimer l'esprit　Temps et langage chez Bergson*, L'Harmattan, 2009.

Čapek, J., « Les apories de liberté bergsonienne » in *Annales bergsoniennes II*,P.U.F.,

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

2004.

Chédin, J., « Possibilité et liberté » in *Bergson : naissance d'une philosophie*, P.U.F., 1990.

Chevalier, Jacques, *Bergson*, Libraire Plon ,1941.

————,*Entretiens avec Bergson*, Libraire Plon ,1959.

Davidson, Donald, « Mental event », in *Essays on Actions and Events*, Oxford University Press, 1980.

————, *Truth, Language, and History*, Oxford University Press, 2005.

Deleuze, G., *Le bergsonisme*, P.U.F., 1966.

———, « La conception de la différence chez Bergson », in *Les études bergsoniennes vol.IV*, P.U.F., 1956.

Desaymard, Joseph, *H.Bergson à Clermont-Ferrand*, Bellet, 1910.

————, *La pensée de Henri Bergson*, Mercure de France, 1912.

Désesquelles, Anne-Claire, *La philosophie de Bergson Repères*, Vrin, 2011.

Du Bos, Charles, *Journal 1920 - 1925*, Buchet/Chastel, 2003.

François, Arnaud, *Bergson, Schopenhauer, Nietzsche Volonté et réalité*, P.U.F., 2008.

François, Arnaud(éd.), *L'Évolution créatrice de Bergson*, Vrin, 2010.

Goddard, Jean-Christophe, « Introduction, le moi et la liberté » in *Fichte. Le moi et la liberté*, P.U.F, 2000.

———, *Mysticisme et folie. Essai sur la simplicité*, Desclée de Brouwer, 2002.

———, « Exception mystique et santé moyenne de l'esprit dans *Les Deux Sources de la morale et de la religion* », in *Annales bergsoniennes I* ,P.U.F., 2002.

Gouhier, H., *Bergson dans l'histoire de la pensée occidentale*, Vrin, 1989.

———, *Trois essais sur Etienne Gilson: Bergson, la philosophie chrétienne, l'art*, Vrin, 1993.

————, *Bergson et le Christ des Évangiles*, Vrin, 1999.

Hirai, Yasushi, « Résumé : Imprévisibilité comme liberté chez Bergson » exposé au symposium international en 2007.

Honderich, Ted, *How free are you?*, Oxford University Press, 2002.

Hude, Henri, *Bergson I* ., Éditions universitaire, 1989.

————, *Bergson Ⅱ*., Éditions universitaire, 1989.

Husson, Léon., « Les aspects méconnus de la liberté bergsonienne », in *Les études bergsoniennes vol.IV*, P.U.F., 1956.

————, *L'intellectualisme de Bergson*, P.U.F., 1947.

Jankélévitch,V., *Henri Bergson*, P.U.F., 1959.

Lapoujade, David, *Puissance du temps versions de Bergson*, Les Éditions De Minuit, 2010.

Lenoir, R., « Le Meeting d'Oxford », in *La Revue de métaphysique et de morale*, ⅩⅩⅧ, Ⅰ, janvier 1921, p.99-103.

———, « Henri Bergson au Meeting d'Oxford », in *La Revue philosophique*, juillet 1959., p.339-343.

Libet, Benjamin, *Mind Time*, Harvard University Press, 2004.

McTaggart, J. Ellis, « The Unreality of Time », *Mind*, vol.17, no., 1908, p.45-74.

Merleau-Ponty, Maurice, « Bergson se faisant », in *Signe*, Gallimard, 2001.

————, *Éloge de la philosophie*, Gallimard, 1953.

————, *L'union de l'âme et du corps chez Malebranche, Biran et Bergson*, Vrin, 1968.

Miquel, Paul-Antonie, *Bergson ou l'imagination métaphysique*, Kimé, 2007.

Moore, A.W., *The Infinite*, Routledge, 1990.

Mosse-Bastide, Rose-Marie, *Bergson éducateur*, P.U.F., 1955.

Philonenko, Alexis, *Bergson*, Les éditions de Cerf, 1994.

Riquier, Camille, Archéologie de Bergson, P.U.F., 2009.

Searle, John R, *Mind. A brief introduction*, Oxford University Press, 2004.

———, *Minds, Brains and Science. The 1984 Reith Lectures*, British Broadcasting Corporation, 1984.

Soulez, Philippe et Worms, Frédéric, *Bergson*, P.U.F., 2002.

Stancati, Claudia, *Henri Bergson : esprit et langage*, Mardaga, 2001.

Tellier, Dimitri, *La métaphysique bergsonienne de l'intériorité, se créer ou se perdre,* L'Harmattan, 2012.

Verdeau, Patricia, *La personnalité au centre de la pensée bergsonienne*, Éditions Peeters Louvain-Paris, 2011.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

Vieillard-Baron, Jean-Louis, « Les paradoxes du moi dans l'Essai de Bergson », in *Bergson：naissance d'une philosophie*, P.U.F., 1990.

————, *Bergson. La durée et la nature*, P.U.F., 2004.

Worms, Frédéric, « La conception bergsonienne du temps » in Schnell, Alexander (éd.), *Le temps*, Vrin, 2007.

Worms, Frédéric et Riquier, Camille, *Lire Bergson*, P.U.F.,2011.

———, *Bergson ou les deux sens de la vie*, P.U.F., 2004.

———(éd), *Annales bergsoniennes I* , P.U.F., 2002.

———(éd), *Annales bergsoniennes II*, P.U.F., 2004.

———(éd)., *Annales bergsoniennesIII*, P.U.F., 2007.

A. Fagot-Largeault et Worms, Frédéric (éd)., *Annales bergsonienns IV*, P.U.F., 2008.

———(éd)., *Annales bergsoniennes V*, P.U.F., 2012.

3) 邦文文献―ベルクソンに直接関わるもの

安孫子 信他, 『思想 ベルクソン生誕 150 年』No1028, 岩波書店, 2009 年。

赤間啓之 「ラン・ウィズ・ア・《ベルクソン》あるいは『可能的なもの』と『潜在的なもの』」『現代思想』9 月臨時増刊号、青土社、1994 年。

石井敏夫 『ベルクソンの記憶力理論』理想社、2001 年。

———— 『ベルクソン化の極北』理想社、2001 年。

伊藤淑子 「『自我』の観点から見たベルクソン哲学について」『哲学』No55、法政大学出版局、2004 年、p.130-141.

内山智子 「ベルクソンの『試論』と『物質と記憶』における自由」『現象学年報』20、日本現象学会、2004 年、p.175-178.

————「ベルクソンにおける選択と偶然の問題について」『人間存在論』第 11 号、京都大学「人間存在論」刊行会、2005 年、p.129-137.

————「ベルクソンにおける自由の二側面の統合」『倫理学研究』第 36 号、関西倫理学会編、2006 年、p.71-82.

大小田重夫 「メルロ＝ポンティにおける自由の問題」『哲学』No.48、法政大学出版局、1997 年、p.307-316.

————「経験論哲学とベルクソン―因果性の概念を中心に」『倫理学年報』No.49、日本

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

倫理学会、2000 年、p.211-225.
笠木丈　「自由の不確定な志向性―「動的図式」と前期ベルクソン自由論」『宗教学研究室紀要』vol 5、2008 年、p.68-89.
久米博、中田光雄、我孫子信編　『ベルクソン読本』法政大学出版局、2006 年。
小出泰士　「ベルクソン哲学における『自由』について」『国士舘哲学』第 6 号、国士舘大学哲学会、2002 年、p.24-40.
小関彩子　「世界のうちにおける人間存在の自由―フランス現象学から見たベルクソン―」『理想』第 667 号、理想社、2001 年、p.92-103.
杉山直樹　「未来を思考すること―ベルクソンの自由論から」『アルケー』No1、関西哲学会、1993 年、p.72-81.
――――『ベルクソン　聴診する経験論』創文社、2006 年、p.72-81.
永野拓也　『ベルクソンにおける知性的認識と実在性』北樹出版、2011 年
中村弓子　『心身の合一』東心堂、2009 年。
檜垣立哉　『瞬間と永遠　ジル・ドゥルーズの時間論　』岩波書店、2010 年
――――　『ベルクソンの哲学』勁草書房、2000 年。
平井　靖　「自由にとって時間とは何か」『西日本哲学年報』第 19 号、2011 年 10 月
――――　「ベルクソンにおける様相の時点依存性について」第 29 回ベルクソン研究会、2011 年 9 月
平野　一比古「ベルクソンにおける時間の一側面について―時間が「働く」ということおよび自由―」『メタフュシカ』第４１号、大阪大学大学院文学研究科哲学講座、２０１０年１２月。
藤田英隆　「ベルクソン『試論』における空間の問題」『法政大学大学院　紀要』第 63 号、2009, p. 9−16.
福永俊哉　「『二源泉』に見られる自由の議論について」『倫理学研究』第 25 号、関西倫理学会、1995 年、p.50-57.
本田裕志　『ベルクソン哲学における空間・延長・物質』晃洋書房、2009 年。
前田英樹　「ベルクソン哲学の喜び―第四章　直観が〈正確〉であること―」『思想』No1028、岩波書店、2009 年、p.157-172.
三宅岳史　「ベルクソンにおける二つの多数性とその起源」『アルケー』No12、関西哲学会、2004 年、p.100-110.

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012

――――　「ベルクソン『試論』における力の概念」『哲学論叢』第 31 号、2004 年 9 月
――――　未公刊、博士論文『ベルクソン哲学の生成における実証科学の役割』
村山達也　「ベルクソン『直接与件』における問題と実在」『哲学』No60、日本哲学会、2009 年、p.279-293.
守永直幹　『未知なるものへの生成　ベルクソン生命哲学』春秋社、2006 年。
山田秀敏　「ベルクソンにおける因果性」『哲学』No. 46、法政大学出版局、1995 年、p.181-190.

4)　その他の文献

a　時間

入不二基義　『時間は実在するか』講談社、2002 年。
――――――「時間と矛盾―マクタガートの『矛盾』を書き換える―」『思想』10 月号 No.966、岩波書店、2004 年、p.22-42.
――――――「時間の推移と記述の固定―マクタガートの『矛盾』に対する第一の書き換え―」『科学哲学』37-2、日本科学哲学会、2004 年、p.1-15
植村恒一郎　『時間の本性』勁草書房、2002 年。
大森正蔵他　「特集<時間論>の現在」『現代思想』1993 年 3 月号、青土社。
中島義道　『時間論』筑摩書房、2002 年。
中村秀吉　『パラドックス』中公新書、1972 年
――――　『時間のパラドックス』中公新書、1980 年。
中山康雄　『時間論の構築』勁草書房、2003 年。
滝浦静雄　『時間―その哲学的考察―』岩波新書、1976 年
茂木健一郎　『心を生み出す脳のシステム　「私」というミステリー』日本放送出版協会、2001 年
――――　『脳内現象』日本放送出版協会、2004 年
渡辺由文　『時間と出来事』中央公論社、2010 年。

b　自由

伊佐敷隆弘　『時間様相の形而上学』勁草書房、
上野　修　　「決定論の彼方、自由としての必然―スピノザの場合(後日考を付す―)」『西日本哲学年報』第 19 号、2011 年 10 月
一ノ瀬正樹　『確立と曖昧性の哲学』岩波書店、2011 年
大澤真幸　『<自由>の条件』講談社、2008 年

河野哲也　『意識は実在しない　心・知覚・自由』講談社、2011 年
佐藤国郎　『自由と行為の形而上学』学術出版会、2008 年。
高山守　『因果論の超克　自由の成立に向けて』東京大学出版会、2010 年
筒井泉　『量子力学の反常識と素粒子の自由意志』岩波書店、2011 年
野矢茂樹　『語りえぬものを語る』講談社、2011 年。
――――　『無限論』の教室
美濃正　「決定論と自由」『岩波講座　哲学２　形而上学の現在』、岩波書店、2008 年、p.161-186.
――――　「自由の問題」『関西哲学会紀要』第 25 冊、199 年度、p.90-96.
渡辺一夫　「自由について」『人間模索』講談社、1976 年、p.141.

c　その他

金森修編　『エピステモロジーの現在』慶應義塾大学出版会、2008 年。
中谷宇吉郎　『科学の方法』岩波新書、1958 年。
松野孝一郎他　「特集<複雑系>」『現代思想』青土社、1996 年 vol.24-13。

tel-00752855, version 1 - 16 Nov 2012